



第一部

運命の若者たち

反逆児 アトラス

塚越広治 著

「では、人に神の導きは不要だと仰るの？」

「私は自ら運命を切り開きます。エリュティア、妻としての貴女の進むべき道も示しましょう」



【主要登場人物】

◆ルージ国

- ・アトラス：主人公。父の歡心を買おうと武人の性格を装っている
- ・リダル　：ルージ国王でアトラスの父。
- ・ロユラス：リダルの愛妾フェリムネの息子で、アトラスの腹違いの兄

◆シュレーブ国

- ・エリュティア：シュレーブ国王女でヒロイン。
- ・ジソー　　：兄のオータルから王位継承権を譲られたシュレーブ国王。
- ・ドリクス　：エリュティア付きの教師でジソーの謀臣

◆フローイ国

- ・リーミル　：フローイ国王女。国王ボルススの孫娘
- ・ボルスス　：フローイ国王。

◆聖都（シリヤード）

- ・オータル：元はシュレーブ国の王位継承者。今は神帝の座についている
- ・六神司院の最高神官：六神司院を取り仕切る六人の神官たち

◆アテナイ軍（アテナイと称していますが、アテナイを中心とするギリシャ諸部族の軍）

- ・ エキュネウス : 増援としてアトランティスにやってきた若者。
- ・ エウクロス : アトランティス占領軍。ギリシャ諸部族の指揮官

「ああっ。ルミア、ルミア」

エリュティアは太陽に象徴される真理の女神の名を感動と感謝を込めて小さく呟いた。まぶしそうに目を細めて空を見上げた彼女が頭を振るたびに、豊かな金髪が幾筋も陽を反射して黄金に輝かせた。

初春の日差しが柔らかく暖かい。その日差しが川面の小さな波に砕けて跳ね返って、無数の小さな輝きでエリュティアを包んでいた。

エリュティアというのは、そう言う境遇に包まれた少女だった。自身が純な輝きを持ち、周囲も彼女を輝きで包む。アトランティスの中央に位置し、豊かな穀倉地帯を抱えるシュレーブ国王の一人娘である。

『シュレーブ国を訪れる旅人は、自分の女の自慢話が出来ない』と揶揄される。

シュレーブを旅する者は、事あるごとに、酒場の主人や宿の賄い娘にまで、お国自慢を聞かされるのである。

「なにしろ、エリュティア様ほど神々に祝福された人は居るまい」と

もちろん、酒場の主人がエリュティアに直接会うことなどあるはずもない。旅人の話は、そういう一般の民衆までが、エリュティアの存在を祝福するほど、人々の敬愛に包まれながら育ったと言うことである。事実、彼女は素直さ、優しさ、従順といった大人が少女に求める美德を兼ね備えていて、それを否定する人々が無かった。

エリュティアの足下で物音がして彼女を驚かせた。川面に目を移せば魚の鱗が陽の光を反射して輝いていた。

魚の跳ねた音だった、という当たり前の事が彼女を微笑ませた。ここはルードン河の上だ。アトランティスの大地を東西に貫いて流れる雄大な流れに身を任せる船の上だ。

甲板のほぼ中央に四本の柱で支えられた天幕があり、天幕の屋根には濃い紫色にルージ王家の旗が翻っている。エリュティアは天幕を出て、船尾側に上った太陽の暖かさを楽しんでいたのであった。

アトランティスの人々は『トライネが目覚めを運ぶ』という表現をする。植物の芽吹きに先立って大地の上を東から吹く季節風の女神トライネの神話に由来するに違いない。

春の暖かさに比して冷たく厳格な性格の女神であるという。そのトライネが彼女の髪を撫でている。まだやや肌寒い風である。エリュティアは両の掌で頬を包んで頬の冷た

さを感じたのだが、それでも終始機嫌良く不満が無いらしい。

そのエリュティアの姿を見守っていた侍女頭ルスララが呟いた。

「ほんと、お人形のように」

その表現も誤りは無い。侍女頭は彼女の手を引いて天幕に導いた。ほっておけば凍りついても機嫌良く景色を見ているかもしれなかった。侍女頭ルスララはエリュティアをソファに導いて彼女の肩からガウンをかけた。

「温かいものでも用意して参りましょう」

若い侍女に飲み物を準備するように言いつけ、エリュティアに向き直って提案した。

「温かいものでも飲んで、少しお休みなさいませ」

ルスララはエリュティアの精神が少し高ぶっていることを気遣っているのである。もともと不満や不安といった感情が欠落しているのではないかと思うほどだが、その反動か、この頃エリュティアは夜に夢にうなされたり、昼間はルスララの手を意味もなく握りしめたりする。そしてエリュティア自身、その理由を説明できないでいるのである。

「ここはルスララに任せてゆっくり落ち着きなさいませ」

ルスララのやわらかでゆったりした口調に合わせて、エリュティアの呼吸もゆっくり静かになっていった。ルスララの手にエリュティアの鼓動が伝わって共鳴するかのようだった。

「ああ、ルビウスの声が聞こえます」

それがこの時の二人の最後の会話になった。

エリュティアが彼女に身を任せた。ルスララは腕に感じる重みでエリュティアが眠りに就いたことを知った。彼女はエリュティアが呟いたルビウスという小鳥の気配を感じ取ろうとしたのだが感じられない。ルスララは呟いた。

「もう夢を見て居られるのか」

そして、暖かなスープを持ってきた侍女に目配せをして不要になったと伝えた。エリュティアがルスララの腕の仲で小さな寝息を立てていた。安心して身を任せるエリュティアが、実の子供のように愛おしい。

シリヤード
（聖都に着くまで、ゆっくりとお休みください）

そう思いつつも、一方では、アトランティスの女らしく不満を漏らした。

「まったく。男どもときたら。戦と政治の好きな馬鹿者ぞろい」

シリヤード
聖都。今回の旅行の目的地で、ルードン河の河畔にあるアトランティスの聖地であ

った。政治の中心地でもあり、この政治の中心という意味では総都（ラメス・スタジール）とも呼ばれる。

ルスララの不満は、政治に対して向けられている。ルスララに政治というものが理解できるわけではない。ただ、漠然と男どもがエリュティアを利用しようとしているように感じるのである。

いま、眠りに付いたエリュティアは夢の中にいる。十年前、彼女が初めてルードン河を下った時代である。

「ああ、ルミリア、ルミリア」

あの時も、エリュティアは寒気を裂く初春の日差しを見上げて、太陽に象徴される真理を司る女神の名を呟くように呼んだ。穏やかな春の船旅だが、なにやら不安な気配が漂っている。

夢の中の彼女は幼い子供だった。彼女は父親の命じるままに行儀良く座っているが、好奇心に満ちた視線だけは忙しく動かしている。彼女の頭上には彼女付きの侍女達でさえ持て余しそうな大きな帆があって、帆柱がきしむほどに風を受けている。何かが船を押し進めている。河の神ルルブだろうか、風の神ルシルだろうか？

考えてみれば、河を流れ下る船が帆を上げる必要はなく、流れに乗ればいいはずだった。とすれば、帆を力強く押す風は、エリュティアが自分を推し進めるものを待ち望んでいるということかもしれない。春の神トライネが花の香りの混じった優しい息吹でエリュティアの髪をかき乱す。彼女は幼い腕を頭に当てて、いたずら者を捕まえようとするが、彼女の小さな手がかむのは自分の髪ばかりだ。

彼女は不満気に助けを求めて右手の方を振り返った。そこに居るのは過去の度重なる戦を終えて凱旋した将軍たち。彼女は将軍たちの中央に父の姿を認めた。父ジソー王は自ら参加したと主張するタイラン遠征やズマ攻略の議論に熱中していて、彼女を助けてくれそうにはない。

エリュティアが今度は左へ振り向くと、将軍たちの中でただ一人、剣撃や灰塵の議論に飽き飽きしている神官が彼女に腕を差し伸べているのが見えた。

エリュティアはちょっと不思議な心持ちで神官の方へ歩いて行った。突然見えた川面のために彼女は足元がずいぶんと不安定なもののように感じたのである。トライネがまた彼女の髪に戯れて彼女は歩調を乱したが、神官の腕が彼女を支えた。

「トラウネが私にいたずらするのです」

彼女は顔を上げて神官に訴えた。

「トラウネではありません、トライネです。リュティア様」

神官は彼女の教師である。教師は幼い生徒の間違いを正して続けた。

「トライネもルミリアの娘です。あなた様の陽の髪がうらやましいのでしょうか」

この愛らしい生徒は神官ドリクスの自慢なのだった。彼は生徒を傍らに引き寄せて言った。

「シリヤードまであと一日あります。船旅を楽しんでおいでかな」

「トライネが私にイタズラするのです。」と、エリュティアは繰り返した。

「いいえ、皇女様。トライネはイタズラ者ではありません。トライネは四季の門の一つ、春の目覚めを司ります」

神官は手の平を皇女の額に当てた。幼い皇女は目をつむって祝福を受けていたがそっと目を開けて言った。

「お父様とドリクスと、それから……」

彼女は少し考えて続けた。

「オータル伯父様に^{セイネス}律法と正義、^{リエ}忠誠、^{ルズテス}がありますように。それから^{ルミリア}真理の女神の輝きがいつもこのアトランティスの上にありますように」

「おおっ……、ラミクはなんと多くの美德を授けて下さった事か」

ラミクとは月の女神の息子である。^{リカケー}子供の誕生に際して、その子供たちに何等の美德を授けるとアトランティナたちは信じている。ドリクスにはエリュティアのもとにラミクが美德が数知れぬほど集まっているように思われた。例えば、また新たに見つけたエリュティアが無邪気に笑うときに出来るえくぼがその一つだった。

彼はそう考えながらもまた、エリュティアの誤りを正した。

「しかし、オータル様は既に伯父様ではありません。あの方は^{スーイン}神帝となられたのです。神々に成り代わり、このアトランティスの大地とアトランティスの民を統率するお方です」

「レトラスは？」

エリュティアは物心ついた頃からその名を聞かされて憧れる伝説の人物が、ドリクスが語る神話の何処に当てはまるのか知りたかったのである。

「アトランティスの存亡の危機に際して、神々が^{スーイン}神帝のもとに裁きの英雄を差し向けます。それがレトラスです」

エリュティアは幼いながら、社会の仕組みの一部を理解している。ついこの間まで、自分を可愛がってくれた伯父のオータルが、もはや彼女の伯父ではなかった。シュレーブ国国王という人間から切り離されて、神に準じた^{スーイン}神帝と呼ばれる地位に昇り詰め、アトランティス九カ国を統べるアトランティナの精神的な支柱として君臨したのである。ただし、政治的な実権は持たない。

同時にエリュティアの父が空位になったシュレーブ国王となった。エリュティアにと

って優しくかったオータルが自分と距離を置いてしまったことが淋しい。

「おお、ドリクスよ」

将軍の一人が笑いながら神官の話を遮った。

「皇女はそなたの話よりも、顎髭に興味があるものとみえる」

エリュティアは自分を抱きかかえる神官の顎髭から手を引っ込めて、四人の将軍と父親の方を振り返ってしばらく観察していたが、ドリクスに視線を戻して断言した。

「真理の女神ルミリアと芸術の神ヘネポスに誓って、ドリクス先生のが一番立派だわ」

エリュティアは将軍たちがなぜ声を上げて笑うのかわけの分からないまま先生のひざを離れて立ち上がった。甲板が赤く染まっている。その甲板にエリュティアの影が長く伸びている。エリュティアは振り返った。ルードン河の遙か下流、大きく赤い夕日の中にシリヤード 聖都 の城壁が見える。

エリュティアは静かに不安な夢から目覚めて目を開けた。彼女は既に時を経て、元の十五歳の少女である。目覚めてみると、幔幕の隙間から見えるのは夢と同じく大きく赤い夕日の中のシリヤード 聖都 の城壁である。今や中心部の神殿を中心に、夢で観た過去のシリヤードより大きく広がりを見せている。ただ、その様子は欲望や憎しみなど人間の感情を押し込めて今にも崩れ去りそうにも見えていた。

「ああ、レトラス」

エリュティアは神話に現れる救国の英雄の名を叫んだ。混迷するアトランティスの大地で自分の非力さを嘆いているようにも思われた。

早朝の空がよく晴れ渡っていて果てがなく、雲1つ見えない。意識しなければ分からないほどのそよ風が、草の香りだの蜜蜂の羽音だのを運んでいる。大気の底に僅かに残った朝霧が草の露に凝結する音さえ聞こえそうだった。

ここはアトランティス大陸から東に百ゲリアばかり離れた島である。現代の単位で言えばアトランティス本土から80km離れ、本土は水平線の彼方で見えない。南北320km、東西90kmのルージ島本島と、その南部のヤルージと呼ばれる島があり、2つの島の島民は海神の血を引くという伝説がある。

本土から離れているために、人々は政治の情勢に疎いのだが、同時にどろどろに粘るような混乱に巻き込まれずにいる。

アトラスは草むらに手足を伸ばして寝そべって、身動きしない。時折、僅かに微笑む口元以外は凍り付いたように動かず、目もつむったままだった。彼は全身で光や風や色や香りを味わっているのである。そんな姿は、まだ無邪気さを残す少年の姿にも見える。

突然、彼は苦笑いを浮かべて呟いた。

「無粋な」

蹄が地をかく音がしたのである。剣の鞘が鞍と触れ合う音もする。彼の馬が全身で主人の帰りを督促しているのだった。彼は身近にあった木の枝を支えに立ち上がった。その表情が固い。王子アトラスは軍人の歩調で歩き始めた。もう、先ほどまで味わっていたものを踏み潰している事にも気づいていない。

「アレスケイア」

彼はなだめるような口調で愛馬の名を呼んだ。その背に乗って薄暗い灌木の林を抜けると景色は開けて、海に長く突きだした岬になる。見晴らしの良い岬から、砂浜の向こうを見ればこの湾を形作るもう一つの岬がある。沖合に漁場を抱える良港でもあり、砂浜から少し奥まった場所に漁師たちの住まいが点在する。波の音にかき消されて届かないが、荒くれの漁師たちが潮風に灼かれただみ声を掛け合いながら、幾艘もの船を出す光景が広がっている。

アトラスはそんな光景を、感情を交えずに眺めた。漁師たちの指揮を執るかのような

ひときわ長身の若者が目を引く。名をロユラスという。兄だと感じたことはないが、少なくとも自分より父親の愛情を受け、そして、その愛情を拒絶している若者である。

アトラスは硬い表情のまま、手綱を引いて向きを変えた。両足で愛馬の腹を蹴る前に、アレスケイアは主人の意図を察したように駆けだした。

軽く十分ばかり駆けて、アトラスはルージの王都バース市街を抜けて、王城の門をくぐった。王城とはいえ、現代の我々の目から見れば、王族が居住する大きな館を塀と堀で囲った程度のものである。彼は館の回りをぐるりと駆けて厩の前に来ると、荒っぽく馬を降りて手綱を厩係の小物の手に渡した。アレスケイアはまだ運動が足りないと言うように首を振っている。

「あら、元気のいいこと。さすがに、^{タレヴォー} 蛮族 を蹴散らしたオスロケイアの血筋だわ」

アトラスが振り向くと、彼の妹ピレナが笑っている。オスロケイアとは彼らの父のリダル王が遠征先で生死を共にした軍馬の名である。

彼の愛馬が父の馬と比較されるところに、今の彼の立場が象徴されている。勇猛さをもって知られるリダルの息子として生まれながら、何ら実績を示す機会がない。王の館の中にあって、人々が彼をリダルの息子として見る視線が、幼い頃から彼の劣等感を刺激してきた。それに加えて今一つ、人々も口にしようとしなない理由がある。アトラスが浜辺で見かけたロユラスの存在である。

アトラスはその思いを振り払うように妹に笑顔を向けた。

「女は、戦乱にあっては、夫や子供を失うと嘆くくせに。平和な世にあっては、武人の精神が信じられぬと嘆くのか」

「ごめんなさい」

ピレナは子供らしい素直さで兄に詫びながら、兄のしかめっつらを可愛いと思った。彼女は時折そうやって人の心を試そうとする。

「お兄様が出かけてすぐにね、お父様からの使者が着いたの」

彼女はアトラスを導くように寄り添って歩きながら言った。アトラスは黙りこくったままだ。

「お兄様に、^{シリヤード} 聖都 へ来なさいって」

「それが？」

「きっと、アテナイ討伐の軍を起こすのよ」

アテナイという言葉が、ピレナのような政治に疎い娘の口を突いて出るほどアトランティナの間で ^{タレヴォー} 蛮族 の象徴として、アトランティスを抑圧する勢力の象徴として使われる。長い外征で国力を損耗したアトランティスは、その聖地に占領軍としてのアテナ

イ軍を受け入れることを条件に講和した。その占領軍は僅か二千である。彼らにとって屈辱的な事だが、その兵を攻め滅ぼせば、東の大陸から数十万の遠征軍が攻め寄せて来ると言われていた。国力を疲弊したアトランティスは抗うことも出来ず、大地は戦火に見舞われるという恐れを抱いているのである。

考えてみればおかしな話で、十数年前、彼らアトランティナは新たな領土を求めて海外に攻め寄せ幾つもの戦を戦った。最初は勝者の立場から戦に負けた。今はわずかな敵軍にアトランティスの心臓とも言える聖域を占領されて我が物顔に振る舞われているのである。その点、ピレナは無邪気だった。

「多分、お兄様も軍を率いて、^{タレヴォー} 蛮族 と戦うの。素敵だと思わない？」

客間に入ると、母親の王妃リネと彼女を取り巻く侍女の姿が目についた。アトラスは妹のおしゃべりを制して母親に挨拶をした。

ヴェスター国の貴族が王の館を訪れた折りに、秘かに「女の館」と称したことがある。館に住む女たちの実権が強く、些細なことにまで政治に口を出すという意味である。その頂点がアトラスの母リネだった。

雰囲気から察するに、重要な知らせをもたらす使者らしい。その顔にはアトラスにも見覚えがある。父に古くから仕える老僕で、その名をコロシスという。そのコロシスの通された部屋が王妃と侍女団で固められているのも、女の館の状況をよく表している。

「アトラス、おお、アトラス」

リネは息子の名を叫んだ。コロシスは口上を伝える本当の相手に気づいて、片ひざを床について、右手を胸に当てる挨拶をした。次いで口上を述べようとするコロシスに、リネはその言葉を制するように言った。

「アトラス。シリヤードの父上からのお召しじゃ。いよいよ、アテナイ討伐の軍を出すのに違いない」

侍女たちは口々にリネの考えに賛同し、その際のルージ軍の勇敢な様相や、それを率いるリダルやアトラスの姿を口にしてリネの歡心を買おうとしているようでもある。リネとその侍女団、妹のピレナはアトラスより先に口上を聞き出していたものらしい。アトラスは少し不快なものを感じたが、その母親を制して、ひざまづいているコロシスに向かって命じた。

「口上を続けよ」

コロシスの口上は要約すれば、さきほどから妹ピレナや母リネの言うように^{シリヤード} 聖都 に赴いている父が、彼を呼び寄せようとしているのだ。ただし、アテナイ討伐軍というの

は彼女らの推測だろう。兵を挙げるとすれば、兵を集めるべく地方の領主にふれを回しておかねばならないがその指示がない。リダルは息子に数人の近従とともに^{シリヤード}聖都に來いと言っているのみである。目的も何も告げずにただ來いと言う。

アトラスはこの一室の様子を見ながら、父が息子の召喚の目的を告げない理由が分かるような気がした。

しかし、アトラスにとって目的が不明であるにせよ、^{シリヤード}聖都の地はひどく魅力的だった。自らの力量を示したい若者にとっては、アトランティス最大の都市でありアトランティスの中心地であるそま都市は、かっこうの場所のように思われた。そしてこの思いは、^{シリヤード}聖都に着くまでの間、アトラスの中で、希望や期待や不安や焦りを加えて膨らんで行くのである。この館では彼は好奇心豊かな少年の心を捨てて、武人の仮面をかぶり続けている。今のアトラスの表情はその仮面が幾分ずれて、期待に満ちて少年のような晴れやかな表情をのぞかせていた。

ラクトの月15日にアトラスは、バースの港を出港した。アトランティス本土に着くのは4日後、そこから陸路ルードン河に沿って遡り、^{シリヤード}聖都に到着するのは7日目の朝である。

アトラスは懐にしまっていた袋の口を開けた。一粒の真珠が入っていた。形はやや歪だが水の滴の形にも見え、美しい光沢とともに^{リカケー}女神の涙と称されていた。アトラスの妹ピレナの持ち物だった。

「お兄さまのお眼にかなった女性に、そして私の将来のお義姉さまに」

ピレナはそう言って、大切な宝物を兄に託したのである。そう言った辺り、利発なピレナは、兄がアトランティス議会の父の元に召された理由が政略結婚だと気づいていたのかもしれない。

シリヤード 聖都。年に一度、各国の王は スーイン 神帝 が主催するアトランティス議会に集う。その議会の間、王が住まうための各国の王の館が聖都の中心部に点在している。その一つ、フローイ国王の館の門に明かりが灯った。王の帰還を察知したフローイ国の執政マッドケウスが、館の門でフローイ国王ボルススを迎えた。

「ご機嫌でお戻りなされましたな」

「話が進展した。リダルは申し出を受けるだろう」

「リダル様は、何か注文でも」

「あとは面会のために良き日取りを決めるのみ」

「我々が決めるのですな」

王と王が信頼を置く執政の会話だが、腹の探り合いをするような表現になる。分かりやすく言えば、フローイ国がルージ国に何かの申し出をされていて、相手の国王リダルがその申し出を受けそうだ。ただ、申し出を受けるにあたり、何かの条件を突きつけてきたかという事である。

ボルススは執務室に足を運びつつ言った。

「ふん、分かりきったことを。我が進むべき道が、我らが館以外にあるものか」

フローイ国が進むべき方向は、議会でも相手国の意図でもなく、この館の中で張り巡らされる策謀のみで決まるといっているのである。

本人たちに悪気はないが、この人物たちが腹を探り合うような言葉を交わすと、陰謀じみた雰囲気漂う。質朴な頑強さに、あっけらかんとした明るさを持った陰謀が織り込まれて生きていと表現すれば、フローイ国の人々の気質が分かるだろうか。

スーイン 神帝 の諮問機関たる ロゲルスリン 六神司院の神託によって始まるアトランティス議会が、既に3日目を迎えている。議会とはいえ国家間の紛争を調停するのみで、各国の内政に踏み込めるものではない。荒っぽく言えば、各国が勝手気ままな主張をする雑談の場である。有意義な結論が出るわけがない。ただ、宗教的な支柱としてアトランティナ（アトランティス人）をまとめる唯一の拠り所であるに違いない。

しかし、タレヴォー 蛮族 との講和以来、その精神の拠り所も タレヴォー 蛮族 に占拠されている。占領軍の主力をなすアテナイ軍は僅か二千の兵士で、聖域シリヤードを人質にしてアトランティスの内政に食い込んで治めているのである。タレヴォー 蛮族 が社会を乱しているという向

きもあるがボルススはそう考えては居ない。もし、シリヤードを占拠するアテナイという軍がなければどうだろう。神帝^{スーイン}には実質的な政治をとりまとめる権力はなく、アトランティス各国は再び分裂して争うことになるだろう。

アテナイという軍はアトランティナの敵愾心を煽り、アテナイに向ける共通の憎しみによってアトランティス各国がまとまっている。そういう効用を認めていた。

「リーミルさま、困ります」

侍女のやや甲高い声音の叫びで、ボルススは母国から呼び寄せた孫娘の来訪を知った。

「いいのよ。人に変わりがあるものですか」

そう言ったリーミルの言葉に、フローイ国の人々の内情が窺い知れる。彼女が生まれ育ったフローイ国は、絢爛たる文化と学術の中心地シュレーブ国の南西に隣接してはいる。しかし、その境界には深い山岳地帯があり、南西に向かう街道はそこで溶けて消えるように潰え、文化や人の気質が異なる。フローイにおいて、孫娘が祖父に会うというのに、シュレーブ国のように謁見を求め場所を選んで会うという習慣は無い。用があれば執務室であろうとどこへなりと顔を出す。良く言えば気さくだが、シュレーブの人々から観れば礼儀知らずの田舎物に違いない。

ただ、^{シリヤード}聖都にやってくると、フローイの人々も世間体を取り繕って、シュレーブのごとく堅苦しい礼儀作法が要求される。侍女は皇女にそんな作法を求め、皇女はそれを拒絶してフローイ風に振る舞うと宣言したのである。

「嵐を司る悪神も、そなたの行く手を遮ることは出来まい」

ボルススは笑いながら孫娘を評した。

「おじい様も、お元気ね」

フローイ国王ボルスは孫娘に首を抱かれつつ、側近に手を振って人払いをせよと命じた。信頼できる部下たちだが、孫娘との会話ではこの孫娘のペースになる。自然に本音が出、聞かれたくは無い種類のことだった。

「お前も、変わりがないな」

祖父の言葉を聞き流しつつ、リーミルは無邪気に笑って、傍らの葡萄をつまんで口に運びながら尋ねた。

「グライスの花嫁に続いて、今度は、姉の私にも婿を探してくれたというわけかしら」

リーミルの言葉もフローイ流に染まっていて言葉の裏がある。弟のグライスを政略結婚の駒として使った後、今度は私を二手目の駒として動かすつもりかと語っている。

ボルススから見て孫娘の笑顔は作り物ではない、しかし、祖父の真意を伺う好奇心じ

みたものがある。

(もしも、これが男であったら……)

ボルスは今までに何回繰り返し考えたかわからぬことを思った。勘のいい孫娘に舌を巻いたのである。王女リーミルをルージ国に輿入れさせて、陸軍と海軍とを誇る両国の関係を強化すれば、アトランティスに覇を唱えることが出来るだろう。

この孫は、自分が^{シリヤード}聖都に召しだされたそんな理由に気付いて、祖父に探りを入れていたのである。並みの人間なら小賢しいと腹立たしい思いもするのだろうが、孫娘への愛情がその腹立たしさを打ち消した。そして、唐突な孫娘の質問に、ボルスは本音を答えねばならない。

「ルージ国にアトラスという王子がいる。どうだ？」と率直に言った。

リーミルはまだ出会ったことも無い人物に眉をひそめて質問を重ねた。「セキキ・ルシルですって？ おじい様は、私に生魚を食えと？」

その明快な物言いに、ボルスは苦笑した。“セキキ・ルシル”生魚を喰らう者という意味がある。ルージの人々に対する蔑称である。ルージは島国であって新鮮な魚介類に不自由しない。新鮮で、火を通さない生の魚の切り身に酢や油で和えた調理方法が存在する。その料理はマリネを想像すれば近い。野蛮だという食べ方ではないが、アトランティナに共通する食習慣ではない。

ボルスは孫娘を説得するように短く言った。

「まあ、考えてみよ」

「ふうーん」

リーミルは興味なさげに、明確な回答を避けて身を翻し、執務室から姿を消した。

数刻後、リーミルの姿は ^{シリヤード} 聖都 端の市場にあった。

ギリシャの哲学者プラトンの著作で現在に伝わるアトランティス大陸の姿は、神が大陸を同心円をなす陸地帯と水地帯に分割して作り上げた。その中心地に海神ポセイドンの聖域が位置するという、実に秩序だった姿をしている。

これは、アトランティス大陸ではなく、アトランティスを代表する都市国家シリヤードの姿が伝わったものではあるまいか。

もともとは、^{ルミリア} ルードン河の川辺にあった真理の女神（ルミリア）の聖域を示す石柱や神殿と巡礼者たちを迎える安宿が、いくつか建ち並ぶだけの貧相な光景であったらしい。

ある時から、安宿が追い払われ、神殿を囲むように九つの国の国王が集う議会や、国王が居住する館が加わって、それらの区域を守るために堀と城壁が築かれた。もちろん国王に仕える数多くの家臣や召使いの居住区が必要となる。そんな区画が内側の城壁を取り囲んでその外側に堀が作られた。数多くの人々に食糧や物資を供給するための市が立ち、その市が拡大して物資を求める人々が行き交い、それらを守る為に周囲に城壁が築かれて巨大な都市国家となった。

が、今は、その中央に占領軍たるアテナイの一軍がいる。

(ふう……)

リーミルは肩の力が抜ける心地よさを感じていた。市外もこの辺りに来ると雑多な濁った雰囲気、飾り気のない清濁生の正直さが心地よいのである。彼女自身は堅苦しい王女の衣装を脱ぎ捨てて町娘の衣服を着用している。庶民らしい貧相なサンダルを履いた足が軽やかでこの町の景色に溶けこんでいる。

そんなリーミルの鼻をアトランティナがハラサと呼ぶ柑橘系の果物の香りが刺激した。ハラサ水売りが街路に出している店の軒先である。冷たい井戸水に蜂蜜とハラサの絞り汁で香りづけにハラサの皮を薄く刻んで入れる。庶民の飲み物である。

リーミルは懐の金袋に手をやって、両替を忘れたことを悔いた。金袋には3粒ほどの銀の小粒が入っている。こんなもので代金を払っても、貧しいハラサ水売りはお釣りを払えないに違いなく、第一、リーミルの身分がばれてしまうだろう。

しかし、ここいらの人々は細やかな配慮をする。リーミルの素振りから彼女が今日は

金を持っていないことを悟ったらしく、ハラサ水売りは昨日顔なじみになった客に、カップを差し出した。

「飲みな。どうせ、もう温くなって売り物にやならねえや」

客を待つ間に冷たいハラサ水が温まってしまっていて売り物にならない。タダで飲めと言うのである。

「ありがと」

リーミルはそう礼を言って、店の傍らの縁台に腰掛けてハラサ水を喉に流した。冷たく新鮮な感触が、心地よく喉を通過した。彼女はこの区画の雑多な雰囲気の中に溶けこんで違和感が無い。ただ、リーミルから見ても、この区画は心地よくはあるが、日常の時間が流れる退屈さを感じている。

(あらっ?)

そんなリーミルが、ふと目を引かれた姿がある。

(グラトあたりから田舎貴族が迷い込んできたのかしら)

その青年の姿はどう見ても、目的地を見失って道に迷っている。

目的地の方向を探ろうとして背伸びをして見たり、

自分の場所の情報を得ようときょろきょろと辺りを見回したり、

そして、忙しく行き交う人々やその数の多さに面食らって、人に道を尋ねることが出来ずにいる。何か、眺めているだけで面白い。ただ、その純朴さには好感が持てる。

その青年。ルージュから海を渡ってやって来たアトラスである。アトラスがなすことなく足を止めて一息ついていると、自分を観察するかのような少女と視線を合わすことになる。リーミルとアトラスの初めての出会いと言えた。ただ、リーミルは一瞬にしてアトラスの視線を避けた。別のよからぬ気配がしたのである。

(二人?)

リーミルは自分の前方から下心を隠しもせずにやって来る男の数を数えたが、背後にもう一つ同じ種類の気配を感じて数を修正した。

(いえ、三人ね)

この区画には警察権力の手が行き届きにくく、ヤクザな荒くれどもが集まる場所でもある。

「やあ、お姉さん。ハラサ水じゃなくて、酒をおごってやっても良いぜ」

男の一人がリーミルにそう声をかけた。リーミルは言葉を聞き流しながら、ハラサ水売りの店主に目配せをして、もっと距離を置いてトラブルを避けなさいと指示をした。

既に、リーミルと男たちの周囲には事の成り行きを見守る人々の輪が出来ている。

「姉さん、お前、耳が聞こえねえのか？」

「いや、俺たちを見ても驚く様子がないってなあ、目が見えねえのかもしれねえ」

リーミルは絡む男たちのねちっこい言葉を聞き流して、カップに残ったハラサ水を飲み干した。彼女は荒くれ男たちなど目に入らぬように微笑んだ。

(あら、なんという勇ましいこと)

アトラスの姿が目に入ったのである。この種のトラブルはこの区画では珍しいことではない。この区画で生活する人々は、トラブルに興味を示しつつも、男たちが周囲を威圧するように見回す視線を避けてうつむいて避けている。

そんな中で、事の成り行きに戸惑っているが、目の前で見ず知らずの女が荒くれ男に絡まれて難渋するという状況に、アトラスが男たちに向ける視線が鋭い。

男の一人が返事を促すようにリーミルを脅した。

「お前さん、返事をする口がねえのか？」

にやにやと笑う男たちの輪が小さくなってリーミルを囲んだ。

「女が欲しければ、マグニトラにでも行く事ね」

リーミルはすましてその方向を指差した。ルードン河を挟んだ対岸にマグニトラと呼ばれる歓楽街があり、売春宿が建ち並ぶ。リーミルは男たちに売春婦を買えと言うのである。

「なにおっ」

男たちはそう言いつつ息をのんで黙った。彼らを見つめるリーミルの目に威圧感があり、それ以上の言葉を発することが出来ない。この辺り、リーミルは彼らをあしらうのには慣れている。

リーミルはふと男たちの視線の向きが変わったのに気付いた。

あしらわれた彼らの怒りの矛先が、どうやらリーミルが興味を示しているらしいアトラスに向いていた。周囲の人々に混じって、男たちの視線に向きあうアトラスは一人目立つ。

「あんっ、アレがお前の色男ってわけかい？」

アトラスにとって迷惑なことに、男たちの感情は怒りから憎しみに変わって、アトラスに向いた。

「おいっ、色男さんよ。女の前で勇敢なところ、見せたかねえのか」

そんな言葉の口調を聞いていれば、男たちはアトラスが一人と見て侮る様子が伺える。野次馬が三人の荒くれ男に後ずさりをし、アトラスと男たちを囲む輪になった。

「無礼な」

アトラスは怒りを見せたが、その怒りが男たちの哄笑を誘った。

「おいおいっ、田舎貴族さまが、俺たちを無礼だとよ」

「無礼なのは、臆病なくせに長刀を帯びてる田舎貴族さまだけ」

男たちは自分たちの言葉に興奮を募らせ、三人は短刀を抜いた。

「餓鬼はしらねえだろうが、刀ってのは、刺されると痛いんだぜ」

「その腰の剣はただの飾り物か」

真っ正直な性格のアトラスはあしろうということが出来きず、男たちに合わせて剣の束に手をかけた。

「ふうん」

リーミルは他人事のように感心した。腰の重心を下げ一呼吸で腰を捻って剣を抜き取る様子にあの若者が剣に練達している様子が伺えるのである。ただ、剣の切っ先を人に向けるときの呼吸が荒く、あの若者は人を斬った経験はあるまい。この男たちは争い事を避けるすべも知らず放っておけば殺し合いをするだろう。そして、剣の扱いに慣れた若者は力加減も知らずに剣を振るって三人を切り捨ててしまうに違いない。

あの三人が殺されてもどうと言うことはない。ただ、あの無垢な若者に殺しをさせるというのは気が引ける。リーミルはハラサ水売りが壺の中で蜂蜜をかき混ぜてるのに使っていた棒を手にして立ち上がった。

「ちょっと……」

リーミルは手にした棒で、手前にいた男の後頭部を突き、こちらに振り返りさせてから、棒を振り下ろし頭部を激しく打った。棒を受けた男は、頭を抑えてうずくまった。もう一人が襲いかかってきたのを、リーミルは身を翻して避けて、足払いをかけた。男はつんのめって店の縁台に突っ込んだ。リーミルはやすやすと棒で男の後頭部を打ち据えて気絶させた。

リーダー格の男が残った。一瞬、逃げ道を探した気配がある。しかし、周囲の人々の視線に自分の腕力を誇りたいという自己顕示欲が勝った。たしかに、大柄で周囲を圧する体格の男である。

「この女が」

さらに腕力を誇示するように太い腕を持ち上げて威嚇した。ただ、体格や腕力を誇示する姿勢は酷く無防備になる。

(頭の中まで、ケダモノなの?)

リーミルは手にした棒をちらちらと振って見せた。先ほど仲間がこの棒に打ち据えられたという印象があり、男の注意がこの棒に集中した。その刹那、リーミルは右の足を蹴り出した。蹴り出した右のつま先が的確に男の股間を捉えていて、何かがグシャリと潰れたような感触が伝わった。

(きゃっ)

リーミルはその感触の気色悪さに内心悲鳴を上げた。しかし、男は股間を押さえたまま声も出せずに悶絶して地を転がった。

「これが、フローイの流儀よ。女を侮辱する男はこうなるの。」

リーミルはそう言い放ち、周囲を眺めて破壊されてしまった店を眺めて、懐に手を入れて小さな金袋を取り出し、店主に投げ与えた。

「これで店を直しなさい」

再び周囲を眺め回して、使うことのなかった剣を鞘にしまったアトラスの手引いた。

「さあ、場所を変えましょう」

二人はしばらく人混みを抜けて足早に歩いた。アトラスはリーミルに手を引かれるまま素直に歩いた。歩きつつアトラスは言った。

「礼を言う。助けてもらったようだ」

そう言うアトラスの純朴さにリーミルは好意を持った。愛玩動物のように可愛い。並の男なら女に強がってみせるに違いない。しかし、この若者は自分の剣の腕を誇ることもせず、トラブルを避けてくれた礼を言うのである。リーミルにとって、初めて観る種類の男だった。

「あなた、シリヤードは初めて？」

「昨日、着いたばかりだ」

「それで、ふらふらと出歩いて、宿の場所を見失ったの」

「ああ。迷っていた」

そんな短い会話の中、リーミルは若者の言葉に違和感のある訛りがあるのに気付いた。彼女の祖父のボルススは武人ながら政略に長けた男で、身内の政略結婚やら、各地に潜入させた密偵やら、各国の協力者らがリーミルが幼い頃から住まう王宮に集う。自然、リーミルは各国の言葉の言い回しや訛りに馴染んでいるはずだった。そんな訛りに当てはまらないのである。かといって、占領軍の^{タレヴォー}蛮族の言葉遣いではなく、庶民ではあり得ないほど礼儀正しい物言いをする。

「あやつらの頑固さと純朴さは、策謀には向かぬ」

リーミルの祖父ボルススがそう言ったことがある。ルージの人々の気質は裏工作には向かず、ボルススが唯一策略の手を伸ばしていない人々。リーミルが聞く機会がないとすればルージの訛りである。

（なるほど、ルージ者ね）

ルージ国の出身者だと思いついたのである。彼女は心の底でアトラスの故郷を言い当てた。

「貴方、ルージの人？」

「私が、田舎者だと？」

「田舎者だというなら、まあ、私も似たようなものよ」

リーミルは水路の傍らのベンチにアトラスを誘って座らせた。行き交う人々の姿は多く、彼女たちに興味を示す者はいない。

二人は意図して互いの名を名乗るのを控えた。相手の名を尋ねようとするれば、自分の名を名乗らねばならない。アトラスは偽の名を名乗ると言う知恵が回らず、リーミルはこの男の純真さに、偽りの名をすり込むことには罪悪感がある。

「ご家族は？」

「故郷には母と妹がいる。父はこのシリヤードに」

「家族が離ればなれで、寂しいこと」

「いや。父はそうは思っていない」

「どうして？」

「父は異邦人の女とその息子の方を愛している」

アトラスも目の前の女性が自分と同じ辺境の人間だと知って少し心を許したように、身分は隠したまま、生い立ちや境遇を語っている。

自分より兄のほうが愛されている。

自分を愛してくれる母のために。

普通なら隠しておきたい本音を、まるで姉に悩み事を語るかのように話している。

(なんとまあ、素直な男)

知りたいことを素直に話してくれるか、語れずに正直に口ごもるだけ。フローイ風の言葉の裏に込められた腹の探り合いと比べれば、なんと単純。リーミルはこの正直なルージュの若者に尋ねたい事がある。もちろん、祖父ボルススが勧める縁談の相手の評判や人柄についてである。

「ルージュにはアトラスという王子がいるそうね」

核心を突いた質問にアトラスは面食らって口ごもった。リーミルは勝手な推測を込めて、アトラスに返答を促した。

「何か、伝説のレトラスのように素晴らしい肉体の持ち主で、勇敢さは比類ないとか言う噂だわ。本当なの？」

アトラスはもっとむっつりと黙りこくった。しかし、その表情を観察したところ、決してリーミルの言葉に不快感を感じている様子はなく、リーミルの指摘を密かに喜んでいる感情が滲み出している。

どうやらこの男にとってアトラスという人物名は口にしがたいらしい。リーミルは、ふっと吐息を漏らした。若者が腰に帯びる剣。その剣の束に青緑の輝きを放つアクアマリンの宝石がはめ込まれているのに気付いたのである。アクアマリンと言えばルージュを象徴する色だが、そんな宝石を剣の束にはめ込んでいるのは王家の人間だけである。

(これが、アトラスなの?)

そう気付いて、リーミルは興味深げに質問を重ねた。笑顔と裏腹に尋ねる内容は強烈である。

「お答えがないのね。では、ルージの牙狼王リダルが戦をしたがっているのは本当なの」

アトラスはリーミルの言葉を言下に否定した。

「そんな事があるものか」

「でも、このシリヤードでは、そんな噂で一杯」

アトラスは考えつつ言葉を繕った。

「噂は事実ではない。王宮で王が戦を始めるなどと口にするのは聞いたことがない」

アトラスはリーミルの明るい笑い声に言葉を途絶えさせた。

「あら、ごめんなさい。あなたを笑ったんじゃないの」

リーミルはそう言って、心の中に残りの言葉を吐き出した。

(なんという、運命の神(ニクスス)のお導き。いえ、恋愛の神(フェリン)の悪戯?)

『王』という単純な言葉の使い方が不自然だった。家臣が王を呼ぶときは、信頼や敬愛を込めて『我らが王』と呼ぶ。また、目の前の男の若さの家臣が王宮で王に謁見して言葉を交わすことはあるまい。リーミルは僅かなヒントから、目の前の若者がルージの王子、彼女が祖父によって政略結婚させられようとする相手だと判断してのけたのである。

彼女は立ち上がって、一時の別れの言葉を吐いた。これから早急に祖父の所へ戻って決心をつけに行かねばならない。

「残念だけど、今日はここまで。貴方を送って行ってあげることは出来そうにないわ。」

その通りである。この迷子の王子をルージ国王の館に送って行けば、まだ隠しておきたい自分の正体がばれてしまうし、アトラスも彼自身が隠しているつもりの正体を暴かれるのは望むまい。リーミルは立ち上がって水路の方を指差した。

「道を辿ってもダメよ、迷うだけ。水路の幅が広くなる方に向かいなさい」

単純な理屈である。ルードン河から水を引き込んで広がっている水路である。交差する水路を幅の広くなる方を選んで辿ればシリヤードの中心に近づけるのである。

「おいっ、娘」

アトラスは戸惑いつつ駆け去ろうとするリーミルにそう声をかけた。リーミルは笑い

ながら振り返った。この若者は女性に声をかけ慣れていない。慣れていればもっと別の言葉があるだろう。

(女についても、田舎者なのね)

そう考えるリーミルに、アトラスは左腕につけていた腕輪を外して渡した。

「礼だ」

田舎者らしい律儀さでトラブルから救ってもらった礼にと、腕輪をはずして与えるつもりなのである。リーミルは腕輪を受け取りつつ礼の代わりに言葉を放った。

「また、近いうちに会えるでしょう」

リーミルは駆けながらやや後悔している。アトラスの目の前で、見ず知らずの男の股間を蹴り上げるなどということをやってみせたことを。

ただ、リーミルが好意を持ったこのアトラスの素直さは、アトラスが纏っていた仮面を剥いだ姿で、アトラスの家族から観れば思いもよらない姿に違いない。

姿を消したときと同様に、ふらりとリーミルが王の執務室に姿を見せた。ボルススは笑いながら、謁見の許可を求めるという儀礼を無視する孫娘を改めて叱った。

「ここでは礼儀をわきまえよ。我々が礼儀をわきまえぬ田舎者だと噂が立つ」

リーミルは祖父の叱責を聞き流すように言った。

「私、田舎者もいいかなあって思うのよ」

ボルススは孫娘の言葉に含まれた田舎という言葉が意味するものを察した。

「例えば？ ルージか」

「たとえ、ルージ国に行ったとしても、生魚は食べなきゃいいのね」

「それは、アトラスに嫁いでも良いということか？」

「まあね」

「どういう心変わりだ？」

「愛を司るフェリンの悪戯に引っかかったと言うところかしら」

ボルススの見るところ、普段は装飾品にはさほど興味を示さない孫娘が、腕輪をもっている。孫娘は腕輪を見せびらかすように手の中で転がしたり、指で回したりした。その癖、大事な物を扱うように落として傷つけるのを恐れる様子もある。

「では、面会を進めて良いのだな」

ボルススはそう言ったが、政治と愛は切り離している男である。孫娘の意志と関わりなく政略の道具に使う。日程は既に決まっているはずだ。その日程をリーミルは確認した。

「いつになるの？」

「六日後、ミッシュー明けになる」

アトランティスの暦でターアの月の後、ミッシューという一年の不浄が集まるとされている不吉な日が5日間ある。その日を避けて吉日に二人を娶せる手はずを整えていると言うのである。

祖父と孫に互いの腹を探るような沈黙があり、リーミルは話題を変えて沈黙を破った。

「見て、私にはぶかぶか」

リーミルは手の平で弄んでいた腕輪を、するりと腕にはめてみせた。ボルススは孫娘に提案した。

「気に入ったものならば、手直しさせれば良からう」

フローイ国は山岳地帯が多く、銀を産出する。人々は銀を使った細工が巧みで、フローイの銀製品としてアトランティスで鳴り響いている。そんな熟練した細工師に依頼すれば、腕輪の大きさなどリーミルの腕に合わせて上手く作り直すに違いない。

「いいわ、このままそっとしておきたいから」

リーミルはそう言って、するりと身を翻して部屋から消えた。

「水路を辿りなさい」

そんな少女の言葉に素直にしたがって、アトラスは、ルージ国王の館にたどり着いた。

「王子、我々に無断で外出されるのは困る。警護の役が果たせぬ」

帰ってきたアトラスを見つけてそう言ったのは、近習のザイラスという男で、非難の口調を隠さず、王子との距離感を感じさせない。この口調がルージという国を象徴している。

漁村の人々が船に乗って漁場に向かう。凧や嵐に協力して立ち向かい、豊漁の時も不漁の時も、得るものは等しく分け合う。その中で、人々は自らの責任を果たす事によって対等で、船を操る船長はその判断の正しさその統率力によって人々を付き従わせるのである。

極論すれば、ルージという国は、そんな漁村を国家にまで拡大したようなものである。組織としては、酷く未熟な国家に違いない。しかし、指導者に恵まれれば、目的に向かうのにこれほど無駄を排除した組織はない。

「すまぬ」

アトラスはザイラスの非難を受けて素直に詫びた。いい訳をする必要は感じなかった。幼い頃から生活を共にし、歳の離れた兄のように感じている関係である。ザイラスは弟を見守るようにそれ以上の非難を避け、アトラスを居室に導いた。

「我らが王子のお戻りだ」

ザイラスは部屋の中の少年たちに声をかけた。アトラスは部屋に入るや否や顔ぶれを見て親近感を込めて三人の名を呼んだ。

「オウガヌ、テウスス、ラヌガン。お前たちも到着したか」

少年が一人ふくれっ面で不満を露わにしつつ抗議した。

「我らが王子よこのスタラススの名をお忘れか？」

「おおっ、お前も来たのか」

四人の少年の年齢はアトラスと大差がない。アトラスと共に寝起きを共にするように育てられた若者たちである。やがて、王になるアトラスを支えるべく、リダル王がアトラスにつけた側近である。ザイラスを伴ってシリヤードにやってきたアトラスから一歩遅れてたどり着いたのである。

「我が王とは」

オウガヌか尋ね、アトラスはため息をつくように言った。

「まだ面会ができぬ」

「よそ者とは面会しているというのに、一人息子のアトラスと顔を合わさぬとはどういう事だ」

「我が王を批判するのは差し控えよ」

年長のザイラスがそんな言葉でテウススの疑問を封じた。

アトラスが尋ねた。

「よそ者？」

「シュレーブのドリクス殿が、我が王に表敬訪問においでになった」

「ドリクス？ 聞いたことのない名だな」

「さもあるう、議会にも軍事にも関わりがない。我々が名を知る人物ではない」

「名もない人物が、我が王と謁見できるものか」

「わけは知らぬよ。ただ、エリュティア様の教師ということだ」

名を知られていないということ、ただの教師としての肩書きは、密談を交わすのに適しているのである。この時期、ドリクスという人物がシュレーブ国王女の教師であると同時に、稀代の策謀家であることを知るものは少ない。

同じ時、シュレーブ国王の館では、エリュティアがルミリア神殿で^{スーイン}神帝への謁見を済ませて帰宅し、出迎えた教師ドリクスがエリュティアの手を導いて館のテラスに誘った。

「いかがでありましたか？」

「お元気であられましたか……」

エリュティアが表情を曇らせた。エリュティアの優しい伯父は、生気を失いように元気が無く、懐かしい姪に向ける笑顔に明るさがなかった。

ドリクスはその事情が分かる。国内の情勢が思わしくない。複雑に入り組んでから見合った情勢が重く^{スーイン}神帝にのしかかっている。

ドリクスはエリュティアの傍らで、エリュティアにつき添う侍女に手を振ってみせ、人払いをせよと命じた。エリュティアは振り返って侍女に笑いかけ、指示どおりにせよと指示した。

(あらっ)

エリュティアはドリクスが豊かに蓄えたあご髭に、幾本もの白髪を見つけたのである。頭髮も白髪の方が多いのではあるまいか。年齢を考えれば、彼女の教師は間もなく四十五歳に達する。人々の平均寿命が五十歳を僅かに越えるこの社会では、もう老境に達していると考えても良い。ドリクスは年相応に落ち着いた口調でいつかエリュティアに語って聞かせたことを繰り返した。

「アトランティスの存亡の危機に際して、神々が^{スーイン}神帝のもとに、裁きの英雄を差し向けます。それがレトラスです」

「それがルージ国と関わりがあるのですか」

「レトラスとアトラス。いかがです。音の響きが似ておりましよう？」

「では、ルージの王子がルミリアのお使いだというのですか？」

「それは誰にも分かりません、おそらく本人にすら」

「ご本人も？」

「その通り、地に降りたレトラスは、自分の使命を知りません」

「どうして？」

「神々の意図は我々には図り知れません。ひょっとすれば、神々は、我々が鍛えられた剣を研ぐように、レトラスが大地で試練を乗り越えつつ研ぎ澄まされるのを待っているのやも知れません」

「神々のご意志……」

「そして、今ひとつ、大事なことがございます」

「なんですか？」

「剣が己を研ぐ人を必要とするように、研ぎ澄まされた切っ先が無用に誰かを傷つけぬように、危険な刃のレトラスを迎える無垢な乙女が鞘として一体の剣になる必要となります」

ドリクスが語る内容は偽りではない。確かに彼らが信じる神話体系にその内容がある。ただ、体の良い洗脳とも言える。この時、この場で、この話をすれば、利発でありつつ素直なエリュティアは自分の役割を理解するだろう。彼女は心の中にアトラスの居場所を作り上げ、彼女自身の役割を果たそうとするに違いない。

しかし、そんな素直さが痛々しく、ドリクスは罪悪感を覚えている。彼ら大人はエリュティアの素直さにつけ込んで彼女を保身の道具に変えようとしていた。

「先生、一人になりたいんです」

エリュティアは遠慮がちにそう要求したために、ドリクスは月が照らし出すテラスを離れ奥の間に引っ込んだ。

生まれてこの方、不自由したことが無く、与えられたものを受け続けるだけの少女が、はじめて誰かに何かを要求したのである。

アトラスの側近ザイラスの視線で、物語がややさかのぼる。

寡黙だが周囲の変化に良く気がつき、性根も父親譲りで肝っ玉がすわっている。アトラスの傍らに侍り、将来の王をもり立てる人材としては申し分がない。

ザイラスはルージ王リダルが自分にそんな期待をかけていることを自覚している。ただ、その期待の大きさの割に、ザイラスには見るべき家系はなく出自は卑しい。リダルが遠征している時代にリダルに付き添った従卒の一人が勇敢さで比類が無かった。その男がある戦でリダルを守って戦死した。リダルはその男の息子ザイラスを取り立てて今の身分にした。平民から一挙に貴族に出世したことを妬む人々は、彼の出自の卑しさを密かに笑っている。ザイラスはリダルの命を受けて、アトラスを伴い、リダルの居室の簾を開けて、アトラスを王の部屋に導いた。そのまま護衛の任を果たすように、周囲を窺いつつ入り口に立ちつくした。その姿に変わらぬ忠誠心を見るようだった。

居室に足を踏み入れたアトラスの声がした。

「ただいま参りました」

「よお、来た」

リダルは機嫌良くアトラスを迎えた。その声は大きく、居室の入り口で護衛に当たるザイラスにも届いている。

「儂がリネを後に迎えたのは、お前より1つ下の時であった」

「母上の事ですか？」

アトラスは意外に思った。父親が本当に愛している相手の名をあげれば、アトラスの母親でリダルの正后であるリネの名ではなく、戦線の地から連れ帰った^{タレヴォー}蛮族の娘の名ではないかと考えたのである。口ごもるアトラスをしりめに、リダルは言葉を続けた。

「シュレーブ国にエリュティアという王女が居る。見目麗しいだけではないぞ、評判の素直で気だての良い姫だ。我が国の力を増すことも出来る」

リダルの言うとおりである。このアトランティスで平和を保つために、力関係の片寄り^{スーイン}は排除せねばならず、各国はアトランティスを統率する神帝の元に同格である。各国は神々の神託を^{スーイン}神帝を通じて賜り、その神の命に従う。この関係を保つために二国間の同盟は許されてはいない。ただ、その裏では政略結婚による血縁関係を軸に、第三国と関係を強化し、自国の勢力を増やそうとする。事実、ルージの王族貴族は海を挟ん

だ対岸のヴェスターと血縁関係が深い。

「アトランティス議会など腰抜けよ。しかし、シュレーブと手を組んでみよ。シリャードのアテナイなど蹴散らして、海を渡って押し寄せる^{タレヴォー} 蛮族 の軍など、我がルージの海軍が海の藻屑にしてくれるわ」

「その折には、先鋒の一角を賜りたく」

リダルの息子としての模範解答である。リダルはアトラスの返事に答えず、にこやかに息子の肩をたたいた。

「とりあえず、件の姫と会うてみよ」

この場合、アトラスにとって、エリュティアと会ってみるというのは、后として迎え入れる心づもりをせよと言われているに等しい。

居室の入り口に立つザイラスは耳を澄ませたが、王の言葉にアトラスの返事がなかった。

夜が更けて月は中天にあり、フローイ国王の館は寝静まる手前で、静けさの中に火の後始末を呼びかける使用人の声が響いている。そんな時間帯の王の寝室に執政のマッドケウスが顔を出した。部屋の隅には気まぐれに果物を囓るリーミルの姿がある。つい先ほどまで、祖父と孫の会話とも、何かの謀略とも区別の付かない言葉を交わしていたのである。

口ごもるマッドケウスにボルススは孫娘の存在は気するなと苦笑いをして部下の言葉を促した。執政のマッドケウスは王の耳にささやいた。

「ボルスス様、謁見を願う者がございます」

「誰か」

ボルススはそう問い、執政は名を秘めたまま答えた。

「彼の者でございます」

ボルススは寝間着にガウンを羽織った。

「会おう。通せ」

マッドケウスが背後の人物に顎をしゃくって入室の許可を与えた。ボルススの寝室である。いわば、この館の策謀の子宮と呼んでも良い場所だった。ここまで足を踏み入れる人間は少ない。部屋に踏み込んできた男は頭部を覆った深いフードを脱いで顔を見せた。アトラスの近習のザイラスである。ザイラスはボルススに進み出て片膝をついで頭を垂れた。ボルススは短く問うた。

「何か」

ザイラスはリダル王の館と変わらない冷静な声で答えた。

「リダル王がアトラス王子に后を迎える準備を進めております」

「知って居るわ。そこのリーミルをアトラスに引き合わせるつもりで居る。」

「いえ、シュレーブのエリュティア様を」

ザイラスの言葉に耳を傾けていたリーミルの眉が、別の少女の名に反応してぴくりと動いた。ボルススは首をかしげた。

「何かの間違いであろう」

「エリュティア様の教師ドリクス殿が、我が王リダルを訪問され、シュレーブとの間を取り持ちたいとお申し出になり、我が王リダルも了承されたとのことでございます」

ボルススは激怒した。自らの迂闊さについてである。

「聞いたか、マッドケウス。シュレーブの犬めらに、出し抜かれたわ」

武力には長けても政治に疎いルージ王リダルが、自分たちフローイ国の提案をさしおいて、シュレーブ国の策略に丸め込まれたと考えたのである。ただ、その怒りが自分に向くところが、陰謀家でありつつ根が明るいという妙な一面を持っている。

二重三重の陰謀があり、1つ目が破れても別の策略があるという余裕かも知れない。事実、ボルススはルージに政略結婚を申し出つつ、同時にリーミルの弟にシュレーブ貴族の娘を嫁に迎える手だてを整えていた。

先ほどから幔幕の影にいたリーミルが顔を見せ、ボルススはその孫娘に怒鳴るように言い放った。

「リーミルよ、アトラスとの話はご破算になったぞ」

「ご破産ですって？　なんと、男たちの短慮なこと」

「しかし……」

「私一人でも、アトラスを陥落させて見せるわ」

「エリュティアとの話が進んでいる以上、ルージ国のリダルが我々の話を受けることはあるまい。連中は愚直なほど義理堅い」

「義理堅いなら、それを逆手に取るまでよ」

(まったく、これが男であれば)

ボルススは苦笑しつつ孫娘のことをそう思った。冷静さを保ち、次の最善の一手に頭を働かせ続けるという点では、この孫娘は自分さえ上回っているのではないかと考えたのである。

「ありがとう、また異変があれば知らせてちょうだい」

リーミルはザイラスにそう言って、その場を去らせた。彼女は弄んでいた腕輪をマッドケウスに渡していった。

「この物に見合う、いえ、その十倍の価値のある銀細工を選んでちょうだい」

次の日の夜が明けた。ルージ国王の館ではアトラスが一人、物思いにふけていた。「とりあえず、件の姫と会うてみよ」

昨夜、そう言った王の言葉に、アトラスは口ごもって答えられずにいた。結婚という言葉が、母親のリネと父親のリダルの関係と重なった。

アトラスの本心は彼自身が深く封印しているようで知りたい。ルージの世継ぎとして生まれ、周囲の祝福を受けつつ何不自由ない生活をした。しかし、そのアトラスの傍らには常に嘆き悲しむ母親の姿があり、その姿がアトラスの心に深く刻まれている。母親の嘆きは、夫の愛を受けられない孤独感と、夫の愛を受ける^{タレヴォー} 蛮族 の娘への嫉妬に違いない。アトラス自身、父親の愛が自分よりも、父が^{タレヴォー} 蛮族 の娘に産ませた子供、ロユラスに向けられていると感じている。アトラスの子どもじみた純真さは、母親リネの息子として、リネが愛する男の歡心をリネに向けようとするところにあり、その点で、アトラスがリダルを見つめる目は、父を見る少年の眼としてやや距離感がある。

そんなリダルの提案である。アトラスは母のためにリダルの歡心を買おうとすれば、提案を受け入れてエリュティアという王女を妻に娶らざるを得ない。アトラスは父の提案を受け入れる決心をしつつも、多少、冷やかに考えている。そして、異性としての女性を意識してみると、これから出会うエリュティアという女性ではなく、昨日出会った不思議な少女の面影が浮かぶ。

「王子、我らが王がお呼びだ」

ザイラスが足早に歩いてきて、アトラスの居室に顔を見せてそう言った。冷静な男で歩調を乱すことはない男である。そのザイラスがやや息を切らせるほど急いでいるのは急な用に違いない。

「何事だ？」

アトラスの問いに答えず、ザイラスは王子をリダルの執務室に導いた。リダルは息子の顔を見るやいなや挨拶も忘れて言葉を発した。

「フローイ国王の館から先触れの使者が着いた。間もなくフローイ国のリーミル王女がそなたを訪ねてお見えになる」

アトラスは混乱した。島国育ちで他の王家の貴族との面識が薄い。昨日は妻という意識をすり込まれつつエリュティアという名を聞いたが、今朝、耳にする名は、別の王族の姫の名である。

そんなアトラスの傍らで、リダルとザイラスの会話が進んでいた。

「しかし、エリュティア姫との面会の話がある。他国の姫との面会はまずくはないか？」

「ここは、お会いになるがよろしいでしょう。ただ、あくまでも、王子が私的に。シュレーブ国への対面を考えれば、我が王は知らぬふりをするのが肝要かと」

「さすがはザイラスよな。よく知恵が回る。では、その通り手はずを整えよ」

「御意のままに」

ザイラスはそう頷きながら、二人を面会させるとすれば、この館の片隅に小川を引き込んだ中庭が良かろうと計算している。日当たりが良く、川と植物のある景色だが館とは窓のない壁を隔てており、塀で遮断されて館の外部の目が届かない場所である。

執務室を離れ際、ザイラスはふと振り返った。そこにいる二人は父と子のはずだが二人を隔てる空気が重い。父親に相談することもなく一人で思いにふける少年と、その息子にどう接して良いか分からない男の姿である。

あの二人の信頼を裏切ってフローイ国に通じていると言うことに良心の呵責は感じてはいないが、あの二人に寄り添うように育て、なにやら哀れに見えることがある。

来客がルージ国王の館に着いたのは、先触れの使者から時間にして一ライ、現代の時間にすれば一時間後である。貴人の訪問を受ける準備を整えるには足りるが、それ以上の面倒な策謀を巡らす事は出来ないという時間である。

アトラスは人払いをした中庭で来客を待っていた。やがてザイラスの姿が見え、その背後に少女の体型の人影が続いていた。中庭の入り口で少女が何かを指示するようにこくりと頷くと、指示を察して付き従ってきた侍女は入り口から去り、来客を案内したザイラスも、王子に配慮するかのように立ち去った。

少女は周囲の草花を愛でるように、しかし、ターゲットを見定めたようにゆっくりとアトラスに歩み寄った。アトラスは首をかしげた。やや伏せた少女の顔に見覚えがあるような気がするのである。

「フローイの第一王女で、リーミルと申します」

彼女にとって、この種の礼儀正しいお辞儀と堅苦しい挨拶をしたのは久しぶりである。

アトラスは伏せていた顔を上げた少女にやや戸惑った。ゆったりした厚手のローブを脱いだ少女の長い黒髪が滝の流れのように肩から背を流れ、シャルと呼ばれる飾り紐を額から後頭部に回して髪を結っている。そのシャルの右のこめかみに当たる部分に銀で縁取られた緑の宝石が下がって、朝日を反射している。右なら未婚、左なら既婚者という習わしである。

そんな衣服や装飾品が気になったのは、目の前の王女の顔立ちが、昨日の不思議な少女の雰囲気と漂わせていたことである。もちろん、本人である。

「アトラス様ですね」

リーミルはいたずらっぽく笑って、名乗りを忘れていたアトラスにそう確認し、訪問の用件に触れた。

「昨日の贈り物の返礼を持って、参上致しました」

昨日、別れ際にもらった腕輪の返礼に来たというのである。紫色の柔らかな布の内側から銀色に輝く装飾品が現れた。アトラスが戸惑いから抜けきらない様子に、リーミルは髪を後ろでまとめていたシャルを解いて頭を振り、滑らかに流れる髪を乱した。リーミルはくすりと悪戯っぽく笑った。そういう笑い方をすると昨日の少女のイメージが強

くなる。

「やはり、昨日の？」

「思い出してくれた？ 私の可愛い剣士さん」

リーミルはアトラスの傍らに寄り添って座り、胸元に抱いていた包みを解いた。紫色の柔らかな布の中から、銀の地に緑の星の粒が散りばめられた幅の広い飾り紐が出てきた。

「これは？」

差し出された贈り物のについて問いかけるアトラスに、リーミルは右手の指先を摘むように握って、アトラスに腕を伸ばさせた。

「剣士様、右のお手を」

飾り紐をアトラスの手首にくるりと巻いた。その感触が冷たさに、飾り紐をよく見れば、布ではない。銀の細い糸を編み合わせ、緑に輝く小さな宝石を幾つもはめ込んだ精緻な装飾品だと分かった。さすがは銀細工に長けたフローイの装飾品である。現代ではエメラルドと呼ばれる宝石が放つ緑の輝きはフローイを象徴する色だった。

リーミルはその飾り紐の両端の銀の糸をまるで縫うようにまとめて飾り紐をアトラスの左手首の太さに合わせて留めた。アトラスはリーミルに任せつつ同じ質問をした。

「これは？」

「汚れ無き銀の地は勇者に神の真理を、緑の宝石の輝きは勇者に勇気を与えるとされています」

「そんな貴重な物を？」

重ねて尋ねるアトラスを押し倒すように、リーミルは顔を近づけて言った。

「気づいてないのね？ あなたは私たちにとって大事な人だもの」

「私が？」

「いいこと？ 単純な事だわ」

リーミルは姉が弟にするようにアトラスの髪を優しくなでて、言い含めるように言葉を続けた。

「私の国フローイと、あなたの国ルージは、他国が靡くほどの精強無比な軍隊があるの。シュレーブは金で多数の兵を養っているわ。これには他の国は対抗できない。かといって、残りの六カ国が三カ国を攻めるほどにまとまるなんて事は、今の政治情勢で出来やしない。アトランティスの平和はフローイとシュレーブと、貴方のお父上の国ルージの釣り合いの上に成り立ってるのよ。考えてみて？ その三カ国の中でフローイとルー

ジが、つまり私とあなたが手を組めば、シュレーブを攻め滅ぼすことだって難しくはない。このアトランティスの命運を握れると言うことだわ」

(たしかに、その通りかもしれぬ)

アトラスはそう思った。そう思いつつ、自分と年齢が大差ない女性がこの社会を広く洞察しているのかという驚きが、アトラスの劣等感を刺激してもいる。リーミルの視野の広さが転じて、アトラスに自分の視野の狭さを見せつけているのである。

リーミルはアトラスが劣等感にさいなまれる様子を、幼さ故の戸惑いと見たのか、アトラスをなだめるように言葉を締めくくった。

「今は分からなくても良いのよ。国や政治を語るのは私に任せて。でも、考えてみてちょうだい。この手首の腕輪の意味を」

リーミルは立ち上がり、にこりと笑顔を残してアトラスに背を向けた。来た時と同様に綺麗な去り方だったが、彼女が意図したとおり彼女の存在と、意図せずに劣等感をアトラスの心に刻みつけた。故郷で愛馬アレスケイアと遠乗りに出かけた時に、アトラスは自分の本性を自覚することがある。まだ精神は完成されず未熟ながら、自分は武人ではなく、自然や歴史の雄大さを人々に伝える吟遊詩人や、自然の出来事に神の摂理を追う神官であつたらと願うように考えるのである。

しかし、父の歡心を買ひ、父の愛を母のリネに向けておきたい。そんな意識がアトラスに武人の仮面をかぶり、武人としての演技を強要している。そして、アトラスの生真面目さは、そんな運命の強要を受け入れて本来の姿を消そうとしているのである。今日のリーミルはアレスケイアとは別の観点からアトラスの虚飾を剥ぎ取って見せた。このアトランティスの政治や力関係を語る彼女に子ども扱いされるようなあしらわれたのである。

リーミルが帰途につき、イラザスが中庭に様子をうかがいに来た時に、アトラスが左の手首を掴んで捻っている姿を見つけた。アトラスはとまどいつつ短く語った。

「取れない」

先ほどリーミルがアトラスの手首に装着した腕輪が取れないのである。力を入れると細い銀と糸が切れ精緻に織り込まれた小さな宝玉が外れそうな気がして力任せに取ることが出来ない。かといってその合わせ目はリーミルが丁寧に銀の糸で縫い合わせるようにつなぎ合わせてあり、複雑に絡む糸を丁寧にほぐすことも難しい。

シリヤード

聖都 の大通りを、リーミルが乗る輿を四人の屈強な担ぎ手が運んでいる。人々はその紋章でフローイ国の貴族が乗っていることを察して道を譲っている。その輿が行き止まりの路地に入った。両側はこの ^{シリヤード} 聖都 にあるグラト国とヴェスター国の王家の館だが、高い塀に遮られて人の目が行き届きにくい。

「首尾はいかがでしたか？」

「上々よ。ちゃんとアレが私の物だって言う印は付けたから」

侍女の問いかけにリーミルは機嫌良く答えて、御簾で周りを覆われた輿を降りた。すでに昨日、アトラスと出会った時の気さくな町娘の衣類を身につけている。アトラスへの表敬訪問が終わった。ルージ国王の館を出て、十数分の時間が経過し、街路の曲がり角をいくつか曲がって、もはやルージ国王の館は見えない。ここまで来れば堅苦しい儀礼を気にする必要はあるまいと思うのである。リーミルは侍女を自分の代わりに輿に乗せてその場を去らせた。輿という乗り物は移動の速度にしても、気まぐれにうろつくという点でも、彼女の性格に合わない。

突き当たりの水路に背を向けて、この行き止まりになった通りを出れば、すぐに活気のある商店が建ち並ぶ大通りである。彼女はそちらを向きながら、ふと足を止めて考えた。

(なんとまあ、無邪気なこと)

アトラスの顔を思い出したのである。素直すぎて操るのに気が引ける。利用価値は大きいというのがリーミルがアトラスという人物を測る尺度だったはずだ。その尺度に、思い出せば微笑みたくなる素直な好感が混じり始めていた。

(でも……、フェミナと言ったかしら、)

彼女は出会ったこともない弟の婚約者の名を思い出して状況のややこしさを考えた。彼女の弟はシュレーブ王家に連なる貴族の娘を娶る。祖父のボルススはこの大陸の中央の大国シュレーブ、東の島国ルージを天秤にかけているのである。リーミルも弟のグライスもその天秤の分銅に過ぎない。名目上の政治体制に過ぎないアトランティス議会もあと数日で閉会する。リーミルの弟のグライスは今はフローイ本国で祖父の代理人として国を治めているが、アトランティス議会の閉会の後、ボルススは帰国して、シュレーブからフェミナを迎えて孫のために盛大な結婚式を執り行う。両国の絆を見せつける盛大な式になるに違いない。

(では、私とアトラス王子は?)

考えてみれば、リーミルのアトラスに対する好意は男女の愛情かどうかは疑わしい、

政略結婚をさせられるならアトラスという男で妥協しておこうということかもしれないし、アトラスという獲物を横から搔っ攫われたかのようなエリュティアに対するライバル心かもしれない。

考え事をしながら歩くリーミルは、ふと、自分に向けられた不審な視線に気づいた。周囲を見回せば、ここはシリヤードの中心部である。左側にアトランティス議会の議事堂、右側に六神司院と呼ばれる、^{ロゲルスリン}神帝に直接仕える^{スーイン}最高神官たちが集う館がある。この辺りに一般市民が姿を見せることは少なく、町娘の姿でフードで顔を隠すリーミルは町の警護の衛兵どもから不審者という視線を浴びていたのである。

^{ロゲルスゲラ}「最高神官どもは、よう臭う」

謀略家のボルススが悪臭に耐えて鼻をつまむまねをして、そう称したことがある。ボルススらは国を運営するために謀略を張り巡らす、それは政治的な駆け引きに近い。^{ロゲルスゲラ}ロゲルスリンを構成する六人の最高神官は、自らの権力や富のために、陰湿な手段を用いて政敵を排除しているのである。^{スーイン}神帝を通じて神を奉じるべき神官が、欲望にとらわれて腐り果てている。

リーミルはこんな場所には興味はなく、退散することに決めた。

(きゅっ)

くるりと身を翻したリーミルは小さく悲鳴を上げた。足早に、しかも足音も立てずにやってきた男とぶつかってしまったのである。リーミルの悲鳴と同様に、男も舌打ちに混ぜて、小さく何かの悪態らしき言葉を吐いた。リーミルはその言葉やアクセントに全く聞き覚えがなかった。

立ち去ってゆく男は、リーミルにはかまわずに^{ロゲルスリン}六神司院の館の通用門へと姿を消した。リーミルは、あの男が漏らした僅かな言葉から、あれがアテナイ人ではないかと考えたのだが、首を横に振って疑念を打ち消した。いくらなんでも、アトランティスの議会を運営する神官どもが、異境の^{タレヴォー}蛮族と通じているとは思わなかったのである。

物語はシリヤードにおける政治の中心組織として、^{ロゲルスリン}六神司院に触れねばならない。アトランティスは長い戦乱の世を終わらせるために、九つの国家が共通して信仰する神々^{ルミリア}を利用した。真理の女神の神託を受ける最高神官の元で、九つの国が平等に神に仕えようと誓いを立てたのである。

当然のことながら、アトランティス内でも強大な国力を誇る3カ国が、^{スーイン}神帝と名付けられた地位の候補者を出した。ルージ国王で若き日のアトラスの父リダル、フローイ国王で、その後の遠征で異境の地で戦死したリーミルの父、シュレーブ国王でエリュティアの叔父オータルであった。

そして、ヴェスター、レネン、アルム、グラト、ゲルト、ラルトの六カ国から各一名づつ、王家と関わりのない神官が選出され、六人の神官は^{ルミリア}真理の女神（ルミリア）の神託を受けて^{スーイン}神帝を選び、オータルがシュレーブ国王の座をエリュティアの父に譲つて^{スーイン}初代神帝の座に就いた。六人の神官は^{スーイン}神帝の補佐役になる^{ロゲルスリン}諮問機関として六神司院を構成した。

アトランティスを統べる^{スーイン}神帝は、神殿の奥で祀られる実権のない名誉職にすぎないとも言える。ただ、^{ロゲルスリン}ロゲルスリンは各国の利害を調整する職務を背負うため役得が伴う。付け届けや賄賂横行し、様々な権力が集中した。そして、今や、^{ロゲルスリン}ロゲルスリンと呼ばれる^{ロゲルスリン}ロゲルスリンの構成メンバーは、神職という立場から墮落し、権力欲に囚われている。そして、その地位を脅かす者どもを暗殺しているともささやかれていた。

アトランティスは、九カ国を平和に統率する手段として^{シリヤード}聖都を作り上げた。いまは^{シリヤード}その聖都も発展し、一万人近い人口を抱え、独自の統治能力と僧兵集団という兵力も抱える都市国家になった。

そして、アトランティナは彼らが作り出した宗教国家シリヤードの元に集うことで、1つにまとまったが、その平和は当初から虚栄だったと言える。今は、この大地に平和をもたらし^{シリヤード}べき^{スーイン}聖都の内部で、組織を改革しようとする^{スーイン}神帝オータルと、現在の体制を維持しようとする^{ロゲルスリン}六神司院の間で密かだが、熱く激しい争いが始まろうとしている。

各国の力のバランスを維持するために、国家間の政略結婚は禁止されていた。しかし^{スーイン}、^{スーイン}神帝は裁定するのみで、強制したり罰したりする権力がないために、決まりは存在

しつつ形骸化している。例を挙げれば、アトラスの母リネは、海峡を挟んで存在するヴェスター国王の妹として、ルージ国のリダルに嫁いだ。

ただ、表だって神に逆らうことを避けて、政略結婚ではなく男女の自由恋愛という形を取っている。ルミアが国家の権力拡大を禁止していても、ルミアの娘で愛を司る女神リナシアや恋を司る女神フェリンは、男女の恋の成就を妨害するはずがないという理屈である。

アトラスはそんな背景に沿って、紹介されたエリュティアに面会するという形を取っている。シュレーブ国から使わされた案内人、側近のザイラス、それから荷物持ちの下僕1人を伴っただけの軽装でシュレーブ国王の館へ歩んでいた。

「エリュティア様という方は、どのような方なのだ？」

アトラスの質問にザイラスはアトラスの心境を察して答えた。

「エリュティア様は、オータル様がシュレーブ国王を退位されて^{スーイン}神帝の座に就かれた後、シュレーブ国王の座に就かれたジソー王の一人娘であらせられます」

ザイラスの見るところ、アトラスは落ち着かずこれからの出会に緊張を隠せないのである。

（王子と側近というより、まるで兄弟のようではないか）

案内に付き添ってきたシュレーブ国の使者はこの二人を眺めてそう思いつつ、先に見えてきた館に手を差し伸べて言った。

「さあ、エリュティア様は、あの館の庭園で王子のお越しをお待ちです」

同じ頃、エリュティアはシュレーブ国王の館の庭園のベンチに腰を掛けて、小首をかしげていた。

「アトラス王子は、本当にレトラスのごとく、アトランティスに遣わされたのでしょうか？」

エリュティアはそう疑問を投げてはいるが、半ば幼児が物語の英雄に憧れるようにその存在を信じている。

（そんな虫のよい話が）

侍女頭のルスラはそう思いつつ、エリュティアの思いを否定しきれずにいる。シュレーブ王の館の敷地にある離れの中に、間もなくアトラスを迎えるのである。

シュレーブ国王ジソーは、自ら館の門にアトラスを出迎え、自ら王の執務室に招き入れた。国としての儀礼ではないという体裁を取り繕う必要がある状況では、最大限の好意の演出と言える。

「お招きにあずかり、参上いたしました」

儀礼的な挨拶をし、贈り物を捧げるアトラスに、ジソーは機嫌良く笑いかけた。

「エリュティアは庭園で王子のお越しを待ちこがれておりますぞ」

ジソーは傍らのドリクスに目配せをし、賓客を庭園に案内するように命じた。ただ、その視線は注意深くアトラスの左手首に移動した。あの見事な銀細工はフローイのものだろうと見当をつけたのである。ドリクスが頷いたが、案内せよとの命令に対してなのか、王の推測についてなのか、判別がつかなかった。

ドリクスは王と賓客に軽く一礼をして、アトラスを案内するように歩き始めた。

広い庭園の中央が小川を模して水が流れる溝で囲まれて、自然の中の庵を演出していた。庵は膝の高さほどに組んだ木枠に囲まれ、木枠には蔓草が絡んで緑の壁面になり、その壁面は随所に小さな白い花を満開に付けていた。サーフェと呼ばれる植物で、シュレーブ国北方の山岳地帯から移植した物である。

日当たりの良い庭園には、花の蜜に引き寄せられた蝶が舞っていた。穏やかな微笑みを浮かべたエリュティアが、柔らかな曲線を持って腕を伸ばして蝶と戯れていると、明るい風景にとけ込んで、花の精か蝶の精にも見えた。アトラスはまぶしげに少女に歩み寄った。

「エリュティア様ですね。お初にお目にかかります。ルージ国のアトラスと申します。お招きに預かり、参上しました」

アトラスの挨拶は緊張感を隠すように慎重で、それに応じるエリュティアは無邪気な戸惑いを隠していない。彼女はやや膝を曲げうつむき加減にお辞儀をして言った。

「エリュティアと申します。お目にかかれて光栄でございます」

「美しい庭だ。シュレーブ国がアーヴィラの祝福を受けているのが分かります」

アトラスは庭園を眺め回しながら美の女神の名を挙げてその調和を褒めた。戸惑いを隠すためか周囲に気配を配るように視線を移動させているのは、少し首をかしげて、じっとアトラスの目を直視するエリュティアの視線を避けるためである。二人の初めての出会いは、その光景に象徴された。儀礼的な挨拶を交わす二人を、エリュティアの

教師のドリクス、アトラスの側近のザイラスが、王女と王子から距離を置いて庭園の入り口に控えて眺めていた。ザイラスの見るところ、人の好意と偶然を装って仕組まれた出会いが白々しく、その舞台にいるアトラスとエリュティアは互いに自分の意志を持たないまま、周囲の人々の意に沿うよう演技が要求されていた。その二人が同情を誘う。二人が成長し幼い殻を脱ぎ捨てて本当の出会いを果たすのに、まだこの後、二年以上の月日を要するのである。

ルージ国では、アトラスには女性にまつわる噂は皆無だった。父親の歡心を買うことが常に彼の頭の片隅にあり、武人として女性を遠ざけてきたばかりではなかった。彼の傍らには、^{タレヴォー} 蛮族の女に夫の愛を奪われたと嫉妬する母の存在があり、男女の色恋沙汰には密かに嫌悪感を抱いていたのである。

ところが、周囲の人々の思惑で、妻に迎えることになるであろう女性と突然に引き合わされた。この種の経験の浅いアトラスには、洗練された愛の言葉など持っているはずがない。アトラスがまとった小賢しい誇りはアトラスに愛の言葉ではなくて政治の言葉を口にさせた。

「私はルージ国の代表として、エリュティア王女をお迎えに参りました。」

アトラスの言葉にもかかわらず、エリュティアの興味は無邪気で、目の前の男性が本当にアトランティスの救世主かどうかと言うことである。

「それがアトランティスを救うことになるのですか？」

「アトランティスを救うですって？ いいえ。まずこの大地に覇を唱え、自らの意志を意志を行き渡らせるのです。この剣にかけて」

「ならば、貴方はすでに剣をお持ちだわ。私は必要とはされていません」

「お分かりですか。私の国ルージと、あなたの国シュレーブが手を携えれば、このアトランティスの覇権を握れるのですよ」

アトラスはそう言った。子どもの頃から父の歡心を買うために大人びた武人の姿をまとってきた。しかし、昨日、リーミルによって子供じみた一面を露呈して、アトラスの薄っぺらな誇りが傷ついていた。その反動かもしれない。アトラスはエリュティアにそんな大人びた言葉を投げかけたのである。ただ、その内容はリーミルの言葉の受け売りでしかない。エリュティアは素朴な疑問を口にした。

「アトランティナ（アトランティス人）は、幸せになれるのですか？」

アトラスは口ごもった。最初に発した言葉自体、いわばリーミルからの借り物で、アトラス自身は自分の考えを持たなかった。エリュティアの問いは素朴だが、アトランティスという規模の視野にあり、アトラスの小さな思考をゆったり包み込んでしまっていた。そのことが、アトラスに自己の矮小さを自覚させて彼の小さなブライドを傷つけた。彼は心の整理が着かぬまま、頭の中から武人の言葉だけを選び出して口にした。

「アトランティナの幸福ですって？ 私の意志は私の剣にのみあります。必要なら剣を血で浸し、私の全身に敵の返り血を浴びようと、必要な物は戦い取ります」

「それでは多くの人々が死にます」

「幼いことを！ 人の死など当然のこと。勇者の死の上に幾多の国が築かれてきたのではないですか」

「幸福が死の上に築かれるなんて。それが真理と公平を司るルミリアの意志とは思えません」

そう答えた次の瞬間、エリュティアは小さく悲鳴を上げた。アトラスが彼女の腕をとり、かき抱くように顔を近づけたのである。王族の姫に対する行為としては、強引で無礼な態度に違いなかった。エリュティアは予想もしないアトラスの態度に怯えを見せた。

「エリュティア様。私の妻となって、この大地を^{ルミリア}真理の女神の名の下に治めればいいのです」

「^{ジメス}審判の神に誓って。^{ルミリア}真理の女神から遣わされたレトラスなら、そんな思い上がったことは口にはしないでしょ」

そう言ったエリュティアはぎごちなく身を交わしてアトラスと距離を置こうとし、アトラスはそれを止めて、エリュティアの手を引いて言った。

「^{ジメス}審判の神？ 私は誰かの審判を受ける気はありません。人の運命は人が切り開くのです」

この時、二人から距離を置いて控えていたザイラスが、見かねるように王子に歩み寄ろうとしたのだが、ドリクスはその腕を取って、首を横に振り、ささやくように言った。

。

「^{リズムス}運命の神の御心のままに」

ザイラスの位置からアトラスとエリュティアの会話は聞き取れないが、アトラスの行為がやや乱暴なのがわかる。他国の姫に礼儀を失しているのではないかというザイラスに、エリュティアの教師ドリクスは、二人の関係を運命のまま任せるようにと言うのである。ドリクスの言葉にザイラスは無言で頷いたが、納得したわけではなくアトラスの軽率さを注意するような視線を注いでいた。そんなザイラスとドリクスの様子に気づかないまま庭園の中央ではアトラスとエリュティアの会話が続いていた。

エリュティアはアトラスに腕を捕らえたまま言った。

「死を見るのは嫌です。ルミリアが死を喜ぶとは思えません」

「人の命など、羽毛も同然の軽さ。人が成し遂げたものにこそ、神が喜ぶ価値があるのではないですか」

話が同じ所を巡って、二人の意志は噛み合わず会話がとぎれかけた時、ドリクスがにこやかに手を叩いて二人に歩み寄った。ザイラスは人の呼吸を読むようなドリクスの絶

妙のタイミングに感心した。たしかに、面会を終わらせるには絶好のタイミングに違いない。

「時には距離と時間をおく方が、愛する男女を結びつけるとされています」

ドリクスはさりげなくアトラスの手をエリュティアから振りほどいて言った。

「近々、本日のご訪問の返礼に参る所存です。お二人のお話は機会を改めて」

今日のアトラスの訪問と贈り物の返礼に、時を変えてエリュティア側からもアトラスを訪問するというのである。エリュティアはドリクスに促されるまま、アトラスに別れの一礼をして静かに背を向けた。ドリクスは手を叩いて合図をし、侍従を呼び寄せてアトラス主従に言った。

「では、この者に館の外まで案内させましょう」

アトラスとザイラスはドリクスの言葉に頷いた。エリュティアとアトラスの初めての出会いはこうして終わりを告げたのである。

アトラスは館から去り、ドリクスはうつむき加減に歩くエリュティアに寄り添いつつ、彼女の心理を窺った。エリュティアがぽつりと呟いた。

「本当にあの方が、真理の女神（ルミリア）に遣わされたレトラスなのでしょうか？」

救世主が自分の目の前に現れる。そういう期待は裏切られていた。エリュティアうつむきながら発したそんな問いかけは、独り言だったのだろうか。しかし、ドリクスはその独り言に介入した。

「それは、まだ分かりません。ただ、抜き身の刃という自らの姿に気づかぬうちは、触れる者を傷つけましょう。剣を振るう目的に気づかぬうちは、その切っ先が思いもかけぬ方向に向くこともございましょう。ですから、刃には鞘が、力にはそれを正しく使う意志が、必要なのです」

ドリクスはそんな表現でエリュティアの疑問を制したあと、思いついたように付け加えた。

「そうそう、今日、アトラス王子にお越し頂いた返礼に、こちらからも王子を訪問せねばなりませんな。手みやげは何がよろしいでしょう」

「また、あの方と会わねばならぬのですか？」

「早いほど、お二人の気持ちは高まりましょう。いかがでしょう、今から宝物庫で王子への手みやげを選んではいませんか？」

ドリクスはエリュティアに問うという形を取ったが、すでに返礼の贈り物はフェルムスの剣と決めていた。シュレーブ王家に伝わる宝刀である。剣の前でさりげなく、そのすばらしさを説けば、エリュティアはドリクスの意志に沿って剣を選択するだろう。

日当たりの良い庭園から館の出入り口が見える。その出入り口の門のように2本の樹木があって葉を茂らせていた。ドリクスは驚いたように目を見開いた。樹木に向き合うように背を見せている少女の姿がある。

傍らにいるエリュティアが元気を失って存在感がない。ドリクスにはその彼女がいきなり別の場所に現れたかのような気がしたのである。その新たな少女の後ろ姿は、それほどエリュティアとよく似ていた。背後の人の気配に気づいて振り返った少女は親しげな声を上げた。

「エリュティア様」

エリュティアも親しげに彼女の名を呼んだ。彼女の表情は一転して明るくなったとこ

ろに二人の少女の関係が窺われる。

「フェミナ」

エリュティアにそう名を呼ばれた少女は、王家の血筋を引いて現国王のアルトオ家に次ぐ格式の高い家柄の貴族の娘である。年齢が近いことがあり、幼い頃から仲が良い。エリュティアは許可を求めるようにドリクス顔を振り仰いだ。

「先生」

幼なじみと二人で話し合いたいというのだろう。ドリクスはそれを察して笑顔を浮かべた。

「エリュティア様。私は急用を思い出しました。後はお二人でお過ごしください」

ドリクスはそう言って足早にその場を立ち去った。ドリクスは自分たちが意図的に操作した二人の少女の運命を考えた。フローイの王家に嫁ぐフェミナと、ルージに嫁がせる予定のエリュティア。姿形の似通った二人だが、もし、エリュティアがフローイ国に嫁ぐようにし向けていたら、この二人の少女の運命はどう変わったのだろうか。

ドリクスはその足を彼の報告を待っているジソーの元に向けた。

「首尾はどうであった？」

シュレーブ国王ジソーは、執務室に戻ってきたドリクスに面会の様子を問い、ドリクスが答えた。

「上々かと存じます」

「王子の左の手首を見たか」

「気がついておられましたか」

「儂の目は節穴ではないわ。銀の細工に緑の宝石」

細やかな作りの銀細工がフローイを連想させた。装飾品に興味を示すことがないルージ国の男が、あれを身につけていたと言うことは、フローイがアトラスに接近を図っているということに違いあるまい。油断はならない。ジソーは言葉を続けた。

「さすれば、アトラス王子への返礼の日取りも、早いほうが良いの」

「さようでございます」

「その日取りと、返礼の品を決めておいてくれ」

「いえ、返礼の宝物も、日取りも、エリュティア様のご意志にて」

「なるほど」

当事者のエリュティアの意志を尊重しようという言葉の裏で、意味深に微笑みあうジソーとドリクスの表情は、エリュティアを意のままに操って誘導すればいいと語っているようなものだった。結論は決まったとでも言うようにドリクスは話題を変えた。

「さきほど、フェミナ様のお姿を拝見いたしました」

「フローイ国に嫁ぐ前の挨拶に参ったよ。あと数日は滞在するとのことだ」

「それは、ようございました。エリュティア様にとってもいい話し相手、よい気晴らしになりましょうな」

街道を歩くアトラスの両側に、各国の王族や貴族の館が並んでいた。館の造りに各国の習慣や独特の意匠が凝らされていて、アトラスは興味深げに眺めて歩いた。ルージ国王の館があるのはこの辺りから水路と街道を挟んで東北の区画である。

その中を連れ添って帰るアトラス主従だが、ザイラスの表情が陰しい。気さくに物を言う主従関係だが、アトラスに意見を具申する時のザイラスが、これほど不快感情を露わにすることは珍しかった。

「王子。言っておきたいことがある。先ほどは冷や汗をかいた」

「すまぬ」

幼い頃から生活を共にし、兄弟のように育ったザイラスの言いたいことは分かる。先ほど、アトラスがエリュティアに示した態度である。

(私の尊大さが、エリュティア姫を怯えさせてしまったのではないか)

内側に秘めた素直さは、ザイラスに指摘されずともアトラスを反省させている。

(次に会った時には、今回のことを詫びねばならぬ)

そう言う意識がアトラスの動作ににじみ出すように感じられ、ザイラスはそれ以上の主人に対する苦情を控えた。

「ご自分で分かっているならばよいのです。ご婦人に接する時には、敬意と優しさを忘れぬ事が肝要かと存じます」

ザイラスはそう言いながら、もう一つの自分の任務を思い出している。ルージ王家の内情を密かにフローイに伝える密偵という役割である。フローイのボルススは、この面会の事の次第について興味を示すだろうし、情報は早いほど価値がある。

「王子、テウススらが館でくすぶっております。私が連中に何かシリヤードの旨い食べ物か酒でも見繕って参りましょう」

幼い頃から顔なじみの信頼できる側近たちが、アトラスとザイラスより遅れてこのシリヤードに着いていた。しかし、ザイラスの見るところ、連中にはアトラスほどの好奇心は無いようで、^{シリヤード}「聖都」という大都市に圧倒される田舎者のように、館に閉じこもるように遠出を避けている。その者どもにルージでは食べられないものを食べさせてやろうというのである。

「それはよい考えだ。大食らいのラヌガンが腹を満たせるように頼む」

アトラスは笑顔で賛同した。幼なじみの側近の名はアトラスから暗さを振り払って

いた。ザイラスは僅かに頷いて、一行から離れ、足をシリヤードの東の市に向けた。もちろん、市を素通りして戻り、フローイ国王の館に向かうのである。

リーミルがルージの密偵の来訪を知って、祖父の執務室に姿を見せた。

「彼の者が来ているそうね」

彼女にとってもアトラス行動には興味がある。中央のテーブルにボルススがおり傍らに侍るマッドケウスに、孫娘のいつもの強引さに肩をすくめて笑って見せた。

館を訪れたザイラスは謀略の子宮、フローイ国王の執務室の入り口にいる。部屋に飛び込むようにやってきたリーミルは傍らに居たザイラスに笑顔を浮かべた。

「ご苦労様。それで、状況は？」

王をさしおいて話を進めようとする孫娘に苦笑したボルススが、ザイラスに顎をしゃくってみせて話を進めよと指示をした。

「シュレーブ国王の館の庭園で、王子はエリュティア姫との面会を果たされました」

「それで？」

言いかけるボルススをさしおいて、リーミルがザイラスに続きを促した。

「様子はどうだったの」

「何事もなく」

「何事も？ エリュティア姫は王子の腕輪に何か、」

「いえ、お話の内容までは分かりかねませんでした、お二人とも熱心にお話をしておいででした」

そんなザイラスの報告にリーミルは眉をひそめて言った。

「姫は腕輪には気づかなかったと？」

ザイラスが頷くのを見て、リーミルはエリュティアを評する言葉を続けた。

「なんと鈍い女」

アトラスの腕輪さえ見れば、どこかの女がアトラスという男の所有権を主張しているのが分かりそうなものだし、その腕輪が精緻な銀細工なら、フローイの女だと分かりそうなものだ。リーミルはそう考えたのである。「それ以外には？」

他の情報を求めるマッドケウスにザイラスは首を横に振った。

「いえ、それだけでございました」

「なるほど、何かあれば、また知らせよ」

そのボルススの言葉に、ザイラスは頷いて、深くフードをして顔を隠したかと思うと、足早に部屋から姿を消した。その後ろ姿を見送りつつ、リーミルは祖父に尋ねた。

「おじいさまは、ずいぶん役に立つ密偵を飼っておられるのね。報酬はいかほど？」

「報酬など払っておらぬわ」

「では、あの男、ただ働き？ そんな男が信用できるの？」

「いや、恨みさ。あの男は父親をリダルに殺されておる」

「ふうん」

「分かりにくく信用できないとすれば、^{ロゲルスゲラ}最高神官（*1）の連中よ。あの者どもは陰湿な陰謀を飲み食いして生きておる」

そんな祖父の言葉に、リーミルはふと思い出した。聞き慣れない言葉を話す男が^{ロゲルスリン}六神司院の中に姿を消したことである。

*^{スーイン}ロゲルスゲラ：^{ロゲルスリン}神帝の諮問機関の六神司院を構成する六人の最高神官のこと。

フローイ国王の館の出来事も、何もなかったかのように過ぎ、明くる日を迎えた。

エリュティアはフェミナに伴われて、御者を伴っただけの馬車でシリヤードの城門をくぐった。幼なじみとして、語り合うのに良い場所に案内してあげるといのである。エリュティアの失意の様子を見たフェミナが彼女を励まそうとしたに違いない。

ルミアの神殿を中心にぐるりと円形に城壁が張り巡らされて、その内側が^{シリヤード}聖都というアトランティスを束ねる都市国家である。

ただ、その城壁を一步出れば、アトランティス大陸の中原に存在するシュレーブ国である。北東にはグラト、北方にはレネン国とアルム国、西にはナリズム山系で隔てられてフローイ国があり、南西にはゲルト国、南方にはグラトとラルトの各国、東には海を隔ててルージ国が存在するという位置である。

この辺りはシリヤードに人口が集中し、城門を出ると嘘のように人の気配が絶え、静かで豊かな緑の森林地帯になる。王族の狩り場に指定され、一般民衆の立ち入りが禁止されている場所も多い。シュレーブの国力を支える豊かな穀倉地帯は、ルードン川をもう少し下った辺りである。

二輪馬車が向かう先は、道が途絶えるのかと思われるほど細く、熟練した御者が手綱さばきに苦勞する様子がかがえる。やがて道は途絶え、馬車は木々の間を縫うように北に目ざし続けた。

「止めて」

フェミナが御者に馬車を止めるよう指示し、エリュティアの方に顔を転じて言った。

「見て、エリュティア様。前に見えてきたあの細い川が目印」

希望が広がるように甘い香りがし、木漏れ日の間を縫うように蜜蜂があわただしく飛び交う場所である。フェミナは馬車を降り、御者には馬車をその場に留め置くように言いつけ、エリュティアの手を引いて小川のほとりを遡り始めた。

「すばらしいわ」

その景色はエリュティアを満足させ、表現する言葉に詰まって絶句するエリュティアの驚きと満足感の表情はフェミナを楽しませた。細くなってゆく小川を遡って間もなく、川は地の窪みを伝い湿らせる流れとなり、やがて、その水を溢れさせる小さな泉に行き着いた。

泉の周囲の水草は白く大きな花を付けて、飛び交う蝶に蜜を提供している。周囲の木

々の木漏れ日が泉の水面を刺して微笑みたくなるほど眩しい。ため息をつきたくなる景色だが、二人の少女もその美しさの一部になって泉や森の精のようにも見える。

「夢の中みたい」

エリュティアはくるりと身を翻して周囲を眺めてそう叫ぶようにそう言った。周囲から隔離された世界の中で、男どもが彼女に背負わせた重荷を感じずにすむのである。

「ええっ。九つの時に、偶然に見つけたのです。この辺りは私のお父様の領地で、誰も立ち入れない狩り場の中。私以外に知る者はいない場所。嫁ぐ前に、もう一度、最後にここを見ておきたかった」

「どうして？」

エリュティアはフェミナの言葉に疑問を呈した。アトランティス議会のためにこの^{シリヤード}聖都に参集した各国の王族が、議会の閉会とともに帰国する。フェミナはそのタイミングでフローイの王子の元に嫁ぐ予定なのである。フェミナはフローイの人々に温かく迎えられ盛大な結婚式になるだろう。そこで結ばれた夫をこの景色を見せてやればよい。しかし、フェミナの雰囲気はそれを拒絶しているように思われた。

「フローイにあるものは、戦と銀細工だけ。あの田舎者たちには、この自然の美しさは理解できないわ」

リーミルの言葉に彼女が婚儀を望んでいないことが窺い知れた。

「婚儀が嫌なの？ それとも、相手のお方が気に入らないの？」

「私は自分が嫌なの。女だということがが嫌なの。女ってなんと無力なものなんでしょう」

フェミナは同じ境遇にいるはずのエリュティアに同意を求めるように言ったが、エリュティアはまだ結婚と言うことが十分に理解できずにいる。

約一ライ、現代で言えば1時間。二人は会話らしい会話もなく二人だけで過ごした。この時代、互いに別の王家に嫁ぐということが、ひょっとしたら、幼なじみの二人が過ごす最後の機会になるかもしれず、その機会が深刻な話で綴られることを避けたのかもしれない。ただ、王族という身分を背負った二人に許される自由時間はその程度のものである。

やがて、二人は立ち上がり、元来た道を辿った。

忠実な御者は二人の帰りを待ちながら、馬に水を与え、馬の体をブラシを使ってマッサージしていた。この美しい馬は彼の自慢なのだろう。ただ、馬は先ほどからまとわりつくように飛ぶ大きな蜂に不快感をあらわにし、落ち着かない。気づかないうちに蜂

の巢に接近してしまっているのである。

戻ってきた二人を見つけた御者は、馬車の向きを変えて二人を導いた。この時に、二人が振り返って景色を記憶に留めるように眺めるのは、この景色を二度と見ることが出来ないという予感のせいかもしれない。御者は馬の轡を取り、馬車を南に向けた。この時である。先ほどから周囲を飛び回っていた蜂の一匹の羽音が馬の耳を刺激した。馬は驚き興奮して、前足を大きく上げていななき、耳に煽られた蜂も興奮して馬を刺した。

馬車は今から御者台に乗ろうとしていた御者を振り落とし、二人の少女を乗せたまま暴走を始めた。やや幸運だったのは馬車が林の木々の間を通り、道らしき場所に出た辺りだったことである。不規則に木が生い茂る中で、もう少し木々が密に茂っていれば、馬車はいずれかの樹木にぶつかって転倒して馬車に乗っていた二人は負傷していたかもしれない。しかし、蜂を振り払ったものの馬の興奮は収まらず、馬車を牽いたまま疾走している。

ルードン河の左岸沿いの街道を上流に向かって遡る一団がある。彼らは東の異郷から海を渡り、ルードン河の河口のソムの港町から大きな丸い盾を背負い、背丈ほどの短槍を手に、腰には剣を帯びてアトランティスの大地を踏みしめながらやってきた。人の顔立ちは似ていてもその装備はアトランティスの物ではない。アトランティスを武力占領するアテナイ軍の一団である。

彼らは突然に緊張感をみなぎらせ、背負った盾を下ろして構えた。右手の方向から異様に響く馬蹄の音が接近してきたのである。アテナイの占領に不満を抱くアトランティスの不穏分子がアテナイ軍の一隊を襲撃するというのは起こりえる状況であった。兵士は戦闘に慣れた精兵で、すでに道を挟んで二手に分かれ、姿勢を低くして盾と槍を構えていた。

ただ、部隊の先頭に立つ若い指揮官のエキュネウスは、兵士に指示して戦闘態勢を解かせた。接近してくるものが武装している気配のない二輪馬車で御者の姿がない、馬車の上で怯える二人の女性の姿が見える。何かに驚いた馬が暴走したに違いない。そう判断したのである。

エキュネウスは街道に立ちふさがり、両手を大きく広げて叫んだ。

「友よ、恐れるな」

声は低いがよく通り、蹄の喧噪さえ貫いて馬の耳に届いた。エキュネウスは馬に話しかけている。馬は突然に行く手を遮られ、声が耳を貫いた。さすがに言葉の意味は分からないが、包容力のある雰囲気と、立ちふさがった人物の人柄が馬にもよく伝わった。馬は大きく上げた前足の蹄を地に付けて荒い息を吐いて静止した。

エキュネウスは馬の首筋に体を寄せて乱暴なほど首筋を叩いて馬を褒めた。

「おおっ、なんという見事さ、アポロンの車を牽いていたと聞いても疑いはせぬ」

エキュネウスは荒々しい手つきを徐々に繊細に動かして、馬の感情を沈めつつ、馬を愛でた。彼の手の平に馬の熱い体温が伝わった。彼の正体をうかがうように振り返った馬の吐息の荒さが静まるのを待って、彼は馬車にいた二人の少女に視線を向けた。

突然に暴走し始めた馬車の上で命の危険さえ感じていたが、その恐怖から解放された。しかし、見慣れない異郷の武装集団に囲まれている。二人の少女は安堵感と新たな緊張感の混じった感情の中にいる。年格好は似通っているが、幾分年長者を感じさせる黒

髪の少女がもう一人の金髪の少女を守るように胸に抱いていた。黒髪の少女、フェミナにしてみれば、命を救われたという状況だが、感謝の念以上に異郷の者に侮蔑的な感情を露わにしていた。この時に、後方から息を切らせなが駆けてきた男が居る。振り落とされた御者らしい。主人が異郷の戦闘部隊に囲まれているという状況に、御者は戸惑いながらも腰の短刀を抜いた。主人を守るつもりなのだろう。

エキュネウスは右の拳を上げて兵士に元の行軍隊形を取るように命じた。御者も冷静になれば、戦っても無駄だということ、何よりエキュネウスらが少女を傷つけては居ないことは分かるだろう。

「友よ、お別れだ」

エキュネウスは馬の首をぽんと叩いてそう語りかけ、侮蔑的な視線を向ける黒髪の少女にも黙礼をした。エリュティアがフェミナの胸に埋めていた顔を上げたのはこの時である。

(アフロディーテか……)

エキュネウスはエリュティアの姿をそう評した。顔立ちに幼さが残るが、一瞬交わした視線には内面に深い包容力を感じさせる。エキュネウスはそんなエリュティアの雰囲気にも美と豊穡の女神を感じたのである。

黒髪の少女がエリュティアを武装集団からかばうように抱きしめたために、見つめ合うエキュネウスとエリュティアの視線が遮られた。エキュネウスは夢から覚めるように本来の任務を思い出して兵に短く指示を出した。

「前進」

すでに目的地のシリヤードの城壁が見えていた。

シリヤード

聖都。アトランティス九カ国を束ねる都市国家として宗教と政治の中心地である。その中央をルードン河が流れ、シリヤードは北と南に分断されている。ルミリアの神殿やアトランティス議会はシリヤードの北側にある。中央の神殿から半径二ゲリア（約1.6 km）の位置をぐるりと城壁に囲まれていた。北部シリヤードにはその城壁の北と東西の三カ所に城門があり、城兵が駐屯して不審者の出入りを制限している。南のルードン河に面する方角には入り江に棧橋がある。

エキュネウスたちアテナイ兵の一隊がたどり着いたのは、シリヤードの東門である。その門でエキュネウスたちはこの国の情勢の一端を眺めた。城門の外に面した詰め所にいる兵たちは、装備から見てこのシリヤードを守るアトランティスの僧兵に違いない。不審者を排除する任務を背負った彼らは、エキュネウスたちアテナイ兵一行に憎しみや侮蔑の視線を送りながらも、通行を妨げることはなかった。門の内側にもう一つの詰め所があり、詰め所から顔を出した兵士は、エキュネウス一行に懐かしい故郷の香を感じ取って歓喜の表情を浮かべた。アテナイ軍の衛兵の詰め所である。この都市が外部にアトランティス人、内部には占領軍たるアテナイ軍の2重の支配を受けているという光景である。

詰め所の指揮官は同胞の姿に喜びは見せたものの、視線を忙しく動かして人数を数えていた。エキュネウスは内心苦笑いをした。彼が本国から率いてきた兵は八十人ばかりである。アトランティス大陸に流れる不穏な空気は、エキュネウスの叔父でアテナイ軍司令官エウクロスによって本国に伝えられてはいたが、エウクロスが再三にわたり求める増援を、本国では拒否し続けていた。

拒否の理由はギリシャ人たちの複雑な状況を物語るように幾つもある。まず、主力のアテナイでさえ、後世に繁栄を誇る都市国家に育つのはまだ数百年も先の話である。この時期のアテナイはギリシャに住むイオニア人の一部族がアテニス王の下で作り上げた小規模な王国に過ぎない。周辺の同盟国の軍勢を集めても、その兵士の動員力は四千人にも足りないのである。ただ、そんなアテナイのような小規模な国や部族が集まって、数万人のアトランティス軍の侵攻を防いだ。この人々の連帯感や勇敢さは比類無い。しかし、戦闘が終われば元の小規模な部族集団である。互いの思惑や小競り合いがあり、一つに纏まることなく、アトランティスを征服するほどの兵力はない。

また、アトランティスから得られる物が無いということは、アトランティスに兵力を

割くよりも、隣の部族を侵したり、鉱山開発や通商に力をいれる方が、それぞれの部族の長にとってよほど魅力的に見えるのである。アトランティスからの侵攻を監視する役割の兵士たちの必要性を認めながらも、どの部族も兵を出したがないのはそういう理由である。 エキュネウス一隊は、詰め所で案内の兵をつけてもらってシリャードの中を歩んだ。

「まだか？」

歩き続けてたまりかねたように、エキュネウスの副官が案内者に尋ねた。城門からずいぶん歩いたが、シリャードの中央部にあるアテナイ軍駐屯地に着かないのである。その間、景色は入れ替わったが、豪華な景色と人の多さに圧倒されて具体的な光景を記憶できない。歩く距離の長さのみ増幅されて、この案内者が道を見失って、同じ所をぐるぐると回っているのではないかと思ったのである。

「まもなく」

案内者の言葉に自信があり、導く足取りにも迷いが無い。そんな様子でエキュネウス一行は改めてこのシリャード巨大さを心に刻んだ。後にアテネという都市国家を築いて繁栄を誇る人々だが、この時期はアトランティスという国に畏怖するのみだった。やがて一行を新たに驚かせたのは、堀と言っても良い水路に架かった橋を渡った直後、大きく開けた視界に巨大な建築物が見えたことである。案内者がその建築物を指して言った。

「アレがアトランティスの神官が集う^{ロゲルスリン}六神司院の館、その後ろの巨大な神殿がアトランティスの者どもが信仰する^{ルミリア}真理の女神の神殿です。ロゲルスリンの館に隣り合っているのがアトランティスの王どもが集う議会ですよ」

「それで我が軍はどこに？」

エキュネウスの問いに案内者は右側を指し示し、エキュネウスらはその意外さに息をのんだ。左に立ち並ぶほど壮大な建築物はないが、この広場を囲む水路の北に架かる橋の向こうがぐるりと堀で囲まれていて、堀の向こうにアテナイの軍旗が見えた。この一角からでは全容を推し量ることが出来ないほど広大な区画に、二千の軍勢が詰めているのである。彼らは北の橋を渡り、駐屯地に入った。空気が違った。アトランティスの大地でここだけは小規模なギリシャの香りが漂っていた。

「おおっ、エキュネウス。よお来た」

アテナイ軍司令官のエウクロスは甥を抱きしめ、甥の背中を叩いて歓迎の意を表した。

「叔父上も、ご健勝の様子、安心いたしました」

エキュネウスの本音である。しかし、彼はやや首を傾げている。肉親として叔父が元気な様子でいるのはありがたいことだが、それ以上に、エキュネウスはアトランティスに上陸後、ルードン河沿いの街道を辿る旅でこの大陸の国力に畏怖した。母国では先の侵略は撃退したが、次の侵略があるのではないかとまことしやかに囁かれていた。たしかに、アトランティスはその余力を持っているように思われたのである。そんな大陸の中央に僅か二千の兵で駐屯している叔父は憔悴しているはずだ。ところが、叔父の顔色は思いの外、良好だった。エキュネウスはその意外さに首を傾げる間もなく、理由を知ることになった。見慣れぬ風体の男が入ってきたのである。

司令室に入ってきた男は見慣れないエキュネウスを一瞥して口ごもった。男が警戒する様子に、エウクロスは男にエキュネウスを紹介した。

「よい。これはエキュネウス、我が甥だ。いずれこの者にも話さねばならぬ」

しかし、来訪者はエキュネウスに名のらない。男は周囲に警戒を隠そうとしないまま、エウクロスの耳の側で囁くように言った。

「例の件、日取りが決まりましたゆえ、お知らせに参りました」

「ほお」

「六日後の早朝、決行いたします。いささか騒がしゅうなりますが、よろしくご配慮下さいませよう」

「お任せあれ、もとより治安維持は我らの任務にて」

そんな返答を受け取った男は一礼して部屋を去った。僅かな時間の出来事で、男が部屋から姿を消してみると、エウクロスは先ほどの会話がなかったかのように泰然とした姿勢である。

エキュネウスは問うた。

「あれは？」

「ロゲルスリン六神司院と言うてな、アトランティスの国々を統べるスーイン神帝を支える者たちだ」

「そのような者が何故、我らと通じようとするのです？」

「欲さ。この大地は欲でどろどろに熟しておる」

「欲？」

「奴らは己の欲望を神の神託と称して、アトランティスを操っておるのさ。そんな連中が邪魔者を排除するのに、我らを利用しようとしておる」

「それで、各国の国王や国王を統べるスーイン神帝は黙っているのですか？」

「その辺りが奴らの巧妙でずるがしこい所よ」

「さきほどの者が言った六日後に決行するというのは何が起きるのですか？」

エキュネウスの質問にエウクロスはにやりと笑って直接的な回答を避けた。

「それはおいおい分かること。お前もこのアトランティスの情勢をよく学ぶことが出来るだろうよ」

エウクロスは意味深に笑った。着任の挨拶を終え、率いてきた兵を兵舎で休ませ、この日の日程を終える頃になると、すでに日は落ち、アテナイ軍の駐屯を闇が覆っていた。

「小気味よい光景でしょう」

カルトレオスは前方の闇を指し示してそう言った。まだこの都市に不案内な甥のために、エウクロスがつけた新たな副官である。確かに、エキュネウスに侍る副官の言葉通り、明るく燃え上がるかがり火に背を向けて闇に眼を慣らしてみると駐屯地の塀の上に、アトランティスを代表する壮麗な建築物が黒い空の中でより漆黒に浮かび上がって見える。この大地を支配しているという感覚を味わうことが出来る光景である。

「しかし、アトランティスの兵どもはどこに居るのだ？」

そんなエキュネウスの疑問に、背後から現れたエウクロスが答えた。

「ここは連中にとって聖域。軍勢が踏み入ることは許されぬ。居るのは^{スーイン}神帝の警護の僧兵三百のみに過ぎぬ」

「では、残りの軍勢は何をしているのですか？」

「この大陸には九つの国がるのは知っておろう。その軍は互いに他国に向けて牙を研いでおる。我らギリシャ連合軍に対する憎しみの眼が我らに向いているように見えるが、我々が居なければ奴ら野獣は口を開けたとたんにその牙で隣国の喉元を食いちぎっているだろうよ」

「僅か二千の我が軍勢に、彼らが挑まぬのはいかなる理由ですか？」

「我らが戦えば、このシリヤードは破壊される。シリヤードを中心に纏まっていた奴らはばらばらになり互いに争うしかない。我らギリシャ連合軍を除けば、この大地は再び互いに争う戦乱の嵐に飲み込まれる。多少なりと知恵と欲がある者は、それを悟って我が軍勢の駐留を見て見ぬふりをしておるのよ」

この大地の有様の複雑さに黙りこくって首を傾げたエキュネウスに、昼間出会った少女の面影が浮かんだ。この混沌とした世界で、じっと何かを見定めようとするひたむきな視線。エキュネウスは甘く切ない思いに胸を押さえた。

物語は^{スーイン}神帝の館に移る。^{スーイン}神帝の座にあるオータルという人物は、優しい叔父というエリュティアが抱くイメージが一面を表しており、もう一方、アトランティス議会において並み居る個性豊かな王たちを統べるという所に、この人物の行政手腕が表れていた。

しかし、最高位とはいえ実質的な権力はない。すべて、^{ロゲルスリン}六神司院が神の神託を伺い、その神託を各国の国王に指示をするという役割である。平和な世であれば名君と讃えられたに違いない。しかし、皮肉な時の流れは、大地が最も混乱した時期にこの人物を最高位に据えた。

神の意志が、人徳と手腕を兼ね備えた王によって反映されるなら、理想的な社会と言えたかもしれない。ただ、神の意志をくみ取る^{ロゲルスリン}六神司院が、彼らの欲によって腐り果てていた。神のお告げと称して自らの欲望を満たす施策が^{スーイン}神帝に上奏されており、その影響力につけいる者どもの賄賂が横行して、真理を司る最高神ルミアの威光に、この神殿を中心に陰りが射すという状態である。

オータルはこの状況を変えようとした。腐敗の中核である^{ロゲルスリン}六神司院を排除するのである。議会は順調に推移しており、^{ロゲルスリン}六神司院も油断しているに違いない。アトランティス議会も明後日には日程を終了し、三日後には閉会の式典がある。アトランティス九カ国の王が集まる最後の日である。その場で近衛兵を動かして^{ロゲルスリン}ロゲルスゲラどもを排除し、過去の悪行を暴いて^{ロゲルスリン}六神司院の再編成を宣言する。アトランティスの汚濁を取り除くことが出来るはずだった。

「では、期待しているぞ」

「お任せあれ」

僧兵長イドロアスが周囲を注意深く伺いつつ、右の拳を胸に当てて、^{スーイン}神帝オタルの命を受けた。この神殿でオタルの元で神に忠誠を誓う者は多くはない。計画は慎重に進めなくてはならない。イドロアスが王の間を立ち去り、一人になったオータルは何故かエリュティアを思い起こした。

(あの娘が信じるもののために)

彼はそう思い、決意を新たにした。

ドリクスがエリュティアを伴ってシュレーブ国王の館の一角にある宝物庫にいる。今回のアトラスの訪問の答礼に、今度はエリュティア側からルージ国王の館にいるアトラスを訪問する。その時に持参する品物を選ばねばならないのである。

所蔵品は豊かで、アトランティス大陸内から集められた装飾品は数知れず、シュレーブという国の豊かさを物語っていた。もちろん、ここは ^{シリヤード} 聖都 における王の館に過ぎず、この館にこれだけの宝物があるなら、本国の城にどれほどの富を蓄えているのか想像もつかない。壁に作り付けの棚は、飾られた宝飾品が窓から入り込む日の光を反射して、壁全体が輝くようである。来客がこの光景を見れば、シュレーブの財力に恐れをなすに違いなく、事実、そういう意図で、館に招いた諸外国の貴族に披露することがある。

その片隅に、武具を展示する一角がある。神話を伴った幾筋かの槍が穂先を上にならべでおり、建国の伝説を伴ったいく振りもの宝剣が横にならべられていた。ドリクスが心に定めた剣もその中であつた。

「ルージの人々の気性は勇ましく、槍や剣など武具を好みましょう」

「ルージ人は、それほどまでに戦いが好きなのですか？」

エリュティアの疑問には答えず、ドリクスは一振りの剣を指し示した。

「おお、フェルムスの剣がございますぞ」

「特別な謂われでもあるのですか？」

「シュレーブ国の祖、グヴォーダー王がルミアの導きの元で与えられ、建国の道を切り開いた名刀でございます」

繊細な作りの宝刀で実用性はない。伝説は宝刀を引き立てために後から付け加えられた脚色に違いなかった。エリュティアは剣には興味を示さず、棚の片隅を指さした。

「先生。あれは？」

エリュティアが指さしたのは、大人の手の平ほどの大きさの丸い金属板である。

「クレアヌスの胸板でございますな」

ドリクスはため息を押し隠すような思いで答えた。ドリクスが指し示した剣に比べれば見劣りがする。シュレーブ建国の祖グヴォーダー王が戦場でのお守りに身につけていたもので、展示品としては欠かせないが、展示品の中で唯一の実用品である。直径が半スタン（約10cm）、厚みが1ティスタン（1.8cm）ほどの鋼の板は、細い鎖が

ついており、その表面に女神の半身のレリーフが刻まれていた。

「ここに刻まれているのはルミリアでしょうか？」

女神が手にする審判の弓で、ルミリア神だと分かるのである。クレアヌスの胸板に興味を示したエリュティアは、鋼の円盤を手にし、裏返して眺めた。錆びてかすれた薄い文字があり、彼女はその文言を指で辿って読んだ。

「我、常にルミリアと共に在り。ルミリア、常に我を導かん」

鎖を背に回して身につければ、鋼の円盤が左の胸に位置する構造で、^{ルミリア}真理の女神がこの胸板を着用する者を勇気づけるといふ謂われのある装飾品に違いない。小さな円盤に防御力は期待できず、鎧としての機能はない。勇敢で気丈な女性として描き出される当世風のルミリア神の像ではなく、古い金属板に描き出されるルミリアはたおやかな女性の雰囲気があり、ドリクスには古くささを感じさせた。しかし、その女神の優しげな面立ちはエリュティアにも似ている。

ドリクスはエリュティアの興味を剣に向けようと試みた。

「アトラス王子。あの勇敢な若者にはフェルムスの剣が似合いますよ」

エリュティアはドリクスが指し示す剣を一瞥したのみで興味を示さず、物思いにふけるようにクレアヌスの胸板に執着する。ドリクスは言葉を継いだ。

「ああっ、そう、『剣を交わす』と言うて、ルージには剣にまつわる面白い習慣がございましてな、ルージの男たちは、生涯で最も信頼を置ける者と身に帯びた剣を交換して義兄弟の約定を交わすとか」

「これを身につける者を、ルミリアは正しく導くのですね」

そう呟くエリュティアは、ドリクスの言葉を聞いていないに違い無かった。ドリクスはエリュティアの目を見て口ごもった。この少女は素直だが、思いこみが激しく、時にひどく頑固になる。この時のエリュティアも、神から受けた啓示を実行に移す巫女のように、あの王子に贈るのはこの品でなければならないという固い思いこみが瞳に現れていて、ドリクスにはその思いこみを解きたいと感じられたのである。

ドリクスは彼女の感情を害することを恐れた。もともとシュレーブ国とルージ国の関係を深めることが目的である。今のところ、この少女が結婚や夫婦生活ということを十分に理解しているかどうかは疑問だが、アトラスの元に嫁ぐことに疑問を感じている様子はない。彼女には機嫌良く嫁いでもらうためには、ここは彼女の意見を受け入れるのが得策だろう。ドリクスはエリュティアの手から胸板を取り上げて優しく言った。

「よろしいでしょう。それでは持参する前に、細工師どもに、いま少し磨かせて、宝物

に相応しい箱に入れさせましょう」

「きっと、あの方の心を導きます」

願いが叶えられたうれしさに、エリュティアの眼が和らいで口元に笑みが浮かんだ。この選択が、アトラスとエリュティア、二人の運命の方向を定めた。

この時、館の中でエリュティアを探し求めていたフェミナが姿を見せた。シャルで髪を結び、メタラックと呼ばれる貫頭衣の上にティノーブと言う薄衣を羽織ったアトランティスの貴婦人の正装である。

「エリュティア様、お別れに参りました」

そう語りかけるフェミナの声と態度は、衣服と同じく礼儀正しく臣下の礼を取っていて、幼なじみの親しい雰囲気を出していた。エリュティアはフェミナと頬を合わせるように抱擁した。身分の差を超えて互いの体温が言葉の代わりに伝わった。

フェミナはこれから父親の領地に戻り、嫁ぐ準備を整え、シュレーブ国の都パトローサで国王の祝福を受け、贈り物の隊列を加えて、フローイ国のに嫁ぐ手はずである。グライスという夫となる人物の名は知っているも、会話どころかまだ一度も顔を合わせたこともない。嫁ぐ土地は彼女が生まれ育ったシュレーブの文化の香りすらしない無骨な田舎の国である。その国の辺境では^{タレヴォー}蛮族の一団が叛乱を起こしているとも聞く。この二人は二度と顔を合わせる機会が無いかもしれない。フェミナの頬を伝う涙がそれを象徴していた。

エリュティアは男女の恋愛を司るフェリンの母で夫婦の愛情を司ると言われるフェイプラの名を挙げた。

「フェミナ、あなたの上に愛の女神^{フェイブラ}の祝福がありますように、そして、真理の女神^{ルミア}の輝きが常に貴女を照らしていますように」

フェミナは神の名を使わず、人として彼女の気持ちを語った。

「エリュティア様もお幸せに」

フェミナの本音である。自分同様、政略結婚の道具として東の海の向こうの島国に嫁ぐ予定のエリュティアの幸福を願ったのである。二人の少女は互いの体を離して見つめ合ったが、やがて、フェミナは涙を見られるのを避けるように身を翻して去った。

(私も?)

エリュティアはこの時に初めて、自分の命運に気付いたのかもしれない。彼女は明日、クレアヌスの胸板を持ってルージ王リダルの館にアトラスを訪問するのである。彼女の心の中に悲しみを伴った不安がうずまいた。

早朝、シリヤードの大地が大きく揺れた。町では水路の水面が踊るように揺れるのが見え、家の中では棚の中の品が床に散乱し、水差しがテーブルの上で倒れ、人は足下の揺れと不安と恐怖で歩くことが出来ないというほどの地震だった。

もちろん、アトランティスの大地が地震に見舞われることは過去にもあった。しかし、平均寿命が五十歳ばかりのこの世界では、年老いた語り部が物語る伝説にも近い事象で、伝説に聞く地震を初めて経験する者も多い。人々は不安におののいた。

幸い人的被害はほとんどなかったが、長い社会的混乱の中にいる人々の不安をかき立て、聖域に^{タレヴォー} 蛮族 の軍の駐留を許しているアトランティナに対する警告だという者やら、アテナイの神々がアトランティスの神に挑みかかってきたと言う者がいて、シリヤードの内部が落ち着かない。更に警備に当たる近衛兵たちがシリヤードの被害状況を調べるために町の中を駆け回るようにうろついていて、アテナイ軍との軍事衝突があるのではないかとさえささやかれた。

ただ、政治的な駆け引きをする者たちにとって、地震など無関係であるといわんばかりに、エリュティアが予定通りアトラスの元を訪問するという先触れの使者がルージ王の館に駆け、ルージ側はその使者に、予定通り歓迎の準備を整えているとの返答を持たせて返した。そこにアトラスとエリュティアの意志が反映されることはなかった。

フローイ国王の館では、国王ボルススと孫娘リーミルがなにやらひそひそ話に熱中する様子で、六神司院の者どもは欲望を満たすために占領軍に接近するばかりではなく何かのはかりごとを秘めている。その者を利用しようと凶るアテナイ軍や、排除を凶る^{スーイン} 神帝 の動き、このシリヤードという都市国家の内部は、様々な人々の思惑が渦巻いている。ただ、この地震がこの後のアトランティスの命運を示す予兆だと気付いた者は誰も居なかった。

地震に見舞われたのはアテナイ軍ち駐屯地も同様である。兵は兵舎から飛び出して空を仰いでゼウスに救いを求める程に動揺した。しかし、その動揺が時を経ずして収まったのは、司令官エウリクロスの人望の故に違いない。エキュネウスはそんな叔父をまぶしげに仰ぎ見た。

エウリクロスは甥にシリヤード内の探索を命じた。地震による被害調査の名目で、この都市国家の地理不案内な甥のエキュネウスに、現在彼らが置かれている状況を教えるのにちょうど良いと考えたのである。彼は、側近のカルトレウスと護衛の兵十名をつけて、エキュネウスを送り出した。

「隠す必要はない。隅から隅まで案内せよ」

そう言った総指揮官に、カルトレウスは頷いて、その言葉の裏の意味を察したことを伝えた。カルトレウスの見るところ、総指揮官の甥は、忠誠心と誠実さに富み、アテナイ人の象徴とも言って良い気性の人物らしい。この濁りのない気象の若者に、シリヤードというアトランティスの中心地で、どろどろと粘るような情勢の香りを嗅がせておかねばならない。

「陽を浴びた景色は、一段と壮麗でございましょう」

カルトレウスは、その景色に圧倒され、無言でルミリアの神殿を眺めるエキュネウスにそう言った。昨夜の砦の中、二人で並んで眺めた神殿だが、朝日を浴びるその姿を間近で眺めれば、その屋根は青い空にとけ込む高さがあり、ひと抱え以上もある太さの白大理石の柱は、太陽をかたどったレリーフが刻まれ、金の装飾が施されていた。アトランティス大陸の中央を南北に分断するルードン河の南の岸部にあり、真上から見れば正方形神殿の壁面を正確に東西南北に向けている。そのために、朝日が輝くこの時間は東の壁面が白くそびえて見え、その壁面や天井を支える柱のレリーフが朝日を反射して輝くのである。この時代、これほどの建造物は、ギリシャ世界には無かった。

「しかし、大樹も幹から朽ちると申します。外見は壮大でも、その内側は白蟻に食い荒らされておりますよ」

「白蟻？」

「ほらっ、そこかしこに、うようよと居りますな」

カルトレウスは神殿の周囲であわただしく動き回る神官たちをあごで指し示した。

「ずいぶん、慌ただしいようだが」

「先ほどの地震で慌てふためいて居るのでしょうか。ご覧あれ、休会のはずの議事場に急遽、各国の国王どもの旗が掲げられております」

「旗がどうしたのだ」

「アトランティスの国王どもの会議が開かれるときに掲げられるのかならわしとか。不穏な雰囲気、今頃、各国の公邸に使者が遣わされているところでございます」

「何が話し合われるのか興味があるところだな」

「いつものごとく、地震はこの聖地に^{タレヴォー} 蛮族 の侵入を許しているアトランティナに、神が怒りをあらわにしているのだ、などと騒ぎあうのでございましょう」

「詳しいな」

「何、今日の夜更けには、会議の内容を告げる者が、砦に参りますよ」

「ここに、我々への内通者が居るというのか？」

若く純真なエキュネウスには信じがたい。昨日からその巨大さや壮麗さに驚かせ続けられているシリヤードという都市国家は信仰によって、アトランティスの九カ国をまとめ上げる精神的な支柱のはずだ。その内部に裏切り者が居るというのである。しかし、カルトレウスはエキュネウスの問いかけに意味深な笑顔で頷いて、疑問を肯定した。

そんな会話をしつつ、一行はルミリア神殿とその両脇にある^{ロゲルスリン} 六神司院やアトランティス議会の前を通り過ぎた。

「神殿の東と西に、各国の王の居宅がございます」

カルトレウスはそんな案内をしながら、背後の兵に手で合図をして道の脇に控えさせ、自らもエキュネウスを導くように街道沿いの民家の軒先に立ち止まった。前方からやってくる行列に道を譲ったのである。カルトレウスは説明を続けた。

「ここでは、西にはフローイ、東にはルージなどの国王が住まいを構え、笑顔の内側では、互いにのど笛を食いちぎるかのような内情。我々は彼らとの争いを避けつつ、彼らの争いを見守ればよいということです」

エキュネウスは行列を眺めて聞いた。

「あれは？」

「旗から判別すればシュレーブ国の者どもですな。列を構成する侍女どもから見れば、後ろの輿には王家の女どもが乗っているのでしょうか」

そんな言葉を交わすエキュネウスとカルトレウスの前を行列の先頭が通り過ぎた。彼らが存在しないかのように肅々とした雰囲気である。^{タレヴォー} 蛮族 の者どもを見るのも汚らしいとでも言いたげに、行列の者どもの中にアテナイの兵士と視線を合わせる者が居ない。

次の瞬間、エキュネウスと行列の輿に載った少女の視線が一致した。おそらく二人は心を共有したに違いない。記憶をかき乱される瞬間、相手が昨日出会った人物だと理解する瞬間。少女はすぐに顔を伏せてエキュネウスの視線を避けたが、それは他の人々のような不浄な者から目を背けるためではない。再び出会った相手が何者なのかという疑問を思いめぐらす所作だったのだろう。エキュネウスは通り過ぎる行列を眺めつつ少女と同じ思いを言葉に出して尋ねた。

「あの女性は？」

「輿に王家の紋章がございました。おそらく、シュレーブ王の娘のエリュティア姫かと」

「エリュティア」

エキュネウスは少女の顔立ちと共にその名を心に刻んだ。昨日は美の女神アフロディーテを思い起こさせた少女だが、改めて眺めたエリュティアには成熟した女性の美というより、まだ未熟さ故の純真さを秘めた少女の美しさがあった。顔を伏せたエリュティアは無垢な瞳で胸元に赤い包みを眺めていた。

時をやや遡る、まだ地震の混乱から覚めない早朝の^{シリヤード} 聖都 の中央付近で、若者たちの勇ましいかけ声が響いていた。ルージ王リダルの館で、ルージからやってきたアトラスとその側近が、中庭に設けられた砂場でレスリングのトレーニングをしているのである。アトラスたちにとって朝の習慣に過ぎないが、地震の直後で不安に駆られる人々には、若者たちが競う声は激しい乱闘を連想させ、何事が起きたのかと耳を澄ませた。

リダルは若者たちのトレーニングを止めさせようとはしなかった。若者たちが競い合う勇ましい声が地の悪神を威圧するという言い伝えがあった。ただ、この王は希代の戦術家らしく合理的で、若者のかけ声で悪神を退けようとは考えてはいない。若者たちの力強いかけ声で、地震で乱れる人々の心が静まることを期待したのである。その若者たちに混じるザイラスの声を聞きつけたリダルは、部下にザイラスを執務室に呼ぶよう言いつけた。

「我らが王よ、ただいま参りました」

ザイラスが挨拶するまもなく、リダルはザイラスを親しげに呼び寄せて続けた。
「おおっ、ザイラスか。近こ^{スーイン}う寄れ。神帝 からのお召しがあった。儂は議会へ行かねばならない」

「では、エリュティア姫との面会の席は？」

「その事よ。お前はアトラスやエリュティア姫と歳も近い。年寄りどもより、気づくことも多かるう。お前が姫を迎える手配りをせよ」

「私のような者がですか？」

ザイラスがそう聴いたのは、自分は他の者と違って、一般庶民出身で誇るべき家柄がないということである。リダルはその点について全く膾炙する気配もなく断言した。

「そうと決めたぞ」

この王が断言すると、その言葉を覆すことは難しく、臣下は命令を受け入れるしかない。

「仰せの通りに」

そう頷くザイラスに、リダルは腰の短剣を差し出した。リダルが日常生活の中で、戦の長剣の代わりに身につけている装飾品で、武器としての実用性はない。しかし、束にはアクアマリンがはめ込まれたルージ王家を証する持ち物である。

「これを、儂の身代わりとせよ」

リダルがそう言ったのは、王族に次ぐ貴族の一員という身分に取り立てるので、気兼

ねせず他国の王家の者に接しろと言うことである。装飾や儀礼を嫌うこの王は、時に家臣が驚くほどの気配りと大胆な決断をする。そしてそれは気まぐれや思いつきではなく、常に冷静な計算の結果である。確かに、ザイラスという青年は、次世代の王となるべきアトラスを支える側近として申し分のない能力を持っていた。

しかし、ザイラスは光栄に浴した喜びの表情の内側で、様々な感情が入り交じって乱れるのを自覚している。男としてリダルの勇猛さには敬意を感じている。その男から全幅の信頼を得たという喜び。また、リダルがザイラスの父を殺した仇だと言うこと、そして何より、今の自分がリダルの信頼を裏切って他国に内通しているという後ろめたさである。ザイラスは複雑な表情で、アトランティス議会に向かうリダルの背を見送った。ただ、復讐心というザイラスを支え続けた信念に揺るぎはなかったようで、彼は迷いを振り払って任務を考えた。あと、ニライ（約二時間）も経てば、挨拶に来るエリュティア姫を館に迎えるのである。

アトラスと面会するためにエリュティアが、シュレーブ国公邸を発ったのは、面会時間の二ライ前である。目的のルージ公邸はルミリア神殿を挟んで東に1ゲリア半、現代の距離の単位で約1kmにある。成人が早足で歩けば15分とかからない距離だが、自国の公邸前で行列の隊列を整え、エリュティアを輿に乗せ、神殿前の^{タレヴォー}蛮族の砦を避けると称して、迂回して、シリヤードに住む一般市民が集う広場を通過して、休息を取った。ルージ国公邸まで二ライの時間をたっぴりと使うのである。全て、シュレーブの姫がルージ公邸を訪問するということを市民たちの目に焼き付けておく為である。この噂はすぐに各国に広がるだろう。行列に付き従うエリュティアの教師ドリクスはそんな計算をしていた。ドリクスは最後の決断を促すようにエリュティアに語りかけた。

「では、参りましょうか」

「はいっ」

エリュティアは短く返事ただけで、素直に輿に乗り込んだ。アトラスへの贈り物になるクレアヌスの胸板を、深紅の布で包んで胸元に大切に抱きかかえていた。本来は侍従が捧げ持って目的地まで運搬する。エリュティアはそこ刻まれた^{ルミリア}真理の女神に祈りを込めるように、侍従にはまかせず自分で持参しているのである。

（エリュティア様は、クレアヌスの胸板にどんな思いを込めているのか）

ドリクスはふとそう思った。彼女は救国の英雄の登場を祈っているに違いない。しかし、周囲の男どもによって運命の糸を操られる操り人形の少女に、この時だけはアトラスと結ばれた後の自分の幸福のみ祈っていて欲しいとも考えたのである。

一行は広場を出発した。既に到着を知らせる先触れの使者はルージ公邸の門前に到着しているだろう。

同じ頃、館の主が不在になったとき、公邸の内部を取り仕切る役割を託された老ランドスは、王の意を受けて、ザイラスによく協力して準備を整えた。その手際の良さに、アトラスの近習の若者たちはすることもなく手持ちぶさたで、公邸の門に近い一画に屯している。

「我らが王妃となる姫か。早く一目みたいものだ」

アトラスの側近のラヌガンが仲間の若者を見回して言った。仲間もまた好奇心を込めて頷いた。彼らはリダルを名ではなく「我らが王」と呼ぶ。「我らが王妃」と称したのはアトラスが次の王となり、その王の後として彼らが敬う女性になるだろうという確信を持っているのである。

「ラヌガン、お前たちは、奥の部屋で控えている」

ザイラスが通りかかって、若者たちに命じるように言った。

「朋輩のくせに、我らの指揮官にでもなったような口をきく」

「王の短剣を得て、思い上がっているのではないか」

そんな声が背後に聞こえたが、ザイラスは忙しく、説明に要する時間がない。ザイラスには先日、エリュティア姫を訪問したときの記憶がある。アトラスがやや乱暴で、姫に対する敬意を失する態度だった。今回の面会ではそれを避けたいと考えているのである。

（なんと、愚かなことだ）

ザイラスは自分の心情を心の中でそう評した。リダルを親の敵だと信じ他国に通じている。ただ、その一方で幼い頃から共に過ごしたアトラスに、弟に感じるような親近感を感じていた。父の愛情を妻であるアトラスの母に向けさるため、アトラスは父親の歡心を買おうと行動する。時にそれが乱暴な武人の姿を取ることがある。

しかし、その仮面を取り払えば、アトラスという王子は無邪気な少年の心を持っていて、あの無垢なエリュティア姫とよく似合う。ザイラスはアトラスを無垢な少年のままエリュティアと娶せてやりたいと考えているのである。この時期にアトラスの素直な人格を知るのは、幼い頃から共に過ごしたザイラスと、偶然に彼の心に触れたリーミルだけだったに違いない。先日の面会の後、アトラスは素直に自分の無礼な態度に自己嫌悪を抱いているようだ。ただ、ここで側近のラヌガンたちにそそのかされれば、彼は再びつまらぬ見栄を張って武人の姿を装うに違いない。ザイラスはそれを避けるために、一時ラヌガンたちをアトラスから遠ざけておこうと考えたのである。しかし、意外なところでザイラスの危惧が的中した。

将来の妻となるかもしれない女性がまもなく来訪する。自分の運命に関わる女性だという思いと、出会ったときに不躰な振る舞いをしてしまった罪悪感で落ち着かず、アトラスは控えの間に留まっておくことができずに、部屋の入り口をうろうろと歩き回っていた。奥の間に引き上げるラヌガンたちがアトラスと顔を合わせたのはそんな時だった。

「我らが王子ではないか。ここに居られたのか」

「おおっ」

頷くように応じたアトラスに、ラヌガンと同じ侍従のテウススが茶化すように言った。

「我らが王子が、王妃となる娘御を手懐づける様子、とくと拝見いたしましょう」

「その通り。我らが世代になっても、女どもに政治に口出しされるのはたまらぬ」

「女どもをてなづけるのは早いほうがよい」

侍従たちは次々にそう言った。名指しはしないが、ルージ国の宮廷でアトラスの母リネをはじめとする女たちが、政治に口出しをする状況に辟易しているというのである。飢狼王とも称される勇猛なリダルが、気だての強い王妃の扱いに手を焼いているというのは、家臣や他国の者どもの知るところで、失笑を買ってもいる。それを密かに知るアトラスは未来の家臣に応えざるを得ない。

「何、女など力でねじ伏せればいいだけのこと」

アトラスの言葉を聞いたラヌガンたちは口々に次の世代の王を褒めた。

「さすがは、我らが王子。期待していきましょう」

部屋に走り込んできた小者がアトラスに告げた。

「エリュティア様がお着きになりました」

アトラスの目から素直な少年の心が消え、武勇を誇示する男の視線に変わっていた。

アトラスがエリュティアを迎えたのは、庭に面した館の一室である。大きな窓があるのだが、窓の外の大木が木陰を作って、部屋の隅は灯りが必要ではないかと思わせるほど薄暗い。風通しはよく、庭の花々の香りが風に乗って漂ってきた。ザイラスはその部屋の窓際に、二人のためにベンチを準備させていた。やや薄暗く落ち着いた雰囲気の中で、花の香りが漂う木漏れ日を浴びる窓際のベンチに、主人と来客が並んで座るという演出である。この館まで壮大な行列を作っていた人々は、館の敷地の一角に導かれてもてなしを受けた。エリュティアとドリクスは、そんな人々を残して出迎えに出たザイラスにアトラスが待つ部屋に導かれた。

「我らが王子よ。エリュティア様がお着きです」

ザイラスの言葉に、ドリクスに返事を促されたエリュティアがか細く言った。

「先日のご訪問の返礼に参りました」

「よお、参られた。歓迎いたします」

アトラスの言葉に、傍らに控えていたザイラスは笑顔のままぴくりと眉を動かした。王子の声音に威張る調子があり、素直な心を失っている様子が聞き取れたのである。かれはそれを言葉には出さず、新たな話題を窓辺の鳥かごに移した。

「ほらっ、窓の外にリルナがおります」

ザイラスの目配せをうけたアトラスが話題を引き継いだ。

「ルージュの山岳地帯にいる小鳥です。美しい姿と囀りがルージュ人の心を和ませてくれるのです」

「ただ、エリュティア様の美しさにはかないますまい」

ザイラスはそう付け加えるように言って、アトラスの視線をエリュティアに導いた。そして、二人を優しく窓辺のベンチに追いやるように腕を広げた。ザイラスはドリクスに会釈して、その視線で部屋の片隅の椅子を指し示しながら言った。

「では、ドリクス様には、あちらでリルナの話などをお聞かせいたしましょう」

ザイラスはアトラスとエリュティアを窓辺に残して、自分とドリクスは部屋の隅で控えていようというのである。ドリクスはそれを悟って同意した。

「おおっ、是非とも聞かせていただきたいものだ」

薄暗く目立たない場所だが、窓辺にいる二人の会話が聞こえ、必要なら、二人の会話が弾むように話題を投げかけることができる位置である。

(ルージに、こういう若者が)

ドリクスは部屋の隅に誘うザイラスの背を眺めてそう思った。ルージは武辺者の地と聞いていたが、わずか二十歳にも満たない若者が、このような細やかな心配りをすることに驚いたのである。しかも、その気遣いは計算ではなく人間らしい優しさが垣間見えた。

窓辺に残されたエリュティアは凍り付いたように堅く、胸元に抱いた物を抱きしめる姿勢を保って、アトラスの言葉を待っていた。アトラスもまた戸惑っていた。今まで若い婦人と二人で話をする機会はほとんどなかった。アトラスは、ふと別の女性を思い出した。

「私の可愛い剣士さま」

リーミルならそう優しく笑って、男心の隙にするりと入り込んで来ただろうと思ったのである。しかし、エリュティアにはリーミルのようなしなやかな話術はなかった。エリュティアは姿のみならず、発する言葉も繊細で美しいが、外見は薄氷のように堅く濁りのない透明感と、心は脆く、返答の力加減を誤れば、傷つけ壊してしまいそうな危うさを感じる。そんな彼女が緊張で震えるような声で、しかし、力を込めて言った。

「ささやかですが、先の贈り物の返礼でございます。どうぞお受け取りくださいませ」

エリュティアは胸に抱いていた包みを解いて、細い鎖がついた金属板をアトラスに差し出した。

「これは？」

アトラスの問いに、エリュティアはどう応えたものか迷ったが、円盤に刻まれた文字を読み上げた。

「『我、常に真理の女神と共に在り。真理の女神、常に我を導かん』」

「では、この像は真理の女神ですか」

アトラスは円盤に刻まれた女性の像をエリュティアと見比べて、似ていると思いつつ、傍らに刻まれた弓で、エリュティアの言葉に納得した。

「冶金の神が、この胸板に真理の女神の姿と精神を写し取ったという伝説がございます」

「この金属板に、真理の女神の意志が込められていると？」

「我がシュレーブの祖・グヴォーダー王が身につけた物で、この胸板を身につける者にルミアのご加護があるとされています」

エリュティアの言葉にアトラスは反駁した。

「民を率いる王として必要なのは、真理ではなく混沌の中で示す勇敢さと力強さです」

「この胸板によって、貴方様の勇敢さと力強さが真理の導きを受けますように」

エリュティアは祈りをこめてそう言ったが、その言葉によってアトラスには心をかき乱されるように母の姿が思い起こされた。夫の愛が得られないと嘆き悲しむことが人生になったかのような女の姿である。もし、真理があるなら、母の運命は何処で狂ってしまったのかという疑問や怒り、そして、狂った母の運命の産物が母と父の間に生まれた自分自身ではないかという罪悪感、そんな感情がアトラスの返事にやや怒りの感情を込めさせ、口調が激しくなった。

「真理の導きとはなんです？」

「それは」

とまどうエリュティアにアトラスは断言した。

「私の運命を定めるのは、私自身です」

「では、人に神の導きは不要だと仰るの？」

「私は自ら運命を切り開きます。エリュティア、妻としての貴女の進むべき道も示しましょう」

「神々のご威光を知らないのは傲慢ではありませんか」

「いや。神に運命をかき乱されてたまるものか」

アトラスはやがて妻となるだろう女性の型に手をかけて引き寄せて、言い聞かせるように語り続けた。

「エリュティア、私に貴女の運命を託しなさい」

発した言葉の意味はともかく、本来はエリュティア様、あるいはエリュティア姫と敬意を込めて呼ぶべき相手である。アトラスは彼女が既に妻であるかのように呼び捨てにし、彼女を引き寄せる腕にも優しさがなかった。その粗暴な振る舞いにエリュティアはおびえを見せてドリクスを振り返った。ルージ国における王妃リネと王リダルの確執は、息子のアトラスの心に深く食い入ってトラウマになっている。それを差し引いてもアトラスは感情に流され、相手の女性にぶしつけな振る舞いをしているとザイラスは考えた。

この時にエリュティアの教師ドリクスがアトラスとエリュティアの間に割って入らなければ、ザイラスがアトラスを引き離していたに違いない。ただ、シュレーブ国のドリクスの行為の方が、洗練されていた。

「なんともお元気な話しぶり、お二人ともお若い。この年寄りには羨ましゅうございます」

ドリクスは笑顔で二人の話題に割り込みながら、エリュティアに言い聞かせるような

素振りを取って、二人の間に割って入って、エリュティアの視界からアトラスを消した。

「アトラス王子の果敢な意志はおいおい慣れましょう。エリュティア様、まだお気づきではないが、貴女様には果敢な意志を包み込む包容力がございます。やがてお二人はお似合いの夫婦になられましょう」

「私は、この方に、嫁がねば……」

嫁がばならないのですかという、エリュティアの言葉をドリクスは途中で制して、アトラスを振り返って言った。

「本日は、返礼のみにて、この辺りで失礼いたしましょう。正式なお話は改めて正式な使者を使わすことにいたします」

ザイラスの目配せで、アトラスは冷静さを取り戻して、自分の粗暴さに気づいていた。アトラスは礼儀を補うようにドリクスの言葉に応じた。

「では、姫をお送りいたしましょう」

「ご配慮は無用にて」

ドリクスは笑顔でそう言って、ザイラスに目配せをした。いまは、この二人は距離を置く方が良いというのである。ザイラスもよく察して、アトラスの背後からアトラスの肩に手をかけてエリュティアの後を追うのを止めさせた。ドリクスはエリュティアに寄り添うように公邸の玄関へ導きつつ、アトラスのことを考えた。先ほどのアトラスの口調から推察しても、エリュティアを妻に迎える心の準備はできているようだった。大陸の中原に覇を唱えるシュレーブ育ちの姫の優美さと、大陸の東に浮かぶ島国のルージの王子の粗暴さの吊り合いがとれるかどうかは別にして、両国の関係を強めるための輿入れのきっかけは整ったと判断したのである。

部屋に残されたザイラスは、非難の口調を隠そうともせずと言った。「我らが王子よ、ご婦人に対する敬意を忘れてはなりませんと申したでしょうに」

普段なら、兄が弟を諭すように注意する男だが、この日のザイラスは、リダル王から受けた恩恵と裏切りの罪悪感で心が乱れていた。アトラス自身の心が乱れていることを気遣う余裕もなくアトラスを責め続けた。

「我がルージュ国とシュレーブ国の体面をお考えください。姫君に敬意を払えないなど愚か者のすること」

この時、アトラスもまた心の整理がつかず気が高ぶっていた。

「ザイラス。お前は私が愚か者の^{タレヴォー} 蛮族 だとでも」

「そうは申しておりません。我らが王子が愚か者ではない故に、行動に注意してくれと申し上げているのです」

「黙れ。下賤の父親の息子が、口が過ぎよう」

一瞬、二人の間に沈黙が走った。父親の出自が卑しいと言うことはザイラスが密かに気にかけていることは、アトラスもよく知っている。素直な心で言えば、アトラスはザイラスに兄のような親近感と信頼感を抱いている。ただ、この時は口が滑った。ただ、致命的な言葉であったが故に、アトラスから投げかけられた言葉はザイラスの心に深く刻まれた。アトラスも自分の過ちに舌打ちしたくなる思いとともに、訳のわからない怒りや不満が心の中で渦巻いて、謝罪をする機会を失った。

「下がれ。お前の顔は見たくもない」

アトラスの指示に、ザイラスは一礼して従ったが、その表情に失望感や悲しさを隠しては居なかった。アトラスは近習の者たちとも昼食を共にせず、一人で部屋に閉じこもった。

お互いの身分に気づく前のリーミルがアトラスに尋ねたことがある。

「ルージュの牙狼王リダルが戦をしたがっているのは本当なの？」

アトラスの父が好戦的だという噂が立つのは、アトランティス議会での彼の立場による。アトランティスの大地から^{タレヴォー} 蛮族 どもを追い払い、アトランティナによる統治を取り戻すというのがリダルの主張である。彼はアトラスの祖父に当たるロスドム王の息子として五百の兵を指揮して海を渡り、敗色が濃い中で、その兵が潰えるほど戦い抜いたが、戦意は失わなかった。そして、何よりルージュはその得意とする海の戦いでは、ギリシャ人に負けたことがなかった。そんなリダルは戦に負けたという意識を全く持って

いない。しかし、アトランティス議会の愚かな妥協の産物として^{フレソオー} 蛮族^{タレヴォー} どもと講和し、アトランティナにとって最も聖なる場所に 蛮族 に居座られている。リダルにはそれが腹立たしくてたまらないのである。 ことある事に開戦を叫ぶリダルに対し、穏健派のシュレーブは対立する立場にあり、フローイは立場を明らかにしないままで様子うかがっていた。アトランティスを代表する三つの強国は、それぞれの思惑で異なる立場を取り、小国はその3カ国に色よい気配を見せながらも立場は鮮明にしては居ない。

リダルが会議から帰ってくるときには、大抵、開戦を叫ぶリダルに対して物わかりの悪い各国に怒りを露わにしながら帰ってくるのだが、今日のリダルは機嫌がよい。帰って来るや、執務室に息子を呼びつけ肩を抱くように言った。

「おおっ、アトラス。我が王子よ、どうして儂に黙っていた」

「何を、でございますか」 アトラスは父の言葉に首をかしげた。幼い頃からこの父親と腹を割って話したことはないし、内心の複雑な心情を伝えたことはない。しかし、王と王子の間で公にすべき事柄で、父に秘密は持っていない。リダルは察しの悪い息子に機嫌良く言った。

「リーミル姫とのことよ」

「リーミル姫とのこと？」

「隠さずとも良い。子細はボルスス王から聞いた。お前は暴漢に絡まれて難渋するリーミル姫を救ったとか」

その父の言葉で、アトラスにもリダルの言葉の意味が分かりかけてきた。父親に召されてこのシリヤードに到着した日、忙しい父と面会することができないまま、街の中を彷徨っていて彼女に出会っていた。ただ、素直なアトラスは姫を救ったという自覚はない。自分に絡んでくる暴漢を切って捨てるしかないと考えた時に、姫の機転でその状況を抜け出したという感覚である。息子の記憶の整理が突かないと見たリダルは、更にボルススから伝え聞いたことを話して聞かせた。

「お前は、姫に言いがかりを付ける二十人もの荒くれを、一気に蹴散らして姫を救い、名も告げずに去ったと」

「いや、それは」

実戦は未経験だが、アトラスは将来の王として剣やレスリングなど戦闘訓練を受けていて、敵意をむき出しにする相手の数を数えることぐらいはできる。アトラスの記憶では、暴漢はせいぜい三人で、二十人というのは数字が誇張されている。リダルには実戦経験があり、一人で二十人の暴漢を相手にするという話の不自然さに気づいても良いはずだがそれを口には出さなかった。

もしも、愛情に不器用なリダルの心情を読み解けば、息子を褒められたうれしさに冷静さを失った父親という姿だが、アトラスはその父親の心情に気づかなかった。その数字を正そうとするアトラスの言葉を制してリダルが言った。

「よいか、アトラス。ボルスス王の口利きで、お前は議会議会に召されて、^{スーイン}神帝から勇者としてのお言葉を賜ることになった」

「私が、ですか？」

アトランティス議会の会場は関係者以外の入室は厳しく制限されていて、例え王家の者とはいえ、国王以外の者が参内するのは例がない。まして、^{スーイン}神帝の直々にお言葉を賜るといふのは信じられないほど光栄な事である。

「左様。フローイ国のボルスス王の口添えもあったが、^{スーイン}神帝もお前に興味を示され、是非とも会ってみたいとのことだ」

^{スーイン}「神帝が、私に」

突然にわき上がってきて体を満たした感激で、アトラスは言葉を失った。この時代、^{スーイン}神帝といえは神に次ぐ地位の人物で、そんな人物が会いたいと言うのは、アトランティナにとって想像もつかないほど光栄な出来事である。

一方、ザイラスの心は晴れていない。もともと、父親が下賤の身分の出自だったことで、不愉快な思いをすることも多い。それが彼にルージ国に対する憎しみを維持させ続け、フローイ国に内通させてきた。ただ、素直な心情をみせるアトラスに、恐れ多いと思いつつも弟に感じる親近感も感じてきた。ただ、今日はその最愛の弟から裏切りの言葉を告げられたのである。彼の心が憎しみや悲しみで曇らないはずがなかった。そんなザイラスはリダル王が議会から帰り、今日のアトラスとエリュティアの面会の顛末を王に報告しようとした矢先、王の下僕リウスが王の指示を伝えに来た。

「同道に及ばず」という。

明日、アトラスの議会参内に、ザイラスは同行せずに館に残れと言うのである。

(今までアトラス王子の第一の従者として、お仕えしてきたものを)

ザイラスは唇をかみしめる思いでそう考えた。リダル王らしく、その命令は短い。ただ、今朝からの状況を合わせて考えれば、アトラスが言った「お前の顔は見たくない」と言う言葉を、リダル王が実行に移したのだろうと考えたのである。

王子の近習の役割を解かれてしまえば、ザイラスにこの館での仕事はない。気分転換を求めて街に出ようとしたザイラスは、館の入り口に近い一室で人影を見つけて足を止めた。

「老ウルスス殿」

旅装を解く男を見つけたザイラスが発した声に、懐かしさや親しみがこもっている。感情を抑えることから周囲から「石の人」とも揶揄されるザイラスが素直な感情を表すのは珍しい。それほど、ザイラスがこの老ウルススに寄せる信頼が大きいのだろう。

「おお、少し見ぬ間に、ますますお父上に似てきたようだ」

老ウルススはザイラスの両肩に手をかけて引き寄せ、祖父が孫を抱くようにザイラスの体を引き寄せて抱いた。

「しかし、また、何のご用で？」

意外な再会の理由を尋ねるザイラスに、老ウルススは体を離して向き合って答えた。「うむ。我らが王から留守居役を賜った。これからはランドス殿に代わり、儂がこの館を取り仕切る」

会議を終えて帰国する王に代わってこの館に常駐し、他国と様々な折衝を行う役割である。忠実。純朴。飾らない老ウルススの人柄は、その役割に相応しい。ただ、ザイラスは名残惜しそうに言った。

「久々にお会いできましたが、私はこれから王子と共に帰国する身です」

老ウルススは静かにザイラスを眺めた。故郷では父母はすでに亡く、寄るべき家系も持たないこの青年を待つ家族も家臣もない。老ウルススはその点には触れずに語りかけるように言った。

「いや、ザイラスよ。王からそなたをもらい受けた。儂の領地は辺境故に宮廷の事情に通じて居らぬ。しかし、ザイラス。お前ほど王子のそばに侍り、宮廷の状況に通じている者は居らぬだろう。私の片腕として私を支えてくれ」

「しかし、アトラス王子の近習のお役目は？」

「王子には悪いが、その任は解いてもらおう。お前はこのシリヤードで、留守居役の任を学ぶのだ」

ザイラスの表情は輝いた。次の王となるアトラスの近習を勤めるのは出世ルートだが、この^{シリヤード}聖都というアトランティスの政治の中心部で、国の代表としてのつとめを果たすことは、一段階出世したと言うことに違いない。そして、それよりも、心を許せる上役の下で働けるとするのはザイラスにとってありがたいことだった。しかし、そのザイラスの表情が一瞬曇るのをウルススは見逃さなかった。

「ザイラスよ、何か気がかりでも？」

「いえ、どうして我らが王が私を王子から引き離してこのシリヤードにとどめたのかと」

「お前の知略や忠誠が認めされているということだ」

「ウルスス殿ならご存じでしょう。我らが王と私の父の経緯を」

「そなたの父は、比類無き勇者であった」

「しかし、父は我らが王に見捨てられ、犠牲となって戦場に消えました」

「誰がそんなことを？」

「クイグリフス様のお話を、その家臣から伝え聞きました」

クイグリフスとはリダル王の年の離れた義弟である。老ウルススはその言葉の内容を即座に否定した。

「クイグリフス様は当時歳若く、戦場には出ておられぬ。それなのに、どうしてお前の父の事を知っているのか」

「では、あれはでまかせですか」

ザイラスのそんな言葉に老ウルススは頷きながら考えた。見るべき家系を持たないまま、王子の側近に取り立てられたこの若者を妬む者は多い。そんな者どもによからぬ出来事を吹き込まれたのだろう。そして、ザイラスを今の身分に取り立てたりダル王は

、ガイラスの父に対する感謝や敬意を、その息子のガイラスへの好意として向けては居ても、その理由を長々と話して聞かせたことはあるまい。そう考えた老ウルススは、ガイラスに花壇の縁を指し示し、そこに並んで座りながら、思い出をたどるように話し始めた。

「退却戦の中、我らを追う敵は五百。我らは手負いの者も含めて三十人に減じていた。普段は従者として、片時もリダル王子の傍らを離れなかったお前の父は、あの時、何故か隊列の最後尾にいた。そして立ち止まったのが、左右が切り立った崖になった一本道の入り口だ。敵は五百とはいえ、そこなら一度にかかってこれる敵は数人。一人でも敵の足止めができるというわけだ」

「死ぬまでは？」

「その通り。お前の父は槍を構え、黙ったまま儂を振り返って黙ったまま、笑いおった。生死を超えた満面の笑みでな。命を捧げるのに悔いはないという笑顔じゃった」

「その後は？」

「ザイラスよ、この年寄りの臆病ぶり、笑うてくれ。お前の父を見捨てたというなら、我らが王ではなく儂こそ、お前の父を見捨てた。お前の父を一人残して、王の跡を追った」

「老ウルスス殿。貴方も列の最後尾に居られたと言うことは、私の父が敵の足止めをしなければ貴方がその役をするつもりだったのでしょ。私の父が勇敢だとするなら、貴方もまた」

ザイラスの言葉に老ウルススは、苦渋のため息をつくように答えた。

「いや、それだけではない。私が我が王に追いついたとき、王はお前の父がいないのに気づいて、救出に戻ろうとされるどころだった。そのままでは、戻って、お前の父が足止めした敵の中に突入しかねない勢いじゃった」

「それで、戻られたのですか」

「いや、儂は目撃もしなかったお前の父の最後を、我が王に語って、あの者の命を無駄にしたくなければ、留まるようお諫めしたのだ。この儂の一世一代の嘘じゃった。迫る敵をお前の父は一人で支え、退却の時間を稼いだ。もしお前の父がおらなんだら、儂も我らが王も無事に生きて帰国は出来なかったかもしれぬ」

「では、我らが王が私の父を見殺しにしたのではないと？」

「お前の父は、他の誰よりも強く、勇敢で、そして、忠誠心に満ちていた。父親を誇りにせよ」

ウルススはそう言い置いて、その場を去った。ウルススは未だリダル王にも明かしていない真実をザイラスに明かしたのである。長年隠してきた秘密を明かした老將軍の

背は、おいて疲れ果てて見えた。

もちろん、ザイラスにはリダルの信頼を裏切り、フローイに内通しているという自覚がある。全て、父親がリダル王に殺されたと信じたために行った行為である。その復讐の根拠がザイラスの心の中で音を立てるように激しく崩れた。心を失ったように静止し、その姿は夜の闇に包み込まれていった。

明るく日の朝、アトラスの命でザイラスを探すアトラスの近習の一人、オウガヌは館の入り口にザイラスの姿を見つけて声をかけた。

「ザイラス。我らが王子がお呼びだ」

その声に怯えるように振り向いたザイラスの表情は、焦燥感に満ちていて、目は充血し、髪は乱れて、普段の理知的なイメージがなかった。昨夜から近習仲間の居室に戻っていなかった。何を思い悩んでいるのかは分からなかったがこの場所で一晩を眠らずに過ごしたらしい。オウガヌは再び声をかけ、ザイラスはよろりと不安定な足下を踏みしめるように立ち上がった。オウガヌはザイラスを先導して歩きながら声をかけた。

「ザイラス。良い気持ちか？ お前はウルスス殿の進言で出世するそうだな」

このオウガヌという若者はザイラスより年若く、王子の近習としての経験も浅いがザイラスと対等以上の物言いをする。それがオウガヌという青年をよく表していた。度胸もあり剣の腕も卓越している。そして、そんな彼がアトラス王子に抱くのは紛れもなく純粋な忠誠心だが、そのより所は、アトラスがルージ王家の正当な世継ぎだという事である。彼にとって血筋の正しさが全てで、ザイラスは見下す相手である。

「ザイラス。どうした？」

近習仲間のテウススが、オウガヌにつれられて近習の居室に戻ってきたザイラスを眺めてそう声をかけた。普段は誰より身だしなみはしっかりしていて隙を見せない。近習たちも初めて観るザイラスの姿だった。

「とりあえず、身だしなみを整えよ。我らが王子が余計な心配をする」

オウガヌが洗い桶に水をくんで、ザイラスに顔を洗えと差し出した。テウススはブラシを手にして大あわてでザイラスの髪を梳いた。この時、自室でザイラスを待ちきれなかったアトラスが、この部屋に姿を現した。

二人は一瞬見つめ合い、すぐに互いに相手の視線を避けてうつむいた。アトラスには昨日ザイラスに言ってはならないことに触れてしまったという罪悪感があり、ザイラスにはこの王家の人々や仲間を裏切り続けていたという秘密が心の底にわだかまっていた。

アトラスが笑顔を作ってザイラスの声をかけた。

「ザイラス。聞いたぞ。ウルスス殿の部下として ^{シリヤード} 聖都に残るとか」

そういうアトラスの表情は、まるで出世する兄を褒め称えるような様子がかがえた

。しかし、返事を返すザイラスにはいつもの元気がなかった。

「ありがとうございます」

ザイラスはそう言った後、つまらないことだと言わんばかりに話題を変えた。

「何か、私をお呼びとか」

ザイラスは表情にはわずかに作り笑顔を浮かべてはいたが、その声には感情が感じられない。

(昨日の私の言葉を気にかけているのか)

アトラスはそう思ったが、他の側近の手前、素直に謝罪することもできず、笑顔を浮かべたまま口ごもるように言った。

「今日、私はアトランティス議会に召し出されることになった」

「おめでとうございます」

「それで、議会にゆくに辺り、何か気にしておくことはないかと……」

アトラスは信頼するザイラスに何かアドバイスが欲しいというのである。ザイラスはアトラスの意図を察し、自嘲的に考えた。

(裏切り者で内通者の自分に、アトラス王子にアドバイスなどできようか)

ただ、その思いを口にはせず、感情を交えず言った。

「我らが王子よ。思うがままになされませ。ご自身の信念の赴くままに」

ザイラスは近習仲間の間でも飛び抜けて思慮深く勉強家で、礼儀作法にも詳しい。ひょっとすれば、同僚から蔑まれる血筋を補うために、身につけたという悲しい過去があるのかもしれない。普段なら、兄のように心のこもったアドバイスをしただろうが、この日のザイラスにはその配慮が欠けていて、アトラスの判断のみに委ねたのである。その冷たく見える態度はアトラスの心に罪悪感を生んだ。

(やはり、私はザイラスを傷つけてしまった)

この時に、リダル王に仕える小者が、王の指示を伝えに現れた。

「我らが王子、出発の時間でございます」

会議に招かれるという嬉しさに相まって不安やザイラスに対する罪悪感が入り乱れたまま落ち着かず、アトラスは議会に向かうことになったのである。リダルは先に議会におり、列席する関係者とともにアトラスを待っている。

アトランティス議会の様子など、アトラス自身は噂で聞き知っていたのみである。その光景が今のアトラスの目の前に広がっている。議会の門をくぐった所に控えの間があり、各国の侍従たちはここから奥へは入れない。

この先は神々が支配する神聖な場所として、神に仕える巫女や神官、各国の王のみしか入ることが許されない。その奥は神々の像が建ち並ぶ、幅一トリスタン（20m弱）、長さ五トリスタンの長い廊下があり、最も奥には巨大な真理の女神（ルミリア）像を安置する会議場があるという構造である。神官に導かれながらその廊下を歩くアトラスは、無言のままその精緻さに息を飲んでいて、神々の像が建ち並ぶ巨大な通路というだけではなかった。意図的に小さく設計された窓によって、日中だというのに廊下はやや薄暗い。しかし、さの小さな窓から差し込む日の光がそれぞれの時間に応じて、特定の神像を明るく照らし出すように仕組まれている。外部の水路から引き込まれた水が、川を模して神々の足下を潤し、そこには水草が美しい花を咲かせていた。

「ルージ国アトラス王子のお着きでございます」

アトラスを導く神官がそう伝えると、左右の門戸を守る僧兵が叫んだ。

「開門」

衛士が左右の観音開きの扉に手をかけて開くと、そこに会議場の景色が広がっていた。アトラスは左右を見回すように眺めたが、圧倒されるようで声が出ない。最も奥に見える弓を構えた女神の神像は真理を司るルミリア神である。天井にもうけられた大きな円筒形の明かり取りの窓から差し込む光が像の表情を照らしていた。照らされる角度によって神像の表情のイメージが変わる。像の真正面上部から日の光が差すこの時間帯は、柔和だが人の心の底まで見通すほどの洞察力を感じさせる表情だった。その像の両脇には2本の樹木があり、それを囲む大きな鳥かごの中で十数羽の小鳥がさえずっていた。

そんな像の手前の席に着く者は^{スーイン}神帝、その左右に三人ずつ控える者たちは^{スーイン}神帝を補助する諮問機関^{ロゲルスリン}六神司院の者たちだろう。更にその手前に円卓があり、九カ国の王たちの席があった。いまは、ルージ国王リダルと、フローイ国王ボルススが席を離れて門の内側でアトラスを待っていた。

リダルが息子に声をかけようとする寸前、ボルススは祖父が孫を扱うように、満面の笑みを浮かべて大きく広げた腕でアトラスを抱きしめた。

「おおっ、勇者よ。よくぞ、我が孫娘を救ってくださった」 その感嘆ぶり、アトラ

スを抱きしめる動作の大きさなど、孫娘のリーミルに示す愛情より激しい。ボルススの演出である。リーミルとアトラス、ひいてはフローイとルージの関係を諸国に印象づけておこうというのである。ボルスス王はアトラスの手を引くように、部屋の奥の国王たちより一段高くなった^{スーイン}神帝の玉座の前に導いた。アトラスは^{スーイン}神帝を仰ぎ見た。

(ほお……)

様々な考えは、^{スーイン}神帝から放たれる霧囲気の前で薄れて消えて、感嘆のみが残った。アトラスと距離を置いて眺めれば、アトラスの前と左右にいる3名の人物、昔オータルという名で呼ばれていた^{スーイン}神帝と、アトラスの父リダル、フローイ国のボルススは、この^{スーイン}神帝の座に推され、各国の投票によってオータルが選ばれたという。アトラスはそのオータルにアトランティスをまとめ上げるに相応しい人柄を感じたのである。ただ、^{スーイン}神帝の両脇に3名ずつ控える^{スーイン}神帝の諮問機関ロゲルスゲリンを構成するロゲルスゲラたちから、何故か隠す様子もない悪意が感じられる。一方、^{スーイン}神帝も目の前のアトラスに好意的な興味を抱いていた。エリュティアが嫁ぐ相手かもしれないという興味である。^{スーイン}神帝はアトラスに声をかけた。

「おおっ、そなたがアトラスか」

「左様です」

その短い返事を聞くやいなや、^{スーイン}神帝の傍らに控えていたロゲルスゲラの一人グリポフが、アトラスを遮るように声をかけた。

「王子、無礼はなりません」

神の座に列する^{スーイン}神帝に直接に返事ができるのは、各国の国王のみ。たとえ、^{スーイン}神帝から声をかけられた王家の者であろうと、直接返事を返すなど許されないというのである。もちろん表向きの儀礼で、^{スーイン}神帝はエリュティアとは叔父と姪の関係で直接に話をしている。^{スーイン}神帝はグリポフを制して言った。

「まあ良い。儂はこの若者と話して居る。アトラス、勇敢な戦士よ。リーミル姫を救ったとか。その勇気と剣はお父上譲りか？」

「勇気と信念は父から、剣と格闘技は師から学びましてございます」

「そなたが受け継いだものと、学んだものを大切にすることがよい」

^{スーイン}神帝はそう声をかけながら、これがエリュティアの婿になるのに相応しい青年かどうか値踏みをしてもいた。^{スーイン}神帝は続けて答えた。

「そなたは、何のために力を得、誰に仕えるために知恵を得る？ 愛する者を守り、その者の敬愛を勝ち得ることができるか？」

^{スーイン}神帝は今の神に連なる立場では、エリュティアを姪とは呼びにくい、その姪を妻に迎えて幸福にできるのかと問うのである。模範解答をすれば神々に仕えるという返答

をしなければならないし、^{スーイン}神帝が示唆するものを察していれば、妻とともに神の導きによって歩むという回答をすればいいのかもしれない。ただ、この日のアトラスは、このシリヤードで起きた様々な出来事で心が落ち着かず、神を奉る神聖な場で、神ではなく、自らと人々の存在に心を奪われた。

「私はこの大地と、ここで受けるた生を見守る者に、仕えるのみ。神々にはその姿をご照覧いただきたく」

「聞き捨てなりませぬ」

ロゲルスゲラの一人ガークトがそんな言葉でアトラスを遮って、侮辱のこもった疑問を投げかけた。

「未熟な王子よ。そなたが仕えるのは、この世界におわします神々か、それとも、己の野望にか」

「このアトランティスを害そうとする者があれば、それが例え神であろうと私の敵です」

「またれよ、若き王子よ。それは、神々を冒瀆しているのか」

「我らはそなたの神々への侮辱は聞き流せぬ」

^{スーイン}神帝の右傍らに控えるロゲルスゲラの一人、クジーススが席を立ち、憎々しげにそう叫んだ。アトラスの発言は激しいが、神々への侮辱というほどではない。これだけならクジーススという男が、アトラスを非難することで、自分自身の信仰の篤さを喧伝しようとしたのかともとれる。しかし、ロゲルスリンの狡猾さはこの男だけではなかった。^{スーイン}神帝の左傍らのブクススも立ち上がりアトラスを糾弾した。

「如何にそなたが勇敢であろうと、神に対する不敬は許されぬ。王子よ、履き物を脱いで、即刻、神に謝罪されよ」

履き物を脱ぐというのは、履き物さえ持たない下賤の者どもと同様に身をやつして、神を敬えと言うことで、王家に連なる者に対する侮辱に近い。アトラスはその物言いに興奮した。

「不敬ではありません。神が見守る存在だというなら、我が手で運命を切り開く姿をご覧に入れるまで。我らが運命に神が介入する余地はない」

「なんと愚かな、王子よ」

そんな言葉に続いて、ロゲルスゲラの一員クレアナスがアトラスを糾弾した。

「^{ルミリア}真理の女神を始め、この大地を守る神々に対する信仰こそが、このアトランティスを支えるもの。王子はそれを否定されるのか」

(この者どもは、アトラス王子を意図的に挑発しているのか)

老獪なボルススは、ロゲルスゲラの者たちの言葉の意図を正確に見抜いた。その目的までは分からないが、本来は神を侮辱する意志のない王子に、彼を興奮させる言葉を的確に吐きかけている。

^{スーイン}神帝がロゲルスゲラの者どもを制するように口を開いた。

「まあ、よい。勇敢と臆病、忠誠と反逆は表裏一体とか、それは私が神々に問うこと。そなたたちが軽々しく口を挟むことでは無かろう」

黙っていたリダルが口を開いた。

「^{スーイン}神々の御子たる神帝よ、我が息子を神に逆らう反逆者として糾弾するロゲルスリンの者どもよ、これまででございませぬ。ただいま以降、我がルージの忠誠は、我が剣の切っ先のみであり。我が剣で^{タレヴォー}蛮族どもを平らげ、神々への忠誠をお示し申そう」

リダルは兵を挙げてシリヤードに巣くう^{タレヴォー}蛮族を除くと宣言したのである。息子を反逆者と罵られた父親として、これほどの反論の行為はあるまい。

^{シリヤード}聖都に駐留するアテナイ兵は二千。ルージの動員兵力にルージに賛同する国々の兵士を加えれば一万数千の兵力になり、確かに^{タレヴォー}蛮族の兵を圧倒するに違いない。しかし、この美しい都市国家シリヤードは戦場となって破壊されるかもしれない。そして、勝利するアトランティスに、海の向こうからアトランティスの兵を遙かに上回る^{タレヴォー}蛮族の兵士が押し寄せて、このアトランティス全土は戦火で荒廃するだろう。そして、アトランティスをまとめていた^{シリヤード}聖都の崩壊は、再びアトランティスの大地を各国の覇権を争う場に変えて、血なまぐさい歴史へと導くかもしれない。

神帝^{ヘーイン}を補佐するロゲルスリンの者どもはそれを危惧しているはずだった。しかし、ボルススが見るところ、^{スーイン}神帝の左右に控える六人のロゲルスゲラの者どもの表情に不安な影はなく、むしろ、リダルの発言を心密かに喜んでいるかのような様子がかうかええた。

(いかなる所存か?)

ボルススは彼らの心底をいぶかったが、リダルは周囲の者たちを気にする様子もなく、息子のアトラスを伴い会議室を去り、リダルに賛同するヴェスター国王、グラト国王が席を蹴って立ち上がりリダルの後を追った。アトランティナの意志を統一するというアトランティス議会は、その数十年の歴史の後、再び分裂の時を迎えたのである。会議場から退出するリダルは、シュレーブ王の元で足を止めて、短く言った。

「倅のこと、事が成就した後に願いたい」

進みつつある倅のアトラスとエリュティア姫の婚礼を、これから始まる戦の後に日延べしてくれと言うのである。確かに情勢は大きく変わった。シュレーブ王はその言葉に頷いて同意を伝えた。

多くの人々の運命が変わり始めた。ただ、この日アトラスが不用意に発した「神であろうと私の敵です」と言う言葉は、ロゲルスゲラの者どもによって喧伝され、アトラスは神への反逆児としての汚名を広めることになる。

「明日、このシリヤードを発って帰国する。館の者どもにそう伝えよ」

リダルは帰宅途上、帰宅の時も待たずに部下にそう命じて、館へ走らせた。^{タレヴォー} 蛮族の兵と刃を交えると宣言した以上、母国に戻り、兵を整えてシリヤードに帰る必要がある。^{タレヴォー} それは 蛮族 に悟られるより早いほうがよい。

「申し訳ございませぬ」

忙しく周囲に指示を飛ばす父親に、アトラスはそんな短い言葉をかけた。議会で分別を失った自分が余計なことを言ってしまったと後悔している。父親は息子の謝罪の言葉の意味を解しかねたように首を傾げかけたが、その意図を察して答えた。

「かまわぬ。どうせ、^{タレヴォー} 蛮族 どもとは一戦交える腹づもりであった。お前は、ただその先駆けとなっただけのこと。誰か王子の馬を曳け」

リダルは従者にアトラスの馬を曳かせることで、アトラスが馬を下りるのを促したのである。意味も分からないまま馬を下りたアトラスにリダル王は語りかけた。

「まだ日は高い。^{シリヤード} 聖都 の見納めに、町を見回ってくるがよい」

リダルは息子の気分転換に散歩を薦めたのである。路地が多いこの町では、町の雰囲気染まりつつ散歩をしようとするれば、馬ではなく徒歩の方が都合が良い。アトラスが王族の生活の中で、心に深い悩みを抱えているらしい。希代の戦術家のリダルは、その観察力で息子が悩んでいることにも気づいていて、わずかな時間だが、息子の心を堅苦しい身分から解放してやろうと考えたのである。ただ、外見にはその優しさは見せず、息子の決意を促すように言い放った。

「次に^{シリヤード} 聖都 に戻るのは、我らがアトランティスの解放者として凱旋するときである」

リダルー一行の後ろ姿を見送ったアトラスは、一人の女性の記憶をたどるように彼女の口調までまねて一人呟いた。

「道を辿ってもダメよ、迷うだけ。水路の幅が広くなる方に向かいなさい」

言うまでもなく、フローイ国王女リーミルと初めて出会ったときに、彼女から教えられたことである。彼女の教えを守っていれば、狭い路地が入り組んだ町を歩き回っても道に迷う事はあるまい。父の配慮か、リーミルの記憶か、どちらが原因かは分からないが、この時のアトラスは、濁りのない純朴な田舎青年の姿を取り戻していた。道に迷ったという焦りや後悔に乱されずに眺めたこの町の雰囲気は、アトラスが生まれたルージ国のどの町とも違う活気に満ちていた。このシリヤードは、都市国家という体裁を取っているが、その領地といえるのは、城壁で囲まれた地域のみである。その中に、人口

は一万人を超えるという、この時代、信じられないほどの人々を抱え込んだ大都市でもある。^{スーイン}神帝や^{ロゲルスリン}六神司院に仕える者どもを除けば、領民は素性の知れない他国からの流れ者も多い。塩や穀物などの物資を販売する者たちの市、鍛冶屋や機織り、洗濯屋など以外に、娼婦がたむろする宿屋や、ばくち場に隣接する酒場など、雑多な店と雑多な人々であふれかえっていた。

アトラスはそんな混沌とした雰囲気の中を、半ば好奇心、半ば驚きの心地で人々の波をかき分けて泳ぐように歩いていた。突然に、町の雰囲気が凍り付くように女の悲鳴が響いたかと思うと、売春宿から娼婦らしい女が転がり出してきた。続いて拳を振り上げて男が出てきたために、女はこの男に殴られて、宿の外に放り出された事がしれた。別の娼婦が地面に転がった仲間をかばうように身を挺して先の女に覆い被さった。女に拳を振り上げている男と、続いて出てきた男がわめき散らす罵声は、アトランティス人と異なる^{タレヴォー}蛮族の言葉である。続いて出てきた三人目の男を追うように、一人の女が怒りを露わにして出てきた。脛に血を滲ませ頬に殴られたような痣がついているが、女は怯む様子がなかった。

「ゲスの^{タレヴォー}蛮族野郎どもは、女の扱いも知らないのかい？」

女が罵声を浴びせた男たちの服装はシリヤードに駐留するアテナイ軍の兵士に間違いない。兵士たちは民衆に理解できない異国の言葉を怒鳴り散らした。娼婦たちは兵士に侮蔑の言葉を返し続けた。

「女を買って、払う金も無いってのかい？」

そんな娼婦の言葉で、アトラスにも状況が飲み込めた。アテナイ軍の兵士が女を求めて売春宿にやって来て、行為に及んだものの、女の体の代価の支払いの時にトラブルが起きたということである。腕力で兵士にかなうはずのない娼婦たちは、救いを求めて周囲の人々を見回した。街路を行き交う人々は、その状況に興味を示しながらも距離を置いて関わり合いになるのを避けていた。

このシリヤードの治安は三百名の僧兵とその配下の役人が取り仕切っているが、占領軍としてのアテナイ兵が引き起こす犯罪について、後難を恐れて目をつむり耳をふさいでいた。この場合、アテナイ兵とトラブルになった女たちを救う警察組織は無いに等しいのである。この時に、アトラスが哀れな女たちの目にとまった。人々の輪に混じりながら、アトラスの目は他の人々と違って、アテナイ兵に対して恐れを感じさせないのである。

同じ頃、シリヤード中央のアテナイの砦から、エキュネウスが十人ばかりの兵士を率

いて駆けだした。城壁に近い一角の売春宿で、兵士が町の間人相手にトラブルを起こしていると聞きつけたのである。戦勝国の占領軍とはいえ、このアトランティスの大地で侮蔑や反感を買っている。その中心のシリヤードで暴動でも起きれば、アテナイの二千の兵士では対処できなくなるかもしれない。アテナイ軍が密かに恐れる状況である。そのため、砦以外の場所での酒や女遊びを固く禁じてはいるが、時に今回のように羽目を外してトラブルを起こす者どもがおり、軍律に照らして厳しく罰せねばならないのである。

エキュネウスと部下が現場に到着したとき、アテナイ軍の兵士三人は、血まみれで地面に転がっていて、その傍らに血に染まった抜き身の長剣を持ったまま一人の青年が立っていた。二人の兵士の剣をたたき落として戦闘不能にし、最後に残った兵士に止めを刺そうとしている姿である。もちろん、その青年はアトラスだが、この時、二人は互いに相手の名も身分も知らない。アトラスの足下に転がっているのは、一般の兵士とはいえ、実戦を切り抜けてきた猛者揃いである。その三人を相手に切り結んで負傷している様子がないというのは、この青年アトラスが剣に練達している様子が伺いしれた。

アトラスがその剣の切っ先を新たに現れたアテナイの指揮官らしいエキュネウスの喉元に向けて何かを言ったが、エキュネウスにはその言葉の意味が分からない。ただ、新たに十数名の兵士が現れたにもかかわらず、彼アトラスは臆する様子を見せなかった。

【待て。我々はその者どもを罪人として砦に引き取るために来た】

エキュネウスはアトラスに向けて大声でそう呼ばわったが、アトラスの言葉が理解できないのと同様、アトラスにもエキュネウスの言葉は理解できまい。ただ、エキュネウスに戦闘の意志がないことは察したらしい。エキュネウスに向けた太刀の切っ先を転じた。まだ抵抗を続けてアトラスに向けて剣を振る兵士に、アトラスは止めの太刀を振り下ろそうとしたのである。

【待てと言うに】

そう叫び終わるまもなく、エキュネウスは腰の剣を抜いて駆け寄って、アトラスとの間を詰め、アトラスが振り下ろした剣を下から払った。思いも掛けない攻撃に、アトラスは剣を取り落とし、エキュネウスは剣の切っ先で地面に落ちたアトラスの剣を指して言った。

【争う気はない。剣を拾って去れ】

エキュネウスは剣を鞘に収めつつ、去れと言った言葉の意味はアトラスには通じていないらしいことを悟った。若者は落とした武器を拾えと言ったことは察したらしく、地面に転がった剣を拾い上げたが、エキュネウスに剣を向けて向き合ったのである。エキ

エキュネウスも再び剣を抜かざるを得ない。目の前の青年が剣を抜き、指揮官エキュネウスもまた剣を抜いて応戦しようとするのを見た部下たちも手にしていた槍を構えた。

【お前たちは手出しをするな】

「ほおっ、一人で私の相手をするというのか。その無謀さ、教えてやる」

エキュネウスが推測したとおり、アトラスはよほど訓練を受けていてその剣裁きは鋭く、受けた剣を通じて腕がしびれるようだった。一方で、アトラスは兵士として一通りの剣の使い方を経験しただけの兵士を相手にして、アテナイ人の剣の強さを押し量っていたが、新たに剣を交えた男の剣さばきと身のこなしに舌を巻いた。剣を会わせること数十合。二人は互いに荒い呼吸を整えるために剣を構えたまま距離を置いた。

「面白い。なかなかやる」

【お前のような者に出会えたこと、戦闘の神アレースに感謝を捧げよう】

二人は再び接近して剣を会わせた、一合、二合、そして、破滅的な音。エキュネウスの剣がアトラスの剣の激しさに耐えられず折れたのである。両者の剣の扱いの上手下手ではなかっただろう。既に百年以上もの長きにわたって鋼の剣が鍛えられているアトランティスと、古い青銅の剣が鋼に置き換わろうとする時期のアテナイの未熟な製鉄技術の差であったに違いない。エキュネウスは次の攻撃を予想して右手に残った剣の束を捨てて、武器を持たないまま身構えたが、アトラスは意外にも剣を鞘に収めた。その行為を剣を失った敵に対する哀れみだと考えたエキュネウスは叫んだ。

【剣は折れても、アテナイの誇りは折れては居ないぞ】

もちろん、そのアトラスが言葉の意味を理解することはない。アトラスは静かに言った。

「これ以上、戦う理由があるとでも？」

偶然、三人の女を守らねばならない状況に遭遇して、その義務は果たした。見たところ、新たに駆けつけた^{タレヴォー} 蛮族 は仲間を收容に来たのみで、女たちや周囲の民衆を傷つける気配はないのである。アトラスは^{タレヴォー} 蛮族 を一別してから立ち去ろうとした。この時、二人が発した言葉が同じ意味を持っていたのは偶然だったろうか。

「この次は、戦場にて」

【軍神アテーナーが、我々二人を戦場で相まみえさせるように】

^{タレヴォー} 蛮族 どもに背を向けて立ち去りつつ、アトラスは妙に心地よい興奮を覚えていた。勝利感でも優越感でもない。今まで誰かが指示や運命に身を任せて生きてきた。あの^{タレヴォー} 蛮族 の青年との戦いは、アトラスが初めて自分で運命を決めたきっかけになったのかもしれない。エキュネウスもまた、あの不思議な若者の表情をハッキリと心に刻んでいた。このアトランティスでは占領軍として憎しみの視線を受け、^{タレヴォー} 蛮族 として侮蔑

的な扱いも受ける。しかし、あの青年がエキユネウスを眺める目にそんな感情は皆無だった。というより、まるで巧みに操られた人形のように感情そのものを感じ取ることが出来なかったのである。

事件のきっかけになった三人の娼婦は、彼女たちに仕事の報酬と事件の謝罪を兼ねているらしい銀の小粒を丁寧に渡して去ったエキユネウスを、先に彼女たちの礼も聞かずに立ち去ったアトラスと見比べるように見送った。社会の底辺で蔑まれる事が多い職業の女たちだが、いままで彼女たちに蔑みの感情を持たず、彼女たちを人として扱い、接したという意味で、アトラスとエキユネウスはよく似てたのである。

その夜、アテナイ軍の砦に引き上げていたエキュネウスは、部屋に副官カルトレウスの訪問を受けた。用件は夕刻の娼家のトラブルの事かと考えたがそうではなかった。

【エウクロス様がお呼びです】

【この国の者と剣を交わしたことなら報告済みだが】

【いえ。これから客人が来るので同席せよと】

【客人だって？】

カルトレオスに案内されて入った司令官室の光景は、この国の腐敗を聞いていても、若く理想に燃える青年には驚きを伴った。招き入れられた男は、目立たない質素なフード付きの衣類をまとっていたが、高慢さと卑屈さが漂い、他人に命令するのに慣れた人物だと知れた。

男は卑屈な笑顔を浮かべてアテナイの言葉で、エウクロスと挨拶を交わした。エウクロスと同席するエキュネウスを紹介されたものの一片の会釈を与えたのみで、若造など相手にできないというエキュネウスを舐めきった態度を隠そうとはしなかった。

エウクロスはテーブルに客を導き、向かい合って座った。エキュネウスと副官カルトレウスはエウクロスの背後に控えて立った。

【ロゲルスゲラのお一人、クジースス殿であらせられます】

エウクロスがささやいた言葉にエキュネウスは驚きで目を見開いた。エキュネウスにとって信じがたいのは、この人物がこの大地の九カ国を統率するシリヤードの政治を司る六神司院を構成する最高神官の一人だと言うことである。

クジーススは卑屈な笑みを浮かべてエウクロスに語った。

【アトラス王子は我らの挑発に乗り、神を侮辱したばかりか、反逆者の汚名を着ました】

そんな言葉に驚く様子も見せずエウクロス司令官は日常話のようにさりげなく、しかし、注意深く質問をした。

【リダル王は？】

【父の狼は、牙を剥きだして、アテナイに戦を挑むとのこと】

【戦とはいつのこと？】

【ルージ国一行は明日帰国いたします。戦支度を整えて戻ってくるのは2ヶ月後かと】

【して、その兵力は？】

【七千から八千。ルージ軍に合流する国の兵力を合わせれば、総勢一万五千を超えるか】

と推察されます】

（一万五千……）

その数字の大きさに、エキュネウスは息をのんだ。ギリシャ諸部族がかき集めてこのシリヤードに駐留させている兵士は二千人。その数倍の兵力で攻め寄せてくると言うのである。しかし、エウクロスは動揺も見せずに他人事のように聞いた。

【勝算はおありか？】

エウクロスは戦うのはアテナイ軍ではないと言わんばかりである。クジーススは笑って応えた。

【ルージと、フローイ、シュレーブ、牙を持つ者どうし、噛み合わせれば、互いののど笛を食いちぎりましょう】

自信満々で答える様子には、既にアトランティスの国々を争わせる計略が立ててあるということがうかがい知れた。

【なるほど。楽しいお話でしたな】

エウクロスは席を立てて面会を打ち切って、クジーススを入り口へと導いた。クジーススは姿を現したときと同様に深くフードを被って顔を隠し、足音も立てずに立ち去った。

【彼らはいつも来るのか？】

エキュネウスの問いに副官のカルトレウスが答えた。

【いつもは使者が来ます】

エウクロス司令官は甥のエキュネウスを振り返り、意味深な笑みを浮かべた。

【事が重大ゆえ、我々のご機嫌を取るために直接来たのだろうよ】

【アトラスとか言う王子を反逆者にしたとか？】

エキュネウスの言葉に興味がないと言わんばかりに、エウクロス司令官は話をそらした。

【儂は退屈でたまらぬ。儂が何をせずとも、利に聡い奴らが自らの保身で、我らのために働いてくれおる】

副官のカルトレウスが頷いていった。

【全くです。この地は欲と猜疑心でまみれています。我らはその混沌を少しかき混ぜるだけ。彼らの心の底の憎しみが水面にわき出して参ります】

エウクロス司令官は何かを思いついたようにニヤリと笑って言った。

【そうだ、ちょうどよい。一つ仕掛けてみるか】

【何か思いつかれましたか？】

【エキュネウス。明日、港でルージの者どもに挨拶して参れ。アトラスという王子のこ

とが気になるなら、その時によく見て参るが良からう】

【挨拶？】

【武装した兵士五十名ばかりつけてやる。帰国するルージの王族に我らの雄叫びを聞かせてやるのも良からう】

【戦端を開く決心をした者どもです。戦いになりませんか？】

エキュネウスのそんな疑問を、エウクロス司令官は笑い飛ばした。

【このシリヤードは彼らにとって血で汚せる場所ではない。たとえ挑発を受けようと、我らに手出しはできまいて】

【なるほど、ルージの者どもに我らを意識させ、必ずや兵を挙げてもらわねばなりませんからな】

副官エウクロスのそんな言葉に、エウクロス司令官はニヤリと笑って頷くのを、若いエキュネウスは黙って眺めていた。

そんなエキュネウスを振り返り思いついた素振りを装って言った。

【おお、エキュネウスよ。お前は剣を失ったとか。この剣をお前にやろう】

エウクロス司令官が差し出したのは派手な装飾からほど遠いが、束はよく手に馴染み、鞘から抜いてみれば幅広く厚みのある鋼の刀身が曇りのない光を反射していた。

【これは？】

【我が兄、そしてお前の父親から、儂がもらったものだ。しかし、今のお前に相応しかろう。良く鍛えられた刀身は容易に折れることはあるまい】

エウクロス司令官は考えた。この甥は、夕刻に自分が戦った相手が誰か、まだ知るまい。明日、それを知ることになる。どろりと粘るような陰謀の中で夜がふけていった。

同じ頃、フローイ国王の館では、リーミルが灯りもつけず、ベッドの脇の窓から差し込む満月の光のみを浴びながら一人ベッドで横になっていた。大きく見開いた目に月の光が反射してきらりと光った。議会から帰宅した祖父のボルススから子細は聞いている。

(これからと言うときに、突然の帰国ですって?)

そう考えながら思い起こすのはもちろんアトラスの事である。ルージ国の王子アトラスに嫁ぎ、ルージ国とフローイ国の関係を強化するために、彼女はこのシリヤードに呼ばれた。しかし、シュレーブ国の方が一足早く、エリュティア姫をアトラスの嫁入りさせる話を持ちかけた。そこにリーミルが割り込もうと画策したわけだが、予想もしない事態に計画は頓挫した。その悔しさに彼女は小指の爪を噛み、舌打ちしたくなるほどの思いで居たのである。しかし、事情を聞けば、反逆者呼ばわりまでされたアトラスに同情する気にもなる。あの純朴な田舎青年は、何やら煽られて余計なことを口にしてしまったらしい。

(全く、なんて間抜けなやつ)

リーミルは多少の愛情を込めてそう思った。フローイの男には無いあの無垢な性格は嫌いではない。ただ、積極的にアトラスに接近しようとした事が、果たしてアトラスに対する愛情だったのか、出会ったこともないエリュティアという少女らに対する嫉妬の混じったライバル神だったのか彼女自身も良く理解できないのである。

(私がああの田舎者を愛している? まさか.....)

彼女は混乱する頭の中を整理するために、これからの予定を考えた。二日後、彼女は祖父と共に帰国の途につく。

(フェミナ)

リーミルは自分が呟いた名がエリュティアの幼なじみだとは知らない。ただ、彼女の帰国と少し時間をずらして、シュレーブ国貴族の姫フェミナが、フローイ国のリーミルの弟グライス王子に嫁いでくる。壮麗な行列を仕立ててやってくるだろう。迎えるフローイ国も国を上げて祝いの婚礼式典を行うことになる。グライス王子とフェミナ姫の幸福を祝うわけではない、両国が堅く結びついてこの大地に覇を唱える足がかりにするためである。リーミルはいつしかため息と共に深い眠りに陥った。

エリュティアが^{スーイン}神帝のもとを訪れたのは、明くる日の早朝のことである。

(柔和でいい顔をなさる)

^{スーイン}神帝の傍らで表情を眺めた側近は喜びとともにそう思った。もともと、オータルという名があるが、いまはその名で呼ぶ者はなく、^{スーイン}神帝と呼ばれる。華やかな文化に恵まれたシュレーブ国生まれで、王を継ぐべき者として慈しまれながら育てられた人物である。表面の文化的素養のみではなく、その人格も高潔で、平和な世なら民衆から敬愛を集める王となったに違いない。しかし、この大陸の政治情勢はそれを許さず、^{ルミリア}真理の女神は、彼が妻をめとる前に、シュレーブ国第一王位継承者の座を弟のジソーに譲り、アトランティスの王どもを統べる^{スーイン}神帝という、いわば宗教的な名誉職に据えた。

各国の調整に気苦労が多く、表情は苦悩が浮かび額に深いしわが刻まれている。ただ、今は彼の元を訪れたエリュティアの傍らでその表情が和らいでいた。彼自身が神の代理人として神格化された存在であるために、姪と呼ぶことはできないが、血のつながりで言えば間違いなく弟の娘である。国家が醜く利害を争う情勢の中で、この少女の純潔さが^{スーイン}神帝を癒すのである。

「残念なことだ。それでは、帰国するというのかね」

「はい。父の命であさっての朝、シリヤードを発つことになりました。今日はお別れのご挨拶に」

「そうか。では、アトラス王子との婚礼の儀はいかがした」

「父や教師のドリクスは、アトラス様が救国の主レトラスではなかったと申されます」

「それは気が早い。あの者ならこれからレトラスに育つかも知れないものを」

「私はアトラス様ではなく、これから現れるレトラスに嫁ぐ運命なのだ」と

エリュティアの言葉に^{スーイン}神帝は口を閉ざして、哀れみがこもった優しい視線を彼女に注いだ。

(なんと、周囲の者どもの受け売りではないか。この無垢な少女は周囲から言われるまま自分の運命をゆだねようとし、そんな自分に疑問を感じても居ない)

^{スーイン}神帝はそんな心の内を出さずに、優しくささやきかけた。

「そなたに^{フェイブラ}愛の神の輝きが訪れるように。」

一礼して、部屋から下がるエリュティアを^{スーイン}神帝は見守り続けていた。

その^{ヘーレン}神帝の元に駆けつける僧兵が居た。名をマレヌスという。^{ヘーレン}神帝が腐敗したロゲルスゲラを政治から除く手配をさせたイドロアス直属の部下の一人である。．ルージ国が^{タレヴォー}蛮族討伐の兵を挙げると宣言した今、^{ロゲルスリン}六神司院の^{ロゲルスゲラ}最高神官の目は新たな戦に釘付けだろう。その際に早急に事を進めるつもりである。

マレヌスが息を切らせて言った。

^{スーイン}「神帝よ。大変でございます。僧兵長イドロアス様が亡くなられたとのことでございます」

「何事だ」

「四ゲリア（約3 km）下流の北の岸部に死体となって発見されたとのことです」

「間違いはないのか？ この時期になんと不運なことだ」

「背に深い刀傷があり、何者かに殺害されたものと」

「殺害だと？ 他に誰が知っておる」「行方不明になっていたイドロアス様を探索していた者が知らせて参りましたので、即座にお知らせに参りました。まだ、他に知る者はおるまいと存じます」

^{スーイン}神帝は沈痛な面持ちで考え込んだ。^{ロゲルスゲラ}腐敗しきった最高神官の者を除くつもりで、イドロアスに探らせ、排除の手はずを整えるつもりだった。そのイドロアスが誰かに殺害されたとなれば、^{ロゲルスゲラ}最高神官の手の者に違いない。ここは、一刻も早く計画を実行に移して、^{ロゲルスゲラ}最高神官の者どもを、僧兵たちを使って排除せねばならない。

「トロイアスを呼べ」

^{スーイン}神帝は、イドロアスの直属の部下の名を指定した。イドロアス亡き今、イドロアスに次ぐ地位におり僧兵部隊の指揮を執る男である。マレヌスが^{スーイン}神帝が命を実行しようと、部屋を駆けだそうとしたときに、そのトロイアス本人が姿を見せて大声で呼ばわった。

^{ロゲルスゲラ}「最高神官の皆様がお越しになりました」

「誰だ？」

^{ロゲルスリン}六神司院の者は、神官たちに占わせた神託の結果などを、^{スーイン}神帝の元に上奏に来る。ただ、通常は順番に誰か一人が代表してやって来るのが通例で、複数で来ることはまれである。その為に、来た者は誰かと尋ねたのである。

「それが、クジース様、ガークト様、ブクス様、グリポフ様、クレアナス様、クイールトス様、そろっておいでです」

顔を見せた六人は大仰に礼をし、^{ロゲルスゲラ}最高神官の一人、ガークトが進み出て言った。

「イドロアス様、ご不幸の連絡を得て、取り急ぎ参りました」

「それは大儀。しかし、^{ロゲルスゲラ}最高神官が顔をそろえて謁見など珍しいことを」

スーイン

神帝の皮肉のこもった言葉に、ロゲルスゲラの一人クレアナスが答えた。

「剣の達人のイドロアス様が背後から一刀のもとに切り伏せられていたとのこと、早くその危険な犯人を捕らえねばなりません」

この者どもは、まだ知るはずのないイドロアスが殺された事を知っているばかりではなく、犯人がイドロアスの背後から剣でおそったということも知っていた。その不自然さに、マレヌスは^{スーイン}神帝と顔を見合わせた後、^{ロゲルスゲラ}最高神官の者たちに問うた。

「何故、イドロアス様が亡くなったことをご存じなのですか？」

トロイアスはやおら剣を抜き、目の前でそんな疑問の言葉を発したマレヌスを背後から切り捨てた。床に倒れたマレヌスに駆け寄った^{スーイン}神帝は、既に彼の息が絶えているのを確認すると、トロイアスを睨んで怒鳴った。

「何をするか」

「この国を害する者を、^{ウィラン}忠義の神の名の下に誅殺しただけでございます」

マレヌスの死体を抱き起こして跪く^{スーイン}神帝を、血まみれの剣を下げたままのトロイアスとロゲルスゲラたちが囲んで見下ろすように眺めた。その異様な笑顔に^{スーイン}神帝はこの者たちの意図を知った。

「お前たち、謀反を起こし、この儂を殺害するつもりか」

^{スーイン}神帝の言葉にトロイアスは^{ロゲルスゲラ}最高神官の者どもの意向を伺うように顔を眺め回して言った。

「いいえ。役に立っていただける間は、殺害などとはとんでもない話。しばらくは神殿の奥にお隠れいただくだけでございます」

アトランティスの中央から腐敗の根本を取り除こうとしていた^{スーイン}神帝は、逆に^{ロゲルスゲラ}最高神官の謀略の前に敗れ去ったのである。この時からルージ国、シュレーブ国、フロイ国を互いに争わせようとする謀略が活発化する。

アトランティス議会の奥で起きていることを知らぬまま、議会の終了と共に各国の国王は帰国の準備を始めていた。ルージ国王リダルは、猛る心に曳かれるように兵を挙げ、この日に帰国の途についていた。

ルージ国を示す青い旗を捧げ持つ従僕の直後に、馬に乗ったリダルが続いた。行列は総勢八十名ばかりである。

「もっと、近こう」

リダルの言葉は常に短い。アトラスは父の言葉をよく察して、彼が乗る馬を父に寄せた。リダルは言葉を継いだ。

「民の目をよお見ておけ、戦の道筋が見えてくる」

行列を眺める人々の目には、勇猛さを持って鳴り響くリダルに対する畏敬、リダルがもたらす戦乱へ恐れがあり、行列に顔を背けて囁きあっている者どもからも、不安感が漂ってきた。リダルは道筋という言葉が好きで使った。戦の道筋というのは、この場合、これから起こす戦の目的ということだろう。リダルは息子に、民を眺めながら、何のための戦かを考えろと言うのである。

「あれは」

前方からやって来た行列は足並みを街道の端に寄せて停止した。行列の先頭の旗持ちが掲げる旗を見れば、シュレーブ国の王族の行列だとわかる。向こうもこちらがルージの王の行列だと判断して道を譲ったのである。この場合、王族より国王の行列が優先させるのが習わしである。リダルは馬上からシュレーブの列に一礼したのみで、その傍らを通り過ぎた。

「あっ」

一瞬、シュレーブ国の列の中央の輿の傍らを通り過ぎようとしたアトラスは、輿に乗る人物と視線が合った。アトラスの心が乱れた。輿にいたのは^{スーイン}神帝を訪問した後、帰途についたエリュティアである。彼女もこの地を去るために、叔父である^{スーイン}神帝に別れの挨拶に赴き終えていた。その帰りの行列でだった。外見の武人の姿の内側の純朴な青年の心の中で複雑に思いが絡み合った。彼女に対し失礼な対応をしてしまったことに対する後悔の念や、自分の行為を謝罪しなくてはならないという思い、しかし、自分の思いをどうやって伝えるべきかわからないもどかしさ、口に出して言葉で表現できない心の内が、アトラスの表情に戸惑いを浮かべさせ、やや乱暴な仕草で懐から小さな袋を取り出させた。

^{リカケ}「女神の涙と申します。涙とともにあなたの心が癒され、心の平安が訪れますよう」

アトラスは輿に馬を近づけて、エリュティアに押しつけるように謝罪の印として袋を渡した。輿の中でアトラスの言葉の意味を確認するように袋を開けたエリュティアの手のひらに一粒の真珠が落ちた。大粒で美しい光沢を持っていた。しかし、普通に見かける球状ではなく、やや一部歪んでいて涙の滴のようにも見える。

先頭のリダルと距離が開いた。それを言い訳にするように、アトラスはそれ以上の言葉を発せず、エリュティアの言葉も聞かず、愛馬を駆けてエリュティアの傍らを離れて列の先頭の父親の傍らに戻った。男女関係に未熟なアトラスにはそれ以上の言葉はなく。エリュティアも突然の出来事に驚くのみでアトラスを引き留める心の余裕はなかったのである。

やがて、ルードン川の南の岸辺が見えてきた。小規模ながら上流や下流の町を結ぶ港があり、リダルらはここで船に乗り換えて河口の町に出る。そこには ^{シリヤード} 聖都 に侵入できないルージ国の軍船が停泊している。それに乗り換えて母国に帰るのである。その港に異様な一団がいた。シリヤードに駐留するアテナイ軍である。数は五十人ばかりだが、大きな盾や槍を持った完全武装の姿で、人々を威圧しているのである。港にルージ国の一行が入ってくるや、アテナイ兵たちは盾と槍を打ち鳴らした。リダルは怒りを込めた視線で応えたが、配下に手出しはさせなかった。ここはアトランティナにとってもっとも聖なる場所で、いかなる理由があれ、各国は戦火を交えるわけにはいかないのである。それを知っているからこそ、示威行動とも言えた。ルージ国一行が船に乗り込むのを見届けたアテナイ兵は一斉に雄叫びを上げた。ルージの者どもをシリヤードから追い払ってやったと言わんばかりの勝利感をにじませた声である。

(ほおっ)

リダルは川辺の ^{タレヴォー} 蛮族 を眺めていた憎々しげな表情に、口元をゆがめて笑顔を作った。傍らにいる息子アトラスの様子に気づいたのである。 ^{タレヴォー} 蛮族 の兵士の威圧にもひるむことなくじっと彼らを眺めていたのである。父親はその姿を息子の剛胆さとみた。しかし、その本当の姿は恐怖感より、異なる民族への好奇心であったかもしれない。事実、アトラスの視線は昨日剣を交わした一人の若いアテナイ人に向けられていた。エキュネウスである。盾と槍を打ち鳴らす兵士の端で、彼自身は昨日出会ったアトラスを凝視しながら、鎧の胸板を拳で叩いて名乗りを上げていた。

【私は、エキュネウス】

繰り返される言葉に、船上のアトラスは彼の名を理解し、二人は互いの人格を探り合うような視線を交わしあっていた。

【私は、エキュネウス。戦場でお前と相まみえ、勝利する者だ】

ピー――。

この時に、甲高い指笛の音が響きわたって、人々の視線を集めた。長い黒髪の少女が岸辺の木に登り、太い枝に腰掛けて船上を眺めていた。肩まで露わになる質素な一般民衆の衣服を着た少女がフローイ国の王女だと気づく者は、アトラス以外にいなかった。

「別れに来たのか？」

アトラスはそう呟いた。リーミルはアトラスが与えた腕輪を左腕にはめて振って見せたが、言葉は発しない。どんな言葉を交わせばいいのだろう。互いに好意が混じった好奇心を感じてはいるし、夫婦という関係をぼんやりと意識もした。今は、ただそれだけの関係である。二人は小さくなる互いの姿を黙って見送った。

ルージ国王子アトラス、シュレーブ国王女エリュティア、フローイ国王女リーミル、アテナイ軍の若き将エキュネウス、この4人の運命は絡み合いつつも、ここで解ける。様々な思いとともに、四人の運命が再び絡み合い始めるのは、五十日ほどの時を経てからである。

各国の王が集まる議会の終了とともに、各国の王の館から主が姿を消して留守を守る留守居役ばかりになる。このシリヤードは政治的中心地から解放されたかのように静けさを取り戻す。荘厳とした宗教の中心地へと都市の雰囲気は変貌する。

再び慌ただしさを取り戻すのは、来年のターアの月からである。アトランティス議会は春が深まったターアの月から始まり、一年の不浄が集まるとされるミッシューの五日の休会を挟んでマーゴの月に続く。この月になると、春の装いは終わりを告げ始め、陽は時折肌を焼くほどの強さになり、ロイトと呼ばれるアトランティスの夏を象徴する大輪の花が香りを放ち、水辺には多くのトンボが飛び交うのを見かけるようになる。

先に帰国の途についたルージ国王の一行などは、海を越えてルージ本島に到着する間際だろう。

(初めての任務が重すぎるのか)

ルージ王の館の留守居役を務めるウルススは、アトラス王子の側近の任を解かれ、留守居役に就いた若いザイラスをながめてそう考えた。思慮深く同時に剛胆さも兼ね備えていると考えていた青年が、妙に覇気を失って悩んでいる様子なのである。

ロゲルスリン 六神司院からの使者がルージ国王の公邸に遣わされたのはそんな時である。スーイン 神帝から密命を下す故に、参内しろと言うのである。

「どうすれば良いかの？」

留守居役のウルススはザイラスに尋ねた。当然、求めには応じるつもりだが、密命という大事な内容なら、リダル王にその内容を告げて判断を仰がねばならない。しかし、リダル王一行は既に帰国の途について、今は海上にある。あと数日でルージ島に着くだろうというタイミングだった。大事な事なら王がシリヤードに居る間に願いたいと言うのがウルススの率直な思いだった。

「私が代理で参りましょう」

ザイラスがそう提案した。リダルから宝剣を託されて王家に準じる身分にしてもらっていたし、留守居役の補佐という肩書きなら、参内するのに身分が低すぎると言うことはあるまい。

そして、その場でスーイン 神帝の名に基づく不条理な命令が出たとしても、ザイラスには受ける判断をする権限がないと突っぱねて時間稼ぎをすることもできるだろう。

(この人の下で、もう一度やり直そう)

ザイラスはウルススの補佐についてそう思った。そうすれば、裏切りの罪を償う機会もあるだろう。ウルススという老人は武人ながら周囲に気遣いを欠かさない男で、何より亡くなったザイラスの父に敬意を抱いており、その息子のザイラスにも息子にかけるような愛情を注いでいた。その点、ザイラスは人物に恵まれた。もし、リダル王やアトラス王子と共に帰国していれば、罪の意識に苛まれ自害していたかも知れない。死は恐れないが、ただ無為に自害するのではなく、罪をあがなって死ぬ機会を与えてもらったと、ザイラスはウルススに密かに感謝している。

そんなザイラスがウルススの代理で神殿に着いたのは太陽が中天に達した頃である。ザイラスを一人の神官が出迎えた。

^{スーイン}
「神帝が謁見のためお待ちです」

神官の言葉にザイラスは疑問を呈した。

「謁見ですって、そんなことはありません」

ザイラスの言葉ももつともである。^{スーイン}神帝と言え、神の言葉を人々に伝える役割を持った神に次ぐ地位の人物である。一介の使者に過ぎないザイラスと直接会うと言うことはあり得ない。^{スーイン}神帝の言葉を承るにしても、^{ロゲルスゲラ}最高神官の神官たちを経由して伝えられるのが通例だった。

「火急の用にて」

神官が今思いついたばかりという慌てた様子で言いつくろい、ザイラスを神殿の奥に導いた。

「では、衣装を改めさせていただきたい」

ザイラスがそう言ったのは、腰の短剣のことである。リダル王から賜った物で実用性に乏しいが、剣には違いない。神に準じる人物の前で腰に武器を帯びるのは不敬にあたるのである。

「いや、今しばらくそのままにて」

何かの異変に気づいたらしいザイラスを、物陰で眺める人影があった。

「なんとも、頭の回る男ですな」

ザイラスと神官のやりとりを聞いていた^{ロゲルスゲラ}最高神官の一人ガークトが、僧兵部隊を率いるトロイアスに囁くように言った。トロイアスもニヤリと笑って答えた。

「しかし、奥にある物を見れば驚くでしょうな」

奥にある物というのは、もちろん、先日から彼らが幽閉していた^{スーイン}神帝の事である。先ほど地下牢に幽閉していた^{スーイン}神帝を謁見室に移して閉じこめてある。神官がザイラスを導くのはその部屋である。

「それでは、直接にお話を」

ザイラスを導いていた神官は、目の前のきらびやかな扉を手で指し示して、逃げるようにその場を立ち去った。ザイラスは何かおかしいと考えるように周囲を見渡したが人影はなく、この場を立ち去る理由を見つけることも出来ない。彼は決意するようにこくりと唾を飲み込んでドアを開けて中に入った。

「誰か？ 儂を殺しに参ったのか」

奥の玉座の眼光と声の威圧感で、ザイラスは初対面ながらその人物を理解した。彼は腰の剣帯を解き、武器を身辺から離して、片膝をついて忠誠を捧げる姿勢を取った。言うまでもなく^{スーイン}神帝である。ただ、どうしたことか、縄をかけられて自由を奪われた姿である。

^{ロゲルスゲラ}
(最高神官、謀反か)

勘の良いザイラスはその状況を理解した。私腹を肥やしている^{ロゲルスゲラ}最高神官の者どもがそれを除こうとする^{スーイン}神帝と対立していることは噂で知っていた。

^{スーイン}神帝も人物を見る目を持っていた。自分の前に片膝をついて忠誠を示す謙虚な姿と、この青年の澄んだ目は疑いを抱かせなかった。^{スーイン}神帝は声の調子を和らげて聞いた。

「そなたは、誰か？」

「リダル王の配下で、留守居役の補佐を務めるザイラスと申します」

ザイラスはそう言い終わる間もなく、床に置いた剣帯を身につけ、玉座に駆け寄って言った。

「お助け申します。我が王の邸宅までお越しを」

ザイラスは^{スーイン}神帝を護衛してここから連れ出すというのである。ザイラスが短剣の鞘を払って、^{スーイン}神帝を縛る縄を切ろうとしたとき、謁見室の入り口から僧兵たちが姿を現

した。神帝^{ヘーレン}が警告を発した。

「ザイラスとやら、背後に気をつけよ！」

謁見室に踏み込んできたのは、その白い僧服から判断すると僧兵の一団である。本来は神帝^{スーイン}を警護する者どもだった。本来は携えることさえ許されない場に、抜き身の刃を手にし、放つ殺意はザイラスのみならず神帝^{スーイン}にも向けられている。

「何ゆえの謀反か」

ザイラスがそう言い終わる間もなく、僧兵の一人が無言のまま斬りかかってきた。ザイラスは短剣を手にしたまま身を翻して、その僧兵の背後に回りこみ左腕で僧兵の首を抱え込みながら右手の短剣の切っ先を、僧兵の首筋に押し当てた。玉座の神帝^{スーイン}を守る位置で、ザイラスはその捕らえた僧兵を楯にするように、他の僧兵に向き合った。別の僧兵が楯にされた仲間ごと剣でザイラスを刺し貫くべく突進してきたので、ザイラスは楯にしていた僧兵を前に突き飛ばすようにして、突進してくる男の勢いを止めた。突き飛ばされた僧兵は、その男の剣に貫かれて床に転がった。男が仲間を刺し貫いた剣を抜こうとする隙をついて、ザイラスは飛びかかり短剣で男ののど元を切り裂いた。その身のこなしは素早く無駄がない。返り血を浴びることもなく身を翻して次の敵に短剣を向けていた。

「どけっ。儂がやる」

僧兵たちの背後から進み出てきたのはマレヌスである。部下の腕ではこの若い使者を殺すことは出来ないと判断したのである。部下の命など取るに足りないが、無駄に失っては今後の仕事に差し支える。そう考えたのである。

「お前が謀反人の長か？」

そう叫ぶザイラスに、マレヌスがにやりと笑って答えた。

「私は僧兵長のマレヌス。神帝^{スーイン}を殺害した賊を誅罰するのだ」

要するにザイラスが神帝^{スーイン}殺害の犯人だということのである。

(計られた)

ザイラスはそう思い、彼らの企みに気づいた。彼らは謀反を起こして神帝^{スーイン}を殺害する。ここへ呼び寄せたザイラスを殺してその犯人に仕立て上げる算段である。マレヌスは剣を振り上げ、ザイラスは防戦のために短刀を構えた。ただ、マレヌスは大きく踏み込んできてザイラスとの距離を縮めた。マレヌスが振り下ろす長剣の勢いを短剣で受けることは出来ず、ザイラスは身をかわそうとした。この時、彼一人なら避けることが出来たかも知れない。しかし、彼が身を避ければ、敵の刃の先に神帝^{スーイン}の身があった。マレヌスはそれを狙ってザイラスにも神帝^{スーイン}にも届く距離で剣を振り下ろしたのである。

。神帝^{ヘーイノ}の身を守るためにはザイラス自身の体を避けるわけに行かず、彼は神帝^{ヘーイノ}をかばうように正面からマレヌスの剣を受けた。彼は声も上げずに絶命した。

「お前はこのような忠義の若者まで無為に殺しおるか」

玉座に縛られたままの神帝^{スーイン}はそんな言葉で彼の死を惜しんだ。

「いいえ、この者は神帝^{スーイン}を殺害する謀反人にて」

ニヤリと笑ったトロイアスは、ザイラスの死体から短剣を手にして、神帝^{スーイン}の胸に突き立てた。神帝^{スーイン}は言葉を発する間もなく、口から血のしぶきを吐いて絶命した。アトランティスが戦乱の世を神帝^{スーイン}の元にまとめ上げられて十数年。初代神帝^{スーイン}の治世はここで終わり、新たな戦乱の世を迎えるのである。

「では、後は手はず通りに」

トロイアスはロゲルスゲラの者どもを眺め回すように言い、彼らもそれに応じるように薄笑いを浮かべて頷いた。

トロイアスは僧兵部隊を三つに分ち、ルージ国公邸、リダルに賛同して同時に兵を挙げるヴェスター国とグラト国公邸を襲って、留守居役の者ともから、使用人の男女に至まで神帝^{スーイン}殺害の謀反関係者として皆殺しにする。ロゲルスゲラの者たちは、反逆者アトラス王子の直属の将^{スーイン}が神帝^{スーイン}を殺害したというルージ国謀反の報と、彼らを討伐せよとの使者を、シュレーブ国とフロイー国に送るのである。その点、あらかじめ詳細に計画されていて齟齬はなかった。リダル王が将来は息子アトラスを支えると信じ、アトラスは密かな兄に対する敬意を感じていたザイラスはここで命を終えた。もちろん、ザイラスの運命をアトラスは知らない。

ルードン河を下ったアトラスと反対に、エリュティアは噴水の浅い川船でルードン河をさかのぼって帰国の途についていた。シリヤードの辺りでは大河にも見えたルードン河も、シュレーブ国の都パトローサの辺りまでさかのぼると水量も減り、流れが緩やかになり川幅が狭くなって浅瀬や入り江になった川岸の葦が茂る光景が広がる。芦原をすみかにする小鳥たちの鳴き声が響き渡っていた。

エリュティアたちが乗る川船を岸で曳いていた馬や人足も姿を消し、今は船の船尾と船首で竿を操る船頭が船を操っているのみである。雰囲気は穏やかで、エリュティアが河を下ってシリヤードに向かったときと違うのは、彼女の父親のシュレーブ国王とその側近が共に乗船していることである。

都に近い岸辺の棧橋で船から下りたエリュティアたちを、シリヤードから陸路、早馬で都に届いた意外な連絡が待っていた。

「ルージ国、謀反。謀反人どもを討つために兵を挙げよ」というのである。それを聞いたシュレーブ王は、一瞬、驚きの様子も見せたが、ほとんど間をおかずに即答した。

。「話は承った。急ぎ戻って、^{ロゲルスゲラ}最高神官の者たちに、そう伝えられよ」

国王はそう短く言って使者を追い返すように去らせた。その後ろ姿を見送りながら、国王は怒りや悲しみや焦燥の感情を織り交ぜた表情を浮かべた。^{スーイン}神帝は彼の実の兄である。その兄がを殺害した者への怒り、兄が亡くなったという悲しみ、そして国王としての決断を下した。

「千載一遇の好機ぞ」

国王ジソーは傍らに控えていた謀臣ドリクスにそう言った。兄の死によって、この大地は再び戦乱に巻き込まれる。王としては兄の死を悲しむより、この機に乗じて勢力拡大を図るべきだと考えるのである。心の底に怒りもわいていたが、避けられない不条理な運命に対する感情で、リダル王やアトラスに向けられたものではなかった。

その心を読むようにドリクスが言った。

「この機を逃してはなりません。ただ、この詔が我がシュレーブとフローイにのみ布告されたというのは、不可思議な話です」

。「^{ロゲルスゲラ}最高神官の者どもの仕業か？」

^{スーイン}神帝 殺害の本当の犯人は、詔に記されたルージ国の者ではなく、^{スーイン}神帝の側近の謀反を見抜いているのである。ドリクスは無言のまま頷いた。ただ、国王と謀臣の腹づもり

は決まっていた。ここは、精兵を率いてシリヤードに向かい、兵を背景にロゲルスゲラどもに事の次第を追求し、不正があれば暴いて、ロゲルスゲラを排除しつつ、その功績を持って、次の^{スーイン}神帝の座を狙う。

もう一つは、詔に従ってフローイと共にルージとルージに与する国を討ち、領土拡大をする。二人はアトランティスに覇を唱えるために、^{ロゲルスリン}六神司院の者どもを除くことより、まずルージ国を潰す事を選んだのである。

エリュティアは状況はよく分からないものの、突然に漂った殺気や怒気のこもった雰囲気^に怯えて侍女に身を寄せながらも、男たちの言葉の中からこの状況を読み取って呟いた。

^{スーイン}「神帝がお亡くなりになりに？ 殺させたのは、あの方？」

この時、彼女の心はまだ幼く、どろどろとした権力争いなど理解できていない。ただ、不安に涙ぐんで震えていただけである。

その同じ知らせは数日の時を経てフローイ国にももたらされるはずだった。

エリュティアが叔父の死を知って数日後、フローイ国の都カイーキでは、早くも帰国していたリーミルが庶民に混じって市に姿を見せていた。

「リーミル様。今朝とれたばかりです」

「ありがとう」

物売りから赤いトフリの実を受け取ったリーミルは、礼を言う間もなくその熟した実にかぶりついて、笑顔の口元からあふれた果汁を手の甲でぬぐった。彼女は町娘の質素な衣装だが、彼女の顔立ちは都の庶民にまで広く知られていて、身分を隠すことが出来ない。

そんな彼女が、突然に、どきりとしたように胸に手を当てて思った。

(あれは、ちょうどこんなふうに腰掛けていた時だった)

彼女は市をうろつく一人の青年を見つけたのである。そして、彼女はその青年の横顔を見た彼女の心にわき上がってきた、恋や愛といった男女の感情を否定した。

(この私が……、まさか)

シリヤードで手玉に取っていたつもりのアトラスに対して、そんな感情のかけらでもあったのかと考えたのである。ただ、彼女は冷静に状況を眺めてもいる。彼女自身が帰国を見送ったアトラスが、フローイ国の都にいるはずもない。また、通り過ぎていったその青年の後ろ姿は、アトラスよりやや長身で肩幅も広いようだ。ただ、男の後ろ姿は、リーミルの好奇心を刺激しすぎた。見過ごすことも出来ず、リーミルはしなやかな動きで立ち上がり、青年に気づかれぬように、静かにその跡を追った。

市場は物売りの声が響き、商品を買求める客の往来で活気がある。青年を追うリーミルの気配を消すのに丁度良い。リーミルはその人混みを利用した。青年の傍らを背後から早足で追い越しながら、向こうからやって来てすれ違った野菜売りの女を避けきれずに足がもつれたというふりを装って、青年の胸にもたれかかったのである。

突然に倒れかかってきたリーミルの体を支える男の腕に筋肉の張りがあり、突然のことだが、女性を受け止める腕や指先の動きが優しかった。

「あら、ごめんなさい」

リーミルは笑顔でわびながら、青年の胸に手を当てて体を引き離したが、その手の平に青年の胸板の感触があった。胸の筋肉が厚いだけでなく弾力性を秘めていて、一定の作業を繰り返す肉体労働者の筋肉ではなく、剣士のように臨機応変に激しい動きをす

る男の体だった。

(やはり、ただ者じゃない)

リーミルは心の中で頷いたが、次の瞬間に青年からかけられた言葉に驚いた。

「お嬢さん。先ほどから跡をつけて居られたようですが、何かご用でも？」

(気づかれていた)

リーミルはそんな驚きを表情に出さず、笑顔のまま、青年を眺めた。アトラスと面立ちは似ているが、漂わせる雰囲気が違う。純粋な心を虚勢で包むアトラスと違って、自然体で人の良さそうな笑顔を浮かべながら、その本心は固く閉じられて明かすことがないという感じである。

「不思議なお方、あなたはどなた？」

「私は商人のロユラスと申します。お見知りおきを」

青年はそう言ったが、商人風の衣服のから露出する肌は日に焼けていて、筋骨もたくましい。本物の商人では無かろう。

「何をしに来たの」

リーミルは笑顔で意地の悪い質問をした。商人で無ければ、密偵か何かに違いない。強国のフローイの動静を探るために、各国が放った密偵がこのカイーキにも暗躍しているという。この青年はフローイとは別の言葉の訛りがあり、フローイ国の住人では無かろう。

「フローイの銀製品を買い求めに」

ロユラスの言葉にリーミルはすぐにその嘘を看破した。銀細工と言えどもっともらしいが、この若者のような年齢で扱うには高額すぎる商品である。

「う・そっ。この国のことが知りたいんじゃないか？」

「滅相もない。私はただの商人です」

「ルージの人で、あなたによく似た人を知っているわ」

「それはどなた？」 「リダル王のご子息のアトラス王子」

リーミルは包み隠さずその名を明かした。彼女の想像通り、ロユラスは眉をぴくりと動かしてアトラスの名に反応した。

「ほお。それは、私のような一介の商人には身に余る光栄」

青年は笑顔で事実を隠すようにそう言った。アトラスの素直な物言いも良いが、包み隠す内心を探りあうような会話もリーミルの趣味に合う。ただ、その会話に邪魔者が入った。さりげない仕草の中で油断無く周囲を伺っていた青年の目に緊張感が走った。部下を連れて足早に近づいてくる将軍と兵士の姿を見つけたのである。しかし、将軍に用があるのはリーミルの方だった。やや非難の口調でリーミルの背後から声をかけた。

「姫様。行く先も告げず勝手に出歩かれては困ります」

「あら、シングレス将軍。何の用なの？」

「国王が火急の用でお呼びです。さあ、参りましょう」

シングレス将軍と呼ばれた男は、リーミルを逃がさぬように敬意と責任感を込めて彼女の肩を抱いて、引き立てて行った。ちらりと背後を振り返るリーミルの目に、笑顔で別れの挨拶の手を振る青年の姿が見えた。

その場に取り残されたロユラスは、この国にリーミルという名の男勝りの姫が居ることは知っていた。

「あの女か」

ロユラスはリーミルを見送りながらそう呟いて、不遜な事を考えた。

(フローイというのは、攻め滅ぼし難い国のようだ)

配下の者が姫を叱りつける様子が自然だった。姫はそんな配下の言葉を素直に受け入れていた。ただ、配下の者は敬意も忘れては居ない。姫や兵士を眺める民の目に恐れや警戒心はなかった。フローイ国の王家は、忠義心のある家来と、王家を敬愛する民に支持されていると言うことである。攻め滅ぼしにくい、そんな事を考える辺り、ロユラスは牙狼王リダルの血を引いていた。

(それにしても、火急の用とは?)

何の用かと問われた将軍が、口ごもって、ただ「火急の用」と称した。この国に、この場では口に出来ない出来事が突然に起きたと言うことではあるまいか。ロユラスはそう考えた。

リーミルが宮殿に呼び戻されたのは、^{ロゲルスリン}六神司院が発した詔のせいである。シュレーブから二日遅れて到着した。その内容はシュレーブ国に当てた物と同じく、「フローイ国はシュレーブと共に、反乱国のルージとルージに荷担する二カ国を討て」という詔である。

国王ボルススは国の主だった者を館の会議室に招集した。王は普段は男ばかりの会議に、孫娘リーミルを加えたのである。

「いかがしたものか」

ボルススは居並ぶ諸侯に意見を問う素振りを見せたが、その心の底では既に次の行動を決めているのかも知れない。

「^{スーイン}神帝を殺害したのは、あのザイラスという男なの？」

リーミルはそう尋ねた。父親がルージ王リダルに殺された復讐にフローイに内通していた男という記憶があった。ただ、あの男は妙に冷静で律儀で、復讐の動機になる怒りを外に出さない男だった。その男が、リダル王、或いはアトラスの手先として^{スーイン}神帝を殺害するというのは想像がつかない。リダルにたいしてあれほどの敵意を持った男なら、暗殺計画を知れば、その手先として荷担するどころか、リダルを反逆者として^{ロゲルスリン}六神司院に告発し彼を破滅に追い込むことを選ぶだろう。そして、リーミルは虚飾のない素直なアトラスと接していた。ひょっとしたら、この時期の本当のアトラスの姿を知っているのは、彼女だけかも知れない。素のアトラスもまた^{スーイン}神帝殺害を企む人物ではないと思った。

「その詔、信じられない」

リーミルの言葉に、某臣マッドケウスは頷いた。

「確かに、ここは腰を据えて考える必要があります」

「さすればどうする？」

「シリヤードには弔問の使者を差し遣わして、様子を探らせましょう」

「弔問とな」

「左様です。我らは、シュレーブから迎えた大事な姫子と、グライス様との婚礼の儀がございます」

「なるほど。しかし、この詔を無視することになりはすまいか」

「^{スーイン}神帝崩御の後には、各国国王がシリヤードに参集するのが決めごとのはず。その決まりを破って我らに密使を出すなど、後ろめたいことでもあるのでしょうか」

「さすれば、グライスと姫子の婚礼を盛大に執り行うとするか」

「御意」

マッドケウスはボルススの言葉に頷いた。リーミルの弟のグライスは、自分の婚礼の事ながら、いつものように、王の命令には全て従うとでも言うように、王の言葉に無言で耳を傾けていただけである。

グライスが未だ出会ったこともない将来の妻フェミナは、侍女団を連れて行列を仕立てて王都^{カイキ}にやってくる。次の王の婚礼ということで数日にわたる壮麗な結婚式をする準備は出来ているが、男たちの時間稼ぎのために式典の基幹は更に長く伸びるだろう。

グライスがちらりと姉のリーミルを眺める視線に、婚礼ではなく、戦への決意がこもっていた。ここにおいて、アテナイ軍ではなく、アトランティス人同士が争う状況が整ったのである。

「ロユラス。船はフェイルムの港に。ここの山の中は早く抜けねば」

市場を気ままにうろついていて好奇心を満たして帰途についていたロユラスに、そんな声をかける者があった。ロユラスは幼なじみの言葉に笑った。

「お前と俺が居る。それで何が物騒なのだ」

腕の立つ二人がいれば、どんな敵が襲ってこようと撃退してみせるといのである。確かに、フローイ国の都カイーキから北に延びてフェイルムの港に至る道は両側を切り立った崖に挟まれて大勢の兵を動かせる場所ではない。少数の敵なら二人で何とかなるだろう。

「ここいらは、反乱を起こした ^{ジェタレヴォー}半蛮族 どもの巣窟だ。いつ山賊に襲われるか」

そう言いかけたミドルが口ごもったので、ロユラスが唇を歪めて苦笑いをした。ミドルが口ごもったのは、ロユラスの前でジェ・タレヴォーという差別的な呼称を使ったことである。タレヴォーとはアトランティナ（アトランティス人）以外の異邦人を意味する蔑称である。このフローイには銀鉱山や良質な石切場が数多くあり、過去の遠征で連れてこられた数多くの捕虜たちが奴隷として長年働いている。その奴隷とアトランティナ（アトランティス人）との間に出来た子どもを ^{ジェタレヴォー}半蛮族 と呼んで蔑視しているのである。ただ、異邦人との混血という意味では、ロユラスも ^{ジェタレヴォー}半蛮族 に違いない。ミドルはそれに気づいて口ごもったのである。

「しかし、興味深い。ずいぶん ^{タレヴォー}蛮族 や ^{ジェタレヴォー}半蛮族 の多い土地だ」

彼はその理由を見抜いている。フローイは奴隷や ^{ジェタレヴォー}半蛮族 の安価な労働力があれば、鉱山から価値のある鉱物を採掘することが出来、労働力が多いほど産出量も増えて、鉱山の持ち主や国は富む。対照的なのは彼が生まれたルージ国で、資源と言え南部のザイガル山で産出する硫黄ぐらいのもので、人々は漁業と農業で身を立てている。奴隷がいたとしても、奴隷を養ってあまりある収穫が得られるわけではないから、ルージでは誰かに所有される奴隷身分の者などほとんど存在しないのである。

ロユラスという青年の面白さは、この時代に軍事や経済の仕組みに興味を持って居ると言うことである。彼はアトランティス各地を旅しながら、人や土地に接して好奇心を満たしていたのである。

「ふうん。この地で ^{ジェタレヴォー}半蛮族 どもをまとめあげて、乱を起こすのも面白いかもしれぬ」

この辺りの地形は、攻め込んできた大軍を防ぐのに防ぐのに丁度良く、その故に、い

くつかの砦に少数の兵が配備されているだけである。この少数の兵が守る砦を3つばかり破りさえすれば、フローイの都に直接攻め込めるのではないかと考えたのである。

「一度、^{ジェットレヴォー}半蛮族どもの首領と会ってみたいものだ」

「何をいうか、危険にもほどがある」

幸いにも山賊の襲撃にも遭わず、二人は港町フェイルムにたどり着いた。海を眺める二人の目が輝いていた。海に生活の場を求める二人に、陸地は狭すぎる。五日の航海で彼らは故郷のルージに帰る。

ミドルの脳裏に浮かぶのは、ロユラスに思いを寄せる妹のタリアの顔である。ただ、親友でありながらどこか本心を隠しているロユラスの横顔を眺めたときに首をかしげざるを得ないのである。ロユラスが思い描いているもの何だろう。ロユラスは口元に笑みを浮かべていた。

実のところ、ロユラス自身は具体的な展望やイメージがあるわけではない。ただ、アトランティス各地で眺めた光景が混じり合って、自らの運命が大きく動き出しそうな興味がわき上がってきている。

この時、このロユラスがアトランティスの命運を最も感じ取っていたかも知れない。人々の運命は急激に動き始めていた。

第一部 了

以下、まだ連載途中ですが、よろしければ続きをお楽しみください。

「[反逆児アトラス 第二部 戦乱の大地](#)」

<http://ncode.syosetu.com/n1223cb/>

作品を最後まで読んでいただいて、本当にありがとうございました。

この作品は、携帯小説サイト「魔法のいらんど」、ライトノベルが中心の「小説家になろう」のサイトを経て、読んでいただける方を求めてこちらのサイトへ移動したものです。

「小説家になろう」では、第二部の連載中です。第二部も完結と同時にパブーへと移すつもりですが、それまでの間、よろしければ次のリンクでお読みください。第一部の登場人物たちを巡って、アトランティスの大地に大きな戦乱が吹き荒れます。

「[反逆児アトラス 第二部 戦乱の大地](#)」

<http://ncode.syosetu.com/n1223cb/>

反逆児アトラス 第一部：運命の若者たち

<http://p.booklog.jp/book/113968>

著者：塚越広治

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ken19570420/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113968>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト